平成２６年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」

「幼保小合同研修の在り方に関する調査研究」

子供自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修

―　〈自主交流〉〈非指示的指導〉に焦点を当てて　―

続ける　広げる　つなげる

平成２７年３月

奈良市

本報告書は、文部科学省の幼児教育の改善・充実調査研究委託費による委託業務として、＜奈良市＞が実施した平成２６年度「幼児教育の改善・充実調査研究」の成果を取りまとめたものです。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

はじめに

奈良市の幼保小連携の昔、今、これから

本書は、平成 26（2014）年度に文部科学省の委託事業として取り組んだ、幼児教育の改善・充実調査研究事業「子ども自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修―「自主交流」「非指示的指導」に焦点を当てて―」の報告書です。今年度は、「続ける」「広げる」「つなげる」の３つをキーワードにして、計画し、準備し、実践し、振り返りました。

「自主交流」と「非指示的指導」は、昨年度のこの調査研究事業で始めた取組です。

本年度はこれを、続け（昨年度と同じ校園が、２年目としてより深く取り組みました）、広げ（新たに２つの校園のグループが、この取組を始めました）、つなげてきました（さらに周囲に浸透させ、定着させるしくみを考えました）。

ここで奈良市の幼保小連携を振り返ってみましょう。平成 12 年に「生きる力を育成することを目的とした将来の学校・園像を協議するための検討委員会」が設置され、中学校区別教育協議会（仮称）が編成されました。この段階は開拓期と言えるでしょう。同 14 年に「教育改革に向けた具体的な施策を検討する懇話会」が「奈良市教育改革３つのアクション」を提言し、中学校区別幼稚園・小学校・中学校の連絡協議会（仮称）が設置されました。そして学校教育課指導主事が校園長会と連携して、生活科を中心とした幼小連携を推進しました（同 16 年）。また国の総合施設モデル事業に奈良市も参画し、幼保一体化のモデル事業の中で、保育所を含めて幼児教育と小学校との接続を捉えました。この段階は展開期です。

平成 18 年には、文部科学省の委嘱事業として、「幼稚園から小学校へのなだらかな接続を目指して～幼小における子供観、指導観の違いを克服する接続時の実践～」を展開しました。このころから、大学教員が指導主事に助言する体制ができました。この段階は発展期と言えるでしょう。同 20 年からは、大学教員を推進委員に位置づけ、文部科学省の委託事業を毎年展開してきています。同 21 年には、懇話会提言「奈良市教育ビジョン」が「幼小連携」を重要課題にするなど、市としての体制も整えてきました。この流れは充実期として位置づけられると思います。

このように、開拓期、展開期、発展期、充実期を振り返ると、現在の奈良市があるのは、幼小、幼保、幼保小の連携を、「続け」「広げ」「つなげ」て来た結果であると考えられます。またこの最後の「つなげる」は、このような取り組みを他の市町村につないだり、０歳から 15 歳までを見通したカリキュラムにつなぐことにも発展させられます。過去と現在をつないで延長すると、未来が見えてきます。

本年４月からは新制度が本格施行されます。幼保小連携にとっては、まさに激動の時代になるかも知れません。このような中、充実期の次として、拡充期や飛躍期を迎えられるよう、私たちは、真摯に取り組んでいきたいと思っています。

平成 27 年３月

奈良市幼保小合同研修推進員会
委員長　清　水　益　治（帝塚山大学）

目　　次

はじめに

Ⅰ　研究の概要　頁

１．奈良市における幼保小連携と本事業について　…　1

２．研究の目的　…　1

１）自主交流を生むポイント

２）教員等の互いの理解を深めるための研修におけるポイント

３．研究課題　…　2

４．研究実践校園　…　3

１）鳥見幼稚園・鳥見小学校

２）神功幼稚園・神功保育園・神功小学校

３）認定こども園都跡幼稚園・都跡小学校

４）富雄北幼稚園

５．研究組織　…　4

６．研究構想図　…　5

７．研究の取組　…　6

１）「続ける」：２年目の研究実践校園での実践開発　…　6

（１）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導の実践開発（鳥見幼・小）

（２）非指示的指導から自主交流へつながる幼保小連携の実践開発（神功幼・保・小）

２）「広げる」：１年目の研究実践校園での実践開発　…　6

（１）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導の実践開発（認定都跡幼・小）

（２）幼小連携を始めるきっかけを生み出す実践開発（富雄北幼・小）

３）「つなげる」：開発した実践の普及と発展　…　7

（１）組織編成

（２）連携過程の可視化

（３）公開報告会

（４）先進地視察

（５）講演会

（６）研究集会

（７）新たな連携の模索

８．振り返りと評価　…　9

（１）実践者に対する調査

（２）講演会参加者に対する調査

（３）研究集会参加者に対する調査

９．成果と今後の課題　…　10

Ⅱ「続ける」: 幼保小連携の実践開発（研究実践校園２年目） … 11
１．効率よく効果を高める交流のために … 11
１）幼小連携を進めるために … 11
２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導 … 11
（１）学校・園の概要
① 鳥見幼稚園
② 鳥見小学校
（２） 取組の経緯 … 12
（３）実践の展開 … 12
① 1 年生と幼稚園児
② 2 年生と幼稚園児
③ 5 年生と幼稚園児
（４）取組の成果 … 22
２．計画交流から自主交流へ … 23
１）幼小連携を進めるために … 23
２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導 … 23
（１）学校・園の概要 … 23
① 神功幼稚園
② 神功保育園
③ 神功小学校
（２）取組の経緯 … 24
（３）実践の展開 … 26
① 計画交流の継続～１学期の取組～
② 自主交流の芽生え～計画交流から新しい広がりへ（１学期の取組）～
③ 自主交流の芽生え～２学期の取組～
④ 教員等間の柔軟な連携
３）取組の成果 … 36

Ⅲ「広げる」: 幼小連携の実践開発（研究実践校園１年目） … 39
１．学びを大切にする幼小連携 … 39
１）幼小連携を進めるために … 39
２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導 … 39
（１）学校・園の概要 … 39
① 認定こども園都跡幼稚園
② 都跡小学校
（２）取組の経緯 … 40

（３）実践の展開 … 41
① 幼小連携を進める保育者・教師間連携～１学期の取組～
② 子どもの学びをつなぐ自主交流の広がり～２学期の取組～
（４）取組の成果 … 49

２．幼小合同研修のきっかけ作りに向けて … 51
１）幼小連携を進めるために … 51
２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導 … 51
（１）学校・園の概要 … 51
① 富雄北幼稚園
② 富雄北小学校
（２）取組の経緯 … 52
（３）実践の展開 … 56
① きっかけの第一歩
② 合同研修に向かうための実践
（４）取組の成果 … 59

Ⅳ 「つなげる」: 開発した実践の普及と発展 … 60
１．組織編制 … 60
１）人事異動 … 60
２）合同研修 … 61
２．連携過程の可視化 … 61
３．公開報告会 … 62
（１）カンファレンスを通して共通理解した学び … 63
（２）公開報告会から見えてきた今後の方向性 … 64
（３）学びの共同体作り … 65
４．先進地視察 … 65
５．講演会 … 66
６．研究集会 … 67
７．新たな連携の模索 … 69
１）幼小の自然交流 … 69
２）幼保小交流と施設共用の工夫 … 70
３）私立幼保園と公立幼保小の連携 … 71

Ⅴ　振り返りと評価 … 72
１．方法 … 72
２．結果 … 74
１）実践者に対する調査 … 74
２）講演会参加者に対する調査 … 76
３）研究集会参加者に対する調査 … 79
３．まとめ … 81

Ⅵ　総合考察：成果と今後の課題 … 83
１．主な結果 … 83
２．本研究の意義 … 84
３．応用と発展 … 85
４．まとめ：成果と課題

（資料編）
資料１　鳥見　幼小連携　記録表 … 1
資料２　神功　保小合同交流会　指導案（保 5 歳児と小 1 年生） … 5
資料３　神功　幼保小合同交流会　指導案（幼 4, 5 歳児、保 5 歳児、小 2 年生） … 7
資料４　神功　幼保小連携　記録表 … 9
資料５　神功　小学校１年生の振り返り … 15
資料６　都跡　幼小連携　記録表 … 17
資料７　アンケート①様式（調査研究前） … 23
資料８　アンケート②様式（講演会） … 25
資料９　アンケート③様式（研究集会） … 28
資料１０　アンケート④様式（実践終了後） … 30
資料１１　先進地視察報告書 … 35
資料１２　アンケート①調査研究 … 36
資料１３　アンケート②講演会 … 37
資料１４　アンケート③研究集会 … 41
資料１５　アンケート④実践終了後 … 47
資料１６　済美幼　幼小連携 … 50
資料１７　伏見南幼　幼保小連携 … 53
資料１８　ひかり幼　公私立幼保小連携 … 54

Ⅰ　研究の概要

平成２６年度 文部科学省委託 幼児教育の改善・充実調査研究

子供自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修

―　〈自主交流〉〈非指示的指導〉に焦点をあてて　―

１．奈良市における幼稚園、保育所と小学校の連携（以下「幼保小連携」という）と本事業について

本市では「発達と学びの連続性を踏まえた教育の推進」をビジョンに掲げ、子ども・子育て支援新制度が本格施行される平成 27 年度に向けて、市立幼稚園・保育所を幼保連携型認定こども園に再編する計画とともに、モデル校で取り組んでいる小中一貫教育を全市で展開する計画を進めている。

学校・園の現状としては、平成 18 年度から４年間に渡り幼稚園と小学校の連携（以下「幼小連携」という）の調査研究を行ったことから連携の必要性が認識され、全市的に幼稚園、保育所と小学校（以下「幼保小」という）の交流活動や合同活動が実施されている。また、平成 22 年度からの３年間は幼稚園と保育所（以下「幼保」という）の一体化を視野に入れた幼稚園教員等の資質向上（研修等）の調査研究を実施したことにより、幼保の合同研修体制の充実や幼保の相互理解が進んできている。

こうした取組の中、次に課題となっているのが、幼児期の学校教育（幼稚園、幼保連携型認定こども園における教育。以下同じ）と小学校教育の接続（以下「幼小接続」という）の在り方である。幼小連携での交流活動の内容や、幼保の間で共有し深めてきた子供の見取りや援助、評価の在り方などが小学校教育につながっているのか、今、改めて問われている。そこで、本市がこれまで取り組んできた調査研究で培った実践的な研修体制を活用し、幼稚園教員および保育士と小学校教員（以下、教員等）が互いの教育の在り方について正しく捉えるための幼保小連携の実践開発、及び合同研修（以下「幼保小合同研修」という）の開発研究を行うこととし、本年度で２年目の調査研究となる。

２．研究の目的

本調査研究は、昨年度に引き続き、幼保小合同研修の在り方として、子供自ら育ち合う幼保小連携の実践を開発するとともに、その開発過程において、教員等が互いの教育の在り方についてどのように学ぶことができるのか、「自主交流」や「非指示的指導」に焦点を当てて明らかにし、「自主交流」に基づく子供自らが育ち合う幼保小連携の実践開発を行うことを目指す。

「自主交流」とは、小学校の教科学習における取組だけでなく、休み時間など、小学校生活のあらゆる場面で幼児・児童が自発的・自主的に取り組むフレキシブルな（柔軟な・順応性がある）交流活動や合同活動をいう。

「非指示的指導」とは、教員等が子供に答えとなる方法を与えたり、導いたりするのではなく、子供自らその方法を見出すための声掛けをし、見通しを持ちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導をいう。

特に、２年目となる今年度については、昨年度の成果と課題を踏まえ、教員等が互いの教育の在り方について更に理解が深められるよう工夫・改善を図る。

具体的には、『続ける』『広げる』『つなげる』をキーワードに、以下の幼保小連携の形成過程や活動過程を参考に、幼保小連携の新たな実践開発に取り組む。

１）自主交流を生むポイント

① 併設をきっかけに、教員等が信頼関係を築く
② 教員等の信頼関係の上に、幼児と児童の交流を計画的に展開する
③ 計画的交流を核にして「自主交流」を生む「仕掛け」を作る
④ 積み重ねた交流の上に、子供自らが交流を作り出す

以上は、幼小併設校で明らかになったポイントであるが、条件の異なる研究実践校園においても参考となるか、自主交流の実践開発を通して検証する。

つながる実践開発を行うことができるような幼保小合同研修の在り方を探ることとする。２年目となる今年度は、研究実践校園を昨年度の２組５校園に、新たに条件の異なる２組４校園を加えて４組８校園で実践研究を行う。

２）教員等の互いの理解を深めるための研修におけるポイント

① 互いの考えを知り、尊重する
② 子供一人一人を第一に考える
③ 学校園内の協力の下で開催
④ 内容を明確にし、限られた時間を有効に使う
⑤ 具体例に一つ一つの共通認識を持つ
⑥ 試しながら、進めながら、思考する
⑦ 無理に合わせない

以上は、幼保連携や幼保小連携に一定の実績がある校園で明らかになったポイントであるが、今年度に新たに研究実践校園となった園などにおいて参考になるか、合同研修の実践開発を通して検証する。

３．研究課題

本研究では次の３点を重点課題とし、研究実践校園での実践を中心に研究を進めた。

（１）**『続ける』**・・・昨年度の研究実践校園２組は、メインテーマを「自主交流」とした１組と「非指示的指導」とした１組であり、それぞれで成果や課題が明らかになった。そこで２年目は、互いの成果を活用し、昨年度の取組を改善するとともに、取組を継続的に行うことで、連携を日常化させる。そして、そのプロセスを再度検証し、幼保小合同研修の在り方を更に探る。

（２）**『広げる』**・・・新たな研究実践校園２組においては、昨年度の成果や課題を参考にしながら、各校園の実情に合わせた実践を行い、幼保小合同研修の在り方を探る。また、公開及び研修を通して、各校園の取組についての情報交換を基に、本研究に生かし、他校園への普及を促進する。

（３）**『つなげる』**・・・昨年度の研究実践校園から子供自ら育ち合う幼保小連携の実践事例が示された。接続期のみならず小学校高学年との交流についても実践が紹介された。研究実践校園では特に「自主交流」「非指示的指導」に焦点を当てて、幼児や児童の発達と学びがつながる実践開

発を行い、現在策定を進めている奈良市立こども園カリキュラムに繋げていく。また、昨年度に引き続き、アンケート調査の実施において、幼保小連携をつなげる成果をまとめる。

４．研究実践校園

１）鳥見幼稚園・鳥見小学校

奈良市の北西部に位置し、近郊地域へのベットタウンとして人口が増加するものの、近年は少子高齢化が進み、核家族の家庭が多くなっている。様々な人とかかわろうとする反面、相手の思いや考えを受け入れることに課題がある幼児や保護者が多い。

平成 22 年に鳥見小学校東館を幼稚園舎として改築し、平成 23 年 4 月から小学校敷地内に幼稚園が移転する。園長は小学校長の兼務である。園庭は小学校運動場の北東部分にフェンスに囲われてはいるが出入りは自由にでき、小学校校舎からも近い場所にある。

幼小連携では、併設という利点を活かし、教員等間の連携を基盤に、施設の利用や計画的交流を核にしながら、子供が自ら取り組む「自主交流」を環境整備や援助を通して促している。人とかかわる力を養い、小学校への滑らかな接続を図っている。

２）神功幼稚園・神功保育園・神功小学校

奈良市の北部、自然環境に恵まれた平城ニュータウン内にあり、幼保小は互いに隣接・近接している。少子高齢化が進み、転入家庭も多い地域であることから、コミュニケーション能力に課題が感じられる。幼保小連携では、これまでの幼保の「保育者の協働と教育的意思決定」の調査研究の成果を基盤に、小学校教育に向けての教育の目的・目標の連続性・一貫性を確保し、就学前と小学校以降をつなぎ、幼児・児童が自ら育ち合う実践を目指している。

３）認定こども園都跡幼稚園・都跡小学校

奈良市の中部にあり、ユネスコの世界遺産「古都奈良の文化財」である平城宮跡・薬師寺・唐招提寺に囲まれた所に位置し、幼小は近接している。付近には児童公園などの遊ぶ場が少なく、友達とのかかわりが少ないことから、園での活動が重要である。幼小連携を通して、教師間で子供の学びの連続性について共通理解を図り、子供の思いを引き出す非指示的指導を活かして、互いの教育要素が含まれた新たな交流の実践を目指している。

４）富雄北幼稚園・富雄北小学校

奈良市の北西部に位置し、通勤の利便性や駅前開発事業の推進に伴い、以前の田畑や里山はことごとく宅地化され、幼稚園前道路を含め年々、地域の交通量が増加している。そのため、子供同士や地域の人とのかかわりが減ってきている。地域の中で幼児を育てる意識の啓発に努め、教師間の連携を基盤に、一人一人を大切にした学びのつながりや、人とのつながり深める幼小連携の実践を目指している。

５．研究組織

〇奈良市幼保小合同研修推進委員会　12 名

幼児教育を専門とした学識経験者　５名

市立幼稚園園長　２名

市立保育園園長　１名

市立小学校校長　２名（内１名は幼稚園長兼務）

奈良市教育委員会事務局 学校教育課課長補佐　１名

市長部局 こども園推進課課長補佐　１名

推進委員会は調査研究全体を総括し、研究実践校園での公開合同交流会や合同研修についての指導助言、及び本調査研究の推進を図った。また、推進委員の研究実践校園で「子供自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修」の開発を行った。

〇研究部員　10 名

幼稚園教員　４名

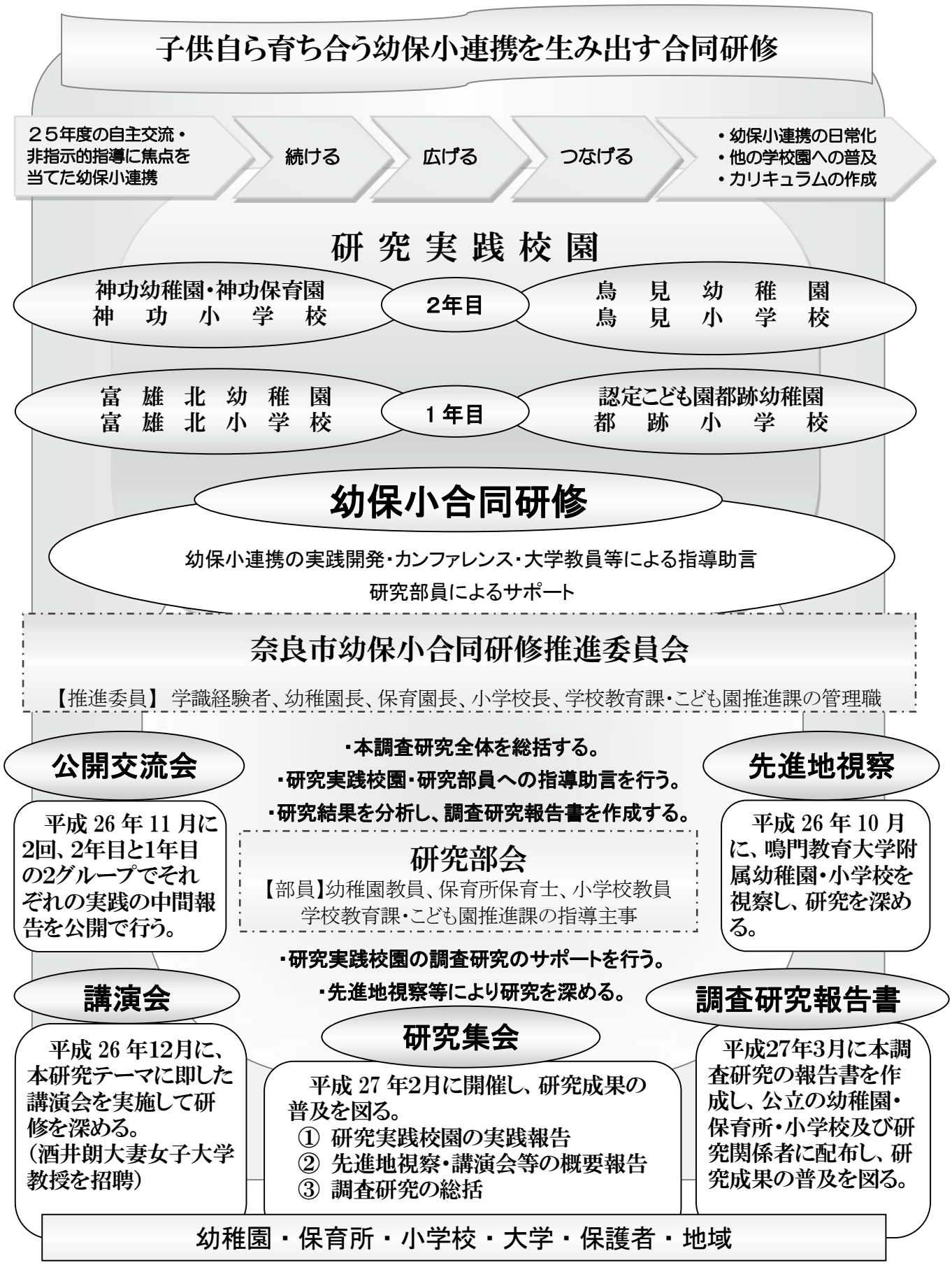
保育園保育士　１名

小学校教員　３名

奈良市教育委員会事務局　学校教育課係長　１名

市長部局　こども園推進課指導主事　１名

６．研究構造図


子供自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修
２５年度の自主交流・非指示的指導に焦点を当てた幼保小連携
続ける
広げる
つなげる
・幼保小連携の日常化
・他の学校園への普及
・カリキュラムの作成
研究実践校園
神功幼稚園・神功保育園
神功小学校
2年目
鳥見幼稚園
鳥見小学校
富雄北幼稚園
富雄北小学校
1年目
認定こども園都跡幼稚園
都跡小学校
幼保小合同研修
幼保小連携の実践開発・カンファレンス・大学教員等による指導助言
研究部員によるサポート
奈良市幼保小合同研修推進委員会
【推進委員】学識経験者、幼稚園長、保育園長、小学校長、学校教育課・こども園推進課の管理職
・本調査研究全体を総括する。
・研究実践校園・研究部員への指導助言を行う。
・研究結果を分析し、調査研究報告書を作成する。
研究部会
【部員】幼稚園教員、保育所保育士、小学校教員
学校教育課・こども園推進課の指導主事
・研究実践校園の調査研究のサポートを行う。
・先進地視察等により研究を深める。
公開交流会
平成 26 年 11 月に2回、2年目と1年目の2グループでそれぞれの実践の中間報告を公開で行う。
先進地視察
平成 26 年 10 月に、鳴門教育大学附属幼稚園・小学校を視察し、研究を深める。
講演会
平成 26 年12月に、本研究テーマに即した講演会を実施して研修を深める。（酒井朗大妻女子大学教授を招聘）
研究集会
平成 27 年2月に開催し、研究成果の普及を図る。
① 研究実践校園の実践報告
② 先進地視察・講演会等の概要報告
③ 調査研究の総括
調査研究報告書
平成27年3月に本調査研究の報告書を作成し、公立の幼稚園・保育所・小学校及び研究関係者に配布し、研究成果の普及を図る。
幼稚園・保育所・小学校・大学・保護者・地域

７．研究の取組

１）「続ける」：２年目の研究実践校園での実践開発

（１）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導の実践開発（鳥見幼・小）

昨年度から引き続き、小学校内に幼稚園を併設した実践校園において、「自主交流」に基づく幼小連携の実践開発に取り組んだ。昨年度の研究実践では、計画的な交流を重ねる中で、子供自らかかわる姿が見られたし、自発的に取り組む「自主交流」の事例が見られていた。また、「非指示的指導」が活かされるには、子供同士が考えを出し合える時間の配慮や温かい教師のまなざしや見守りも大切であることが分かった。

本年度は、幼稚園長を兼務している小学校長及び幼稚園主任教諭の人事異動があった。こうした状況を踏まえつつ、いかに効率よく教員等間で打合せ等を行い、幼小連携を行う上での効果を上げながら続けていくことができるかを検討し、「非指示的指導」にさらに力点を置いて調査研究を進めてきた。

本研究では、互いのカリキュラムの内容の接点を探り、「自主交流」と「非指示的指導」の重要性を理解した上で交流の方法は変わっても、何をつないでいくことで幼小連携を続けていくことができるのかを明らかにした。また「自主交流」を生む、教員等の協働についても引き続き検討し、これらの成果を他の学校・園でも活用できる参考事例としてまとめた。

（２）非指示的指導から自主交流へつながる幼保小連携の実践開発（神功幼・保・小）

昨年度から引き続き、幼保小連携、幼保合同研修の実績のある３校園において、「非指示的指導」に焦点を当てた実践開発に加えて、「自主交流」の実践開発にも取り組んだ。

昨年度の研究実践では、生活科を中心とした連携を見直し、新たな活動内容を検討した。さらに交流活動での教員等の具体的指導の在り方を「非指示的指導」に焦点を当てて捉え直し、幼保小が互いの違いを超えて連携していくためのポイントがわかった。

本年度は、３校園で集まる時間の調整が難しいと感じた昨年度の課題を乗り越え、限られた時間の中で、教員等での打合せ等を行う内容を明確にし、無理なく続けていくための教員等の協働体制及び計画的交流を核にして「自主交流」を生む「仕掛け」を作る実践研究の成果を他の学校・園でも活用可能な参考事例としてまとめた。

２）「広げる」：１年目の研究実践校園での実践開発

（１）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導の実践開発（都跡認定幼・小）

小学校と幼稚園は道を隔てて近接した環境にあるが、これまで断片的な交流はしていたものの幼小連携の発展にはつながりにくかった。都跡幼稚園は平成 26 年度より幼稚園型認定こども園として三年保育が開始された。この三年の教育課程を小学校教育における学びにつなげていくために、教員等の相互理解を図り、連携の糸口を探り、きっかけを作って新たな「自主交流」の在り方を明確にする実践開発に取り組んだ。

幼小連携を生み出したのは、幼稚園から小学校側に働き掛けたことをきっかけとし、合同研修の場を設け、小学校第１学年の国語の単元の中に幼小連携を位置付け、「非指示的指導」に焦点を当てながら、「自主交流」を生む仕掛け作りを重ねて交流を広げていく実践研究を進め、その成果を他の学校・園でも活用可能な参考事例としてまとめた。

（2）幼小連携を始めるきっかけを生み出す実践開発（富雄北幼・小）

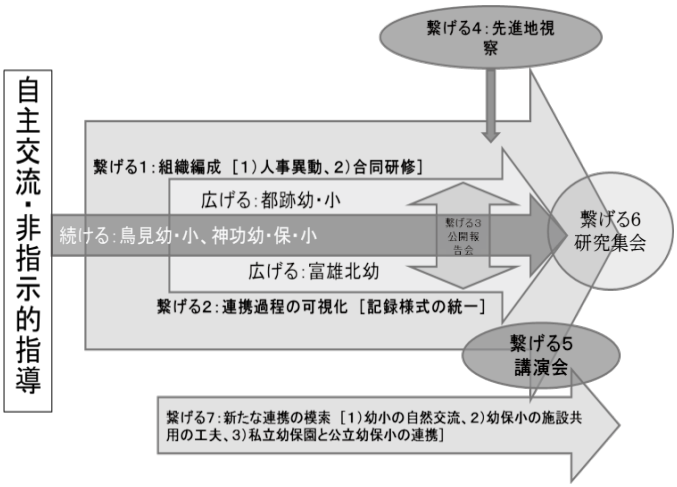
小学校と幼稚園は、交通量の多い幹線道路を挟んで位置している環境にある。幼小連携の重要性は意識しているものの、小学校の児童数がかなり多いことや、交通量の多い道路を横断する立地条件という理由もあって、幼小連携を進めるには至りにくい状況があった。

こうした実情を踏まえ、本年度は、小学校教師とのかかわりを広げ、地域行事に参加するなど、地域を巻き込んで園児が小学校教師や児童と顔を合わし、つながるきっかけを作る実践開発に取り組んだ。

また、教育内容の相互理解を図るための工夫や、特別支援教育に関する研修を共に進めるなど、共通認識を持って校園間の協力体制を作り、園児・児童一人一人の育ちをつなぐ幼小連携の広がりを目指した実践研究の成果を他の学校・園でも活用可能な参考事例としてまとめた。

3）「つなげる」：開発した実践の普及と発展

右の図は、本研究で「つなげる」に関して行った取組を示したものである。「つなげる１」から「つなげる７」まで７つの取組を行った。横が時間軸で、左から右に時間が流れている。赤で示した矢印は、自主交流・非指示的指導を「続ける」２つのグループを示している。黄色の矢印は、その取組を「広げる」２つのグループである。水色あるいは青色の矢印や丸が「つなげる」の取組である。以下では、これらの取組の概略を述べる。



（1）組織編成

人事交流に関して、「続ける」には、日頃の共通理解が重要であること、大きな人事異動があった場合は、管理職の力が重要になることがうかがえた。

（2）連携過程の可視化

記録表を統一することで、どちらがどのように働き掛けたのか、どのような内容を伝え、どんな反応を示したのかなど、各校園同士の働き掛けの形が見えやすくなり、様式に書かれた内容を読むだけで、当時のやりとりが想像できる。また日時を追って読み進めれば、連携過程をたどることができる。いつ頃、何をすればよいかも理解できる。さらに、この記録を詳しく分析すると、実践者の意識の変容や連携を促進する要因をも読み取ることができ、情報共有に役立つ。

（3）公開報告会

２年目と１年目の校園がペアを作り、中間報告を行い、短時間で効率のよい研修を行う。他園の教員間とカンファレンスを通して、非指示的指導・自主交流について互いに学び合い、合同研修の在り方について共通理解を深めることにつながった。

（4）先進地視察

幼稚園、小学校それぞれの立場から、幼小連携を進めるために、子供自ら考え行動し、子供も自身の可能性を最大限に引き出す環境構成の工夫や教員等の援助等について、鳴門教育大学附属幼稚園を視察する。

幼小の学びの連続性について理解を深め、自校園での実践研究や、今後の実践計画に活かす学びの場となった。

（5）講演会

市内全域で幼保小連携を推進するために、幼保小の教員等に向けて、「幼児期の教育と小学校の接続について」大妻女子大学　教授　酒井　朗氏を招聘し、講演会を行う。

経験の浅い教員等からベテラン教員等に管理職まで様々な年齢層が参加し、本市全域での拡充を目的とし、幼保小連携、及び幼保小接続について理解を深めることができた。

（6）研究集会

他の学校・園への普及を図る機会として、市内の公私立小学校・幼稚園・保育所の教員等、市内大学・短期大学の学識経験者を対象に、研究集会を行った。

４組の実践校園による実践開発の事例発表を通して、本市の取組の独自性・先進性が明らかにし、「自主交流」を生む教師の援助や「非指示的指導」の具体的な在り方、幼保小合同研修を進めるポイント、子供の学びの姿についても、他校園に広めるようにした。

（7）新たな連携の模索

奈良市のその他の校園への幼保小連携の実践拡大に向け、新たな連携の在り方を探る校園の実践を挙げている。

幼小の自然交流から生まれる計画交流を行う市立校園、幼保小連携を進めながら、施設共用の工夫を行っている市立校園、私立幼保と公立幼保小による組織拡大連携を行う３グループについては、今後の奈良市の幼保小連携における新たな実践校園として期待できる。

８．振り返りと評価

振り返りにはアンケートを用いた。

（1）実践者に対する調査

実践者に対する調査は、自主交流と非指示的指導について項目を設定し、実践後と年度当初にどのように考えるかを４段階で評定を求めた。自主交流については、「信頼構築」「計画的交流」「仕掛け作り」「交流の積み重ね」の４領域に、それぞれ３項目を設定した。実践後は、全ての項目で理解が深まり、実践も可能になった。非指示的指導については、２項目を設定し、「理解」「実践」「指導」の程度を４段階で評定を求めた。その結果、いずれの項目でも、実践後には、理解は十分であるが、実践や指導は困難であることが明らかになった。

（2）講演会参加者に対する調査

講演会参加者に対する調査では、「あなたの幼稚園・保育園と小学校との間では、連携を行っていますか」と尋ねて、「積極的に連携している」と回答した者と「連携しているが十分ではない」と回答した者を比較した。15 の連携を挙げて、行っている連携に〇印を付けてもらったところ、「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」と「保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会」の２つの連携については、連携の程度に顕著な差が見られた。保幼小合同研修会を管理職が開くこと、市を挙げてのその体制作りが必要であることが示唆された。

連携を行っている場合は、「今後さらに連携するとしたら、どのような連携を行いたいか」、連携を行っていない場合は、「今後実施するとしたら、どのような連携を行いたいか」を〇印を付けてもらった。その結果、４つの連携「小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観」「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」「小学校での授業体験」「交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ」で、連携の程度に顕著な差が見られた。「十分ではない」と感じている者が、より交流し、「積極的に交流している」と感じるようにするためには、これら４項目の優先順位を高めることが必要である。

「幼稚園･保育園と小学校との連携や接続において，どのようなことが課題となっていると感じますか」を尋ねて、〇印を付けてもらった。その結果、「日程調整が難しいこと」は、60%を超える参加者が課題として選んだ。「連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「交流活動時間の確保」「校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「連携の具体的な内容や手順を決めること」「担当者が異動した後の継続」の５項目では連携の程度による差が顕著に見られた。「担当者が異動した後の継続」は「積極的に連携」の者が、他は「十分ではない」の者が多く選んだ。「積極的に連携」の者と「十分ではない」の者の間に、連携や接続に関して情報を共有する機会を設ける必要性が示唆された。

（3）研究集会参加者に対する調査

自主交流について、「よく理解できた」「だいたい理解できた」「あまり理解できなかった」「まったく理解できなかった」から選んでもらったところ、「だいたい理解できた」が 62.2%、「よく理解できた」が 35.1%であった。非指示的指導の理解度も同様に尋ねたところ、「だいたい理解できた」が 59.5%、「よく理解できた」が 31.1%であった。

自主交流について「幅広く広げることができる」「広げることができる」「少し広げることができる」「広げることができない」から選んでもらったところ、「広げることができる」が 58.1%、「少し広げることができる」が 29.7%であった。非指示的指導について「十分実践することができる」「実践することができる」「少し実践することができる」「実践することができない」から選んでもらったところ、「実践することができる」が 55.4%、「十分実践することができる」が 20.3%であった。

理解、拡張、実践共に高い値であった。

これらの評定には、所属（幼稚園、保育園、小学校）、職（管理職、保育士・教諭・講師）、経験年数（15 年以下、16 年以上）、幼保小合同研修の回数（年６回以下、年７回以上）による違いが見られた。

９．成果と今後の課題

本研究の成果は次の３つの内容を明らかにしたことにある。これらの成果には、①幼保小連携を始めるきっかけ作り、②幼保小連携を深めるための資料、③新たな連携への第一歩という３つの意義がある。

（１）続ける：自主交流を子供に求めるには、計画交流の積み重ねと仕掛けが必要である。各校園が独自の業務を充実させながら、効率よく、かつ効果の高い連携を行うためには、計画段階で様々な工夫が必要である。

（２）広げる：交流が途絶えていた校園については、教員等間のつながりを持つことがきっかけ作りなる。断片的な交流を子供の学びをつなげたり、職員の共通理解を深めるには、小学校の単元に、幼稚園の内容を組み入れ、互いのねらいの達成をめざす。

（３）つなげる：つなぎには、様々なレベルがある。つなぎを効果的に行うためには、連携過程の可視化、研修の有効活用、組織の力を利用することが有効である。

本研究では次の３つの課題が明らかになった。

① 携が弱まる、あるいは途絶える原因の究明

② 保育士と幼稚園教諭、保育園と幼稚園の違いを埋めること

③ 研修システムの構築

今後は、これらの課題を解決するための実践研究が必要である。

Ⅱ「続ける」: 幼保小連携の実践開発（研究実践校園 2 年目）

１．効率よく効果を高める交流のために（鳥見幼稚園・鳥見小学校）

１）幼小連携を進めるために

子供の発達や学びの連続性という観点から、幼小連携は有効な手段であり大切に取り組んでいくべきことは誰もが認識するが、それと同等かそれ以上に困難なことも多く存在する。

例えば、それぞれ多忙な毎日の中での打ち合わせ、交流の計画等である。鳥見幼稚園・小学校の場合は同じ敷地内にあるため、離れている学校・園に比べればまだ行き来しやすいとは言え、時間を設定するとなれば両方の放課後ということになるため、どうしても勤務時間外までに及ぶこともある。そうしてまで成果を出さなければただ忙しくなるだけの形式的な取組になってしまうため、良いとは思われない。いかに効率よく打合せ等を行い、効果は最大限になるようにするかが課題であった。

そこで工夫した点は、

① 打合せまでに土台となるベースの案を用意する

② 度の初めに見通しを持って計画し、細かい点は随時修正するという形にする

③ れぞれの指導計画に共通するものを交流の内容として取り上げる、

ということである。

２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導

（１）学校・園の概要

奈良市西部に位置する鳥見幼稚園・小学校は、小高い丘にあり周りは日本住宅公団が昭和 40 年頃に開発した富雄団地をはじめ落ち着いた住宅街や公園が多い。両校園に対する周りの関心も高く、地域の方や保護者に見守られている。

鳥見幼稚園は以前には大規模園として他の場所にあったが、園児数の減少により小学校の余裕教室を利用して４年前に併設された。同じ敷地内にあるということで、幼稚園児は小学校の様子を見ながら過ごすことができる。チャイムを聞いてその存在を知っているだけでも、小学校に入学する際の不安が少し軽減されているということを話す保護者もいる。渡り廊下で小学校の校舎と幼稚園の園舎がつながっているため幼小連携の交流はしやすい環境にある。

また、教員等同士も日常的に交流があり、小学校の職員朝礼に幼稚園からも参加したり、教員等の親睦会が共同であったりと顔を合わせる機会も多い。

行事についても、避難訓練を共同で行うなど幼稚園と小学校が非常に身近な存在であると言える。

① 鳥見幼稚園

昭和４２年４月１日付けで設置・開園される。奈良市富雄北小学校区の二名、三碓両町に渡る近鉄富雄駅西部の奈良市地区一帯に日本住宅公団による富雄団地の造成が進められ、その人口の増加に伴い新設された。園の教育目標は「なかまと共にいきいきと活動し、たくましく生きる幼児の育成をめざして」で、園児は落ち着いた環境の

中で明るく過ごしている。

園児並びに職員数（園児５２名、職員５名）

学年	学級数	園児数（人）	職員数
二年保育　４歳児	1	２９	園長１(小学校と兼務) 主任教諭１・学級担任２ 業務員１　　合計５
二年保育　５歳児	1	２３	
合計	2	５２	

② 鳥見小学校

昭和４１年に開校される。教育目標は、「確かな学力と温かい心を持った笑顔あふれる鳥見っ子の育成」である。明るく前向きで活発な児童が多いが、一方で自分の思いを上手に伝えられないという課題もある。

児童並びに職員数（児童４０２名、職員２７名）

学年	学級数	児童数（人）	職員数
1	2	５８	校長１ 教頭１ 学級担任１８ （特別支援学級を含む） 専科等７ 合計２７
2	3	７２	
3	2	６５	
4	3	７０	
5	2	６４	
6	2	７３	
合計	１４	４０２	

（２）取組の経緯

幼小の併設をきっかけに幼小連携の取組を始めて３年目、本調査研究における「自主交流」の取組の２年目になる。昨年度の取組を計画的交流（第一次）と捉え、今年度は昨年度の取組の内容を精選し、自主交流（第二次）を発展させる年と考え、自主交流に加えて「非指示的指導」という点に重きを置いて取り組んできた。

「～ねばならない」「～させられている」のではなく、互いが交流することで子供達が成長してくことを実感できるものとしたいと考えてきた。そのために無理なく自然な形で交流していくことを大切にした。

担当者が変わっても続ける・広げる・つなげる関係を構築していきたいと考えている。

（３）実践の展開

① １年生と幼稚園児

「であおう！」

園児と児童が出会うことから始まり、各グループ活動の役割分担をし、協力・協調しながら一年間の交流と連携を深めるようにする。

６月４日に、平成 26 年度初めての幼稚園と小学校の交流が始まる。実施日までに、あらかじめ幼稚園教員と小学校教員でグループ分けをしておく。児童の実態を見て更に交流グループを考える。人数に応じて、幼稚園が１人で小学校が２人の場合や、その逆の場合や幼稚園が２人で小学校も２人の４人グループもある。

交流日当日は、ゲームで気持ちほぐしをしたり、自己紹介をしたりしながら互いの顔と名前を覚える。また、それぞれのグループ名を考える。グループ名を決めていくために、主に小学校の児童が園児をリードするように促す。グループ名が決まれば中心になっている教師に報告し、同じネーミングにならないように配慮する。教師は、まとまりにくいグループにどのような名前がよいかのヒントをアドバイスしたり、困っていることを聞いたりする側に回るようにする。

一年間活動していくグループは、「なかよしグループ」と称する。

「自主交流」

○　毎週木曜日に、小学校の中休みや昼休みの時間に、学年を問わずに交流できるようにする。小学校昇降口掲示板に幼稚園で計画している遊びを掲示したり、幼稚園、小学校の各学年担任が幼児や児童に知らせたりし、自主的に参加しやすい環境作りを行う。

○　教員等は、園児、児童が、互いの遊ぶ姿を見る中で、自ら“やってみたい”と思い参加できるよう、また、意欲的に活動する姿へとつなげていけるように、様々な興味や経験を基にしながら幼小の教員等で話し合い、計画・実施する。

○　園児、児童が普段生活している姿だけでなく、異年齢、異校種の学年の友達とかかわる中で、どのような姿を発揮しているかなどを捉え、そこでの経験や自信を更に生活や遊び、学習の中で活かせるようにする。

（幼稚園）　・いろいろな学年の児童や小学校教員と交流することで、身近な存在として感じる。
　　・児童と一緒に遊ぶことで、親しみや憧れの気持ちを抱き、積極的に遊びに参観したり、一緒に遊んだりしようとする。

（小学校）　・自主的に活動することができる。
　　・相手の立場を考えて一緒に活動する。

１学期	ダンス「グッドラッキー」 シャボン玉 砂遊びや水鉄砲
２学期	アンケートを実施し、自主交流でどのようなことをしたいか探る ラジオ体操やダンス「グッドラッキー」 綱引き ドングリ転がし 木の実を使った制作 折り紙
３学期	ドッチボール 縄跳び、鬼遊び 凧揚げ

事例１．シャボン玉したいな　　６月中旬

（ねらい）　○　小学生のシャボン玉をする様子に刺激を受け、試してできた喜びを感じる。

（環境構成）○　針金で作ったポイのような道具、ストロー（３本束ねたもの、細いストロー、太いストロー)、カップ、石鹸、おろし器、消毒液

シャボン玉に興味を持ち遊ぶ。ストローを口に当て息を吹き入れるが、なかなかうまく膨らまない。何回も挑戦しているうちに、成功する幼児が出始めるが、できないことを嫌がり１度きりでやめてしまう様子もある。

昼休み、小学１年生から６年生の児童が掲示板を見て「シャボン玉したいです」と、やって来る。「わあ、シャボン玉や。懐かしいなあ」と１年生は喜び、早速遊び始める。6年生は、いろいろある道具を見て「どれにする」「この大きいのしてみたい」と、友達と相談しながらいろいろ試す。初め、小学生の遊ぶ勢いに押されてしまい、少し恥ずかしそうにしていたＡ児らも、小学生の楽しそうな様子に引かれ、傍で一緒に遊び始める。教師は、すぐには声を掛けずに、近くでＡ児の様子を見守る。

しかし、Ａ児は何度チャレンジしてもすぐにシャボン玉が壊れてしまう。その様子を見た小学生が、「速い、速い、もっとゆっくりしやな割れてしまうよ」「優しく吹いたらうまくできるで」と、声を掛ける。小学生がＡ児に寄り添いゆっくりと待ちながら優しく教えてくれたことで、Ａ児のシャボン玉はたくさんできた。空高く飛んでいくシャボン玉の様子を眺め、手を振りながら「どこまでいくのかなあ」と、嬉しそうに見つめていた。

＜反省・評価＞

幼児の中で、中休み・昼休みに遊びに来てくれる小学生とかかわろうとする姿が増えてきている。小学生の遊ぶ様子に刺激を受け一緒に遊ぶ中で、「あんなふうにしてみたい」などの憧れの気持ちを抱いたり、小学生の言葉や教えてくれる内容に集中し、耳を傾けたりする姿が見られるようになってきた。教師は、幼児、児童の思いや気付きを受け止めながら、かかわりあう中でできる喜びを味わえるよう、意識しながらかかわることが大切である。

「小学校の運動会から自主交流へ、自主交流から幼稚園の運動会へ」

○　互いの経験や幼児と児童が興味を持っていることを活かし自主活動で遊ぶ内容を知らせたり、幼稚園の運動会の種目に取り入れたりしながら、幼児と児童が自ら意欲的に取り組めるようにする。

○　１、２年生と５歳児が一緒に綱引きをする。自主交流で１年生や幼稚園児、互いの担任教師らが参加し、幼稚園庭、小学校庭にて綱引きをする。幼児や児童の様子に合わせ、綱の長さや場所を調節する。また、５、６年生が自分達の運動会で綱引きを経験していることを活かし、あらかじめ教えてくれるように声掛けをする。

○　５、６年生を中心としながら、小学校の運動会で演じたダンスや夏休みに各町内で経験しているラジオ体操などを、幼稚園運動会の種目に取り入れ、幼稚園児、小学生、教員、保護者や来賓の方々、みんなで行えるようにする。

事例２．ダンスしよう！体操もできるよ　　６月～10 月

（ねらい）　○　小学生と一緒に、ダンスをしたり体操したりすることを楽しむ。

（環境構成）○　自分達で好きなときにダンスやらラジオ体操ができるよう、CDデッキを準備する。

○　ダンスやラジオ体操をする場所をあらかじめ決めておき、自由にいつでも参加できる場所や雰囲気を作る。

幼稚園の園庭で「グッドラッキー」の曲が流れると、「あっ、グッキーや」と、自然と小学生が集まってくる。始めは、個々に音楽に合わせて体を動かし楽しみ、そこに園児も参加して真似て遊んでいた。何度も繰り返し一緒に楽しむ中で、少しずつ「お兄ちゃん、おねえちゃんのように踊りたいな」という気持ちが、園児にも芽生える。しかし、園児には動きが速くてよく分からない踊りもあったので、「教えてください」と、小学生に頼みにいくことになった。

「一緒にダンスをしようよ」　　6 月～7 月		
ねらい　　○小学生のダンスを真似したり、友達と一緒に踊ったりすることを楽しむ。		
幼児と児童の活動の様子	教員の援助・環境構成	教員の意図
・小学校掲示板に「ダンスを教えにきてください」と事前に知らせていたことから、園庭で遊んでいる時間帯に合わせて小学生 10 人程と 1 年生の担任教師、小学校の教師が園庭に遊びに来る。	・芝生広場に幼児や小学生達が踊ることができる場を設け、デッキや CD を用意する。	・幼児がダンスをしやすいように場所の確保やデッキなどの道具を準備し、楽しく活動ができるようにする。
・幼児と児童が互いに向かい合い、「グッドラッキー」のダンスを踊っていると、周囲で遊んでいた児童も一緒になりダンスする。 B 児の「楽しいな」「でも難しいな、もう一回踊りたい」との反応に、教師も一緒になり再度児童にお願いすると「いいよー」「まだ踊り足りなかったから、丁度いいわ」と、再度ダンスを楽しむ様子が見られた。	・A児に「どんなダンスかな」と期待を膨らませるような声掛けをする。 ・「Bくん、上手だね」と一生懸命にダンスしている姿を認める。	・教師もダンスに参加することで、楽しさを共感できるようにする。 ・楽しかった動きや真似したい動きなどを他児に知らせることで、より意欲的にダンスに参加できるようにする。
・児童や友達と一緒にダンスを楽しんでいる途中で、チャイムが鳴る。児童は「あー、鳴っちゃった」残念そうにしながらも、「また来るからね」と園庭を後にする。その姿に自然に「ありがとうございました」と礼を言い、園児も部屋に戻った。保育室では、「楽しかった」「もう一回、踊っていい」と教師に話し掛けたり、「また来てくれるかなあ」と友達と一緒に話したりしていた。	・「楽しかったね」「また、一緒にダンスしたいね」と幼児の思いを受け止め、共感する。	
・その後も「先生、グッキー踊りたい」「音楽鳴らして」と教師を呼びダンスをする姿があったので、毎日同じ場所で音楽を鳴らす。踊っていく中で「どんなんやったっけ」と幼児が考えている幼児がいると、音楽を聞き付けた児童がやって来て、振り付けを教えてくれる。	・幼児の思いを受け止めながら、小学生とのかかわりを見守る。	・幼児と楽しかった思いを共感し、次回を楽しみに思い期待を膨らませられるようにする。

・この日から、自主交流以外の時間でも、「何してるの」など、児童から気軽に声を掛けてくれ遊びに参加しようとしたり、教えに来てくれたりすることが増える。また、園児らにも、自分達で「一緒にしよう」と声を掛けたり、小学生の教えてくれる言葉に集中して耳を傾けたり、じっと動きを見つめ、真似たりする姿が多く見られるようになる。		

＜反省・評価＞

○　小学校の運動会でも経験していたダンスなので、児童、園児ともに興味が高く、喜んで参加する幼児の姿が見られた。好きなときに参加し、友達と一緒に体を動かしているという十分実感できるように、園庭の同じ場所で毎日ダンスを行えるようにしたところ、いつでもしたいときにできることや、“ダンスをしよう”との思いを持ち、自分から参加しようとする姿が多く見られた。幼児や児童の興味に合わせて、好きなときに自由に参加し楽しめるようにしたり、教え、教えられる機会が持てるようにしたりしたことが、次の自主的な交流の姿へとつながったように思われる。

今回の取組のように、幼児や児童の興味や経験を生かし積み重ねていきながら、今後も自然な交流を目指し続けていきたい。

事例３．綱引きしよう。ヨーイショ！　　９月～１０月

（ねらい）　○　小学生や友達と一緒に、綱引きをすることを楽しむ。

（環境構成・援助）　○　園児が無理なく参加できるように、幼児、児童の遊ぶ様子に合わせ、場所を移動したり調節したりできるようにする。

○　体格や力加減、安全面を考慮した上で、１、２年生と引き合えるようにする。

○　経験に合わせて、綱の長さや太さを調節する。

運動会が近付いてきたので、1年生の担任教師とも連絡を取り合いながら、園庭に遊び用の少し短い縄を準備し置いておく。「先生これ知ってる、綱引きや。していいの」と、早速近くで遊んでいた幼児たちも参加し、綱の引き合いが始まる。個々が綱を握り締め、思い思いのタイミングで引っ張るため、左右に綱が触れて倒れてしまったり、どちらかに綱が引っ張られたりする。

その様子を、フェンスの外から見ていた小学生が「遊びに行っていい」と言い、参加する。1年生の担任教師も加わり、幼児、児童対抗戦で綱の引き合いを楽しむ。力一杯綱を握り締め引き合う感触を感じる中で、自然と綱を握る手にも力が入る。途中「大変、負けてしまう」という声が揚がると、近くで遊んでいた幼児や児童らが聞き付け加勢する姿もあった。見る見るうちに、綱を引き合う人数は増えていった。

「あー疲れた」と、力尽き園庭の芝生の上に寝転がる幼児や児童たち。まだまだ続けたい気持ちはあるが、小学校のチャイムが鳴ったので、「ねえ、今度もしよう」と次回を期待し、部屋に戻る。

その様子を見ていた高学年の児童たちが「これは綱引きと違うで。順番に引くねん」と、フェンスの外で見ていた様子を受け、「じゃあ、今度教えてあげてよ」と声を掛け、小学校の担任教師にも伝えておく。次回に、５、６年生に教えてもらうことになる。

綱の長さを長くし幼児みんなで校庭の真ん中まで綱を運び、みんなで「綱引き教えてください」と、大声で呼び掛ける。その声を聞いた高学年の児童らが集まり、「あのな、ヨーイショって順番に引っ張るねんで」と、教えてくれる。「ひっぱったらいいのね、引っ張った後はどうするの？」と、近くで聞いていた教師が高学年児童に問い掛ける。「引っ張られないように、こうやって（後ろに状態を反らし、引っ張るしぐさを見せる）もっとくねん」と、教えてくれた。今聞いたことを一つ一つ確認した後、早速みんなで綱引きをしてみる。

（反省・評価）

幼児と児童が共に楽しめるよう計画し遊び始めたことではあったが、偶然通りかかった高学年児童らが発した言葉を受け、教えてもらう機会を持ったり、経験に合わせて綱の長さを調節したり、場所移動をしたりしたことで、よりダイナミックに楽しむことができた。

「秋見つけの交流から自主交流へ　そして作品展へ」

事例４．ドングリころがしどんな風にしようかな？　　１０月

○　１０月、１年生と「秋見付け」とし、地域の公園へ出掛ける。ペアでドングリなどの木の実を拾ったり、拾ったどんぐりを使い、幼稚園の園庭で制作やドングリ転がしなどをしたりして遊ぶ。木の実の制作やドングリ転がしなどを、自主交流でも再度経験できるように、準備をしておく。

○　１０月初めより、少しずついろいろな形、大きさのドングリを準備し、遊びに使えるようにする。遊びの中で、大きさや形の違いに気付いたり、制作や転がし遊びに使ったりしながら遊ぶ様子が見られる。その姿を受け、１年生と近くの公園に行き、木の実探しを楽しめるように話合い計画する。

１年生とペアになり、袋を持って公園内を散策する。１年生が中心となりながら「あっちに行こう」「ここ登るよ、ついてきてね」「こっちにも行ってみようよ」と、一緒にドングリ探しをする。全くドングリが拾えてない幼児の袋を見付けた１年生からは「ここにいっぱいあるよ」「これあげる」など優しい言葉を掛けてもらったり、一緒に袋に入れてくれたりする姿があった。

園に戻り、みんなのドングリを種類別に分け、遊びに使えるようにする。遊びは、「秋見つけ」までに幼稚園で遊んでいた“木の実を使った制作、ドングリ転がし”などを準備しておく。

A 児はドングリ転がしが大好きで、毎日コースを考えたり、ドングリの大きさを変えたりして遊んでいる。いつもは自分なりに考え遊んでいたが、今日は１年生が加わり一緒に遊ぶので少し様子が違う。しかし、板のコースの前に、ペットボトルやといを組み合わせ、「ポトン」と落ちたところが板のコースにつながるようにしたいとの思いを持ち考えるが、何度してもうまくいかない。その A 児の様子や思いを理解した１年生から「もっとといを高くしてみよう」「ここにも、ペットボトルをつなげよう」といろいろなアイデアが出され、一緒に考えることにする。幼児は、率先してアイデアを出し、試す１年生の様子に“どんな風になるのかな”と、期待を膨らませる。その後も、一緒に作って

はドングリを転がし、試したり、一緒に楽しんだりする姿が見られた。
　その後の自主交流の時間でも「ドングリ転がししよう」と、1年生が遊びに来てくれたり、幼稚園の園内作品展でも幼児から「お兄ちゃんおねえちゃんに来てもらって、ドングリ転がしできるようにしよう」と、遊びのコーナーを作ったりする姿があった。作品展期間中は、たくさんの1年生が幼稚園に来て、一緒に楽しむことができた。

（反省・評価）
　幼児の遊びや児童の学習のカリキュラムの中に位置付け、計画的に「秋見つけ」を実施したことで、その後の活動や自主交流の中でも、主体的にかかわり活動する姿が見られた。また、幼児だけではなかなか考えがまとまらないことでも、年上の1年生のアイデアが加わることで、いろいろな仕方があることに気付き、更に遊びへの興味や関心が増してきた。ドングリ転がしをするという同じ目的を持ち取り組むことで、幼児、児童は互いに自分の思いを出したり、共に考え合ったりしやすくなり、このことが一緒に楽しむ姿へとつながっていく。

「あきみつけ」

『なかよしグループ』で行動し活動をして連携を更に深めていく。また、本時の活動が後の自主交流につながっていくことをねらいとする。校・園庭から『なかよしグループ』を作り、学校の近くの「あひる公園」で秋の様子を感じながら秋を見付けていく。見付けた木の実や葉っぱは、園に戻ってからの活動材料となる。教師は、本時の活動について説明と安全確保・グループ活動の注意点などを詳細に説明し、活動は主に小学校児童が中心となっていく。収穫したものを園で「とい流し」「写真立て」など、園児・児童が協力して制作していく。活動後は、本時の感想や反省を述べたり、休み時間も制作していこうと話したりする。自主交流が自然に行われていくことを教師のねらいとしているので、「本時の活動が楽しかった。」という相互の感想から達成できたのではないか。

「音楽会」

毎年音楽会には、幼稚園側は『小学校の音楽を聴く』ということで参加している。今年度は、11月１４日、小学校独自の音楽会が「交流音楽会」の一環として園児も参加できれば、小学校に進学したときに抵抗を感じず参加できるのではないかと考え、１年生の合唱のパートで参加することとなった。　幼稚園教員と小学校教員で合唱曲を選曲することになる。「どの年齢にも歌いやすい曲」いうことで、輪唱『森のくまさん』を発表することになった。音楽会当日まで３回程度の合わせ練習を行う。ピアノ・指揮・合唱指導は小学校教員で、背景の森の木や熊は幼稚園教員で担当する。短い練習時間ではあったが、練習や本番の緊張を一緒に感じることができたことで、一体感をより深く持つことができたのではないかと考える。

「世界遺産　なら　in　鳥見」

世界遺産である奈良のことを知り、興味を持つことをねらいとする。12 月 16 日『おん祭り』の前日に実施する。「せんじょいこ　まんじょいこ」の歌で小学校体育館に園児を迎える。その後『なかよしグループ』になり、幼稚園主任から『おん祭り』の話を聞く。おん祭りのゲームを、幼稚園教員より教えてもらい楽しむ。小学校児童による紙芝居『帯解の龍』の民話を聞く。児童は民話を披露するに当たり、２週間程を楽しみながら練習した。奈良の民話であることの親しみと、奈良言葉の難しさに興味を持ち、家でも家族と共に練習を進めていたようである。幼稚園児に聞かせたいという強い思いが芽生えたようである。

「1 年生の朗読・おんまつりの話」

１２月１７日に奈良で行われる春日若宮おん祭りの行事を受け、１年生から奈良の民話を聞いたり、ペアの友達と一緒に「おんまつり」のわらべ歌遊びをしたりする。奈良の地に受け継ぎ語り継がれている文化を知るよい機会となった。大きなスクリーンで映し出される「帯解の龍」の話や寸劇を交えた朗読に、幼児らも集中して聞き入る姿が見られた。園に戻ってからも、「先生あの話、面白かったな」「また聞きたいな」などの思いが聞かれた。

11 月には、幼小合同参観として音楽会で一緒に歌を歌った。それぞれに練習をしたり、一緒に小学校の体育館で練習をしたりした。

12 月には、1 年生による読み聞かせ会をした。おん祭りの歌や話を聞いたり、「大さむ小さむ」のわらべ歌遊びをしたり、1 年生の朗読「帯解の龍」の話を聞いたりした。

② ２年生と幼稚園児

「おもちゃランド」

本校では、２年生の生活科「あそび大すき　あつまれ」の学習で「おもちゃランド」を行う際、幼稚園児を招待している。事前にポスターを作り、園に届けて掲示してもらい、当日は幼稚園児がいろいろな遊びを楽しめるよう時間を設定した（約３０分間）。

２年生の子供たちは、手作りおもちゃ（パラシュート、空気砲、ブーメラン、びっくり箱、魚つり、ボーリング、的当て、ストラックアウト、もぐらたたき、おばけやしき、宝さがし、一円玉落とし）だけでなく、幼稚園児用に折り紙などをたくさん作り、楽しみに準備していた。

当日は、年下の子供たちも楽しく遊べるように、いつも以上に優しく遊びに誘ったり、目線を合わせて話し掛けたり、説明したりする姿が見られた。

園児も、もらった折り紙をとても喜び、折り方を知りたいということで、後日、２年生有志が「折り紙先生」になり、各教室で園児に折り紙を教えることもできた。

この取組を通して、２年生は、年下の子供に優しく接することを学び、園児たちは、小学校への入学に対して、少しでも期待や安心感を持つことができたのではないかと考える。また、顔見知りになることで、互いに親しみを持ち、来年度からの学校生活にも生かされるのではないか。

「２年生とおもちゃランドで遊んだ経験から幼稚園での園内作品展へ」

２年生のおもちゃランドに参加した経験を、「２年生に教えてもらう折り紙体験」や「幼稚園の園内作品展のお店屋さん」に取り入れる。

事例５．２年生のお兄さんお姉さんみたいな、お店屋さんをしよう　　１０月

◇取組みについて

毎年１０月に、２年生の生活科の単元「あそび　大好き　あつまれ」で作ったおもちゃを使った「おもちゃランド」に参加している。今年も２年生からの招待を受け、全園児で遊びに行った。４歳児と５歳児がペアになり 12 個の遊びのコーナーを順に巡り参加する。

始めは「何をしようかな？」と少し戸惑い気味の幼児もいたが、２年生が「〇〇しませんか？」と優しく声を掛けてくれるのを聞き、したい気持ちが膨らむ。幼児は、２年生の「いらっしゃいませ」「今ならすぐにできるよ」などの呼び込みの声や、実際に遊びの後にもらえる景品を「こんなんもらえるよ」と見せるなど、幼児が遊んでみたい気持ちになるような声掛けやかかわりを工夫してくれたことで、「次はどこにしようかな」など、自分達でもいろいろな遊びの場を巡り楽しむ。

その後、幼児がおもちゃランドでもらった景品の折り紙を持ち「先生、これどうやって作るの」とうことを受け、２年生のクラスに行って折り紙を教えてもらう機会を持ったり、11 月の園内作品展でこれらの経験を生かして遊びのコーナーを作ったりできるようにした。

（ねらい）　〇　２年生のおもちゃランドで体験したことや感じたことについて話し合いながら、自分達のお店屋さん作りを楽しむ。

昨年の園内作品展の様子や５歳児の作品について出し合い、今年も園内作品展をすることを話す。遠足で「大阪キッズプラザ」に遊びに行ったことを振り返り、キッズプラザ作りをすることに決まる。「お店屋さんあったよ」「大きな滑り台もあった、あれつくりたいな」など、自分達が体験した遊びを思い出し気持ちを膨らます。しかし「何で作ったらいいかな」など、具体的なアイデアがなかなか浮かばない様子が見られたので、「そういえば、この前行った２年生のおもちゃランドでも、いろいろなお店屋さんあったよね。どうだった」と、問い掛ける。「そうや、ダンボールなんかで作ってはったよ」「折り紙もたくさんもらった。あんなの作ろうよ」「先生、お店のところに机とかも置いたらいいよ」など、実際に体験した２年生のおもちゃランドの様子を振り返りながら、具体的にどのようにして作るかについて、友達と思いや考えを出し合い作る。

＜保育者の意図＞
２年生のおもちゃランドを体験したという共通経験を基に、自分達の作りたいお店のイメージを膨らませたい。

ダンボールや功技台、トンネルなどを使い、（キッズプラザの中央にある階段の塔のような）「迷路みたいにしよう」と友達と話し合いながら構成したり、「透明で中から見えるようにしよう」と、大きなしゃぼん玉の中に入った様子を再現したり、（２年生のおもちゃランドのコーナーにあった）「ボールなげやブーメラン」などのコーナーができてきた。

おもちゃランドで２年生がどんな風にお店屋さんをしていたかについて振り返る中で、「どのお店屋さんするか決めよう」「説明する人と、景品渡す人と分かれたらいいよ」など、担当や役割を分担して行うという意見が出された。「そうだ、いらっしゃいませって言おうよ」「ここ空いてるよって言ってくれたから、わかりやすかった」「〇〇しませんかって、優しく言ってくれたのが嬉しかった」など、自分の感じたこと体験して気付いたことなどを、みんなで共有する。作品展期間中は、普段交流している１年生が全員で遊びに来てくれたり、２年生などたくさんの児童や小学校の先生が遊びに来てくれたりし、「楽しかったよ」などの感想を聞き、より一層元気な声で呼び込みをしたり、積極的に遊び方を説明したりする。

＜保育者の意図＞
２年生からの優しいかかわりを振り返り、お店屋さんでの言葉のやり取りや、来てくれたお客さんへのかかわり方について考えられるようにしたい。

（子供の姿の読み取り）
・２年生のおもちゃランドで自分達が遊んだ様子や、お兄さんお姉さんのかかわりでうれしかったことなどを思い出し、自分の作りたいお店について考える。
・大阪キッズプラザに遠足に行ったことを振り返り、共通のイメージを持ち、友達と具体的にどのようにして作るのか、互いに思いや考えを出し一緒に作る。
・友達とお店の担当や役割を分担しながら、お店屋さんをする。
・友達と自分の感じたことや体験して気付いたことなどについて話し合い、お客さん話したりかかわったりする。
・小学生に自分達の作ったキップラザを認めてもらったことを喜び、さらに、意欲的にお店屋さんをする。

（反省・評価）
日々、小学校との交流を計画的に行っているので、児童の存在をより身近なものとして感じている。２年生との交流会「おもちゃランド」を経験したことが良い刺激となり、気付いたことや楽しかった思いなどを出し合う中で友達と具体的なイメージが共有でき、幼児のしたい気持ちが更に広がり、意欲的にお店屋さんをする姿となった。

③５年生と幼稚園児

（めあて）
〇校内作品展の案内やゲームなどの活動を通して、来年度に向けての関係作りをする。
〇幼稚園児の立場に立った行動・話し方を考え、実行できるようにする。

（内容）
○自己紹介を行い、名刺をプレゼントする。
○全員でゲームをして遊ぶ。
○校内作品展の案内をする。
（活動の様子・児童の声など）
幼稚園児は大きいお兄さん・お姉さん相手に最初は緊張していたようであったが、自己紹介の後、英語の歌に合わせて踊っているうちに互いに緊張がほぐれ、親しげに話ができるようになった。５年生の児童も、兄弟関係や友達の話から共通の話題を聞き出したり、腰をかがめる・目線を合わるなどの気配りをしたりすることで、幼稚園児が話しやすくなる雰囲気作りをしていた。声の小さい幼児には一生懸命こちらから話し掛ける、元気に走り回ってしまう幼児にはしっかりと手をつないで導いてあげる、というように、その子その子に合わせたかかわり方を自分から進んで考えて工夫をしている姿が多く見られた。交流を通して、来年度に向けて高学年としての自覚が芽生えてきたようであった。

（４）取組の成果

・非指示的指導を念頭に置くことで、子供たちが自ら考え試行錯誤する姿が見られた。答えが出ない場合も、教師が寄り添い思いを聞きながら共に考えるという形を取ることで自分の考えを持つことができた。
・普段の学校生活では見られないような活躍を見せる児童がいる等、自信を付ける場面になった。
・教師も互いの様子や教育の在り方を知ることで、「教育の連続性」を意識できるようになった。
・計画的交流や自主交流を続けていくうちに無理のない交流の形(互いのカリキュラムに共通したところを扱い、それぞれの行事に参加する等)が見えた。
・次年度の行事の共同開催につながった。次年度は、運動会・音楽会・作品展を共同開催する予定である。
・低学年や次にペアとなる５年生が幼小連携の対象となることが多いが、取組としては非常に有意義であるので、一部の学年に偏らず取り組める工夫をしていきたい。
・学校・園全体で幼小連携について把握しておくことで、誰が担当になっても同等の取組ができることになるので、「知らせる」体制も整えていきたい。
・２年目ということで教師側が子供への動きを掴めるため、多くの指示は要らない。
・幼稚園から進級した子供たちが大半を占めているため、昨年度と似た内容の活動は、他園の子供たちを誘導してくれる。
・「活動を一緒にしよう」と教師が声掛けをしないと出にくい子供もいるので、タイミングが難しい内容もある。

２．計画交流から自主交流へ（神功幼稚園・神功保育園・神功小学校）

１）幼保小連携を進めるために

幼保小連携を行っていくためには、幼保小合同研修が重要な役割を果たすと考えている。教員等が互いの教育の在り方について話し合うことで、違いが分かり、子供の発達と学びについて理解することができる。交流活動を通して、子供たちにどのような学びがあったのか、互いの良さを知ることができるので打合せや振り返り等合同研修を大切にして進めている。また、異年齢集団のかかわり方、多くの交流活動をすることで、安心へとつながり小学校への滑らかな接続ができると考えている。

実践していく中で、生活のリズムや互いの行事があるために、話合いの時間の調整が大変難しく感じた。そのため、限られた時間の中で、話し合う内容を明確にして取り組んできた。さらに、無理なく普段の取組の中で続けていくこと、教員等が共通理解を図り進めていくこと等を大切にしながら本年度の幼保小連携を推進していきたい。

２）自主交流に基づく幼保小連携と非指示的指導

（１）学校・園の概要

①　神功幼稚園

昭和５４年に開園される。平城宮跡の西北方に位置し、平城ニュータウンとして開発された閑静な住宅地の中にある。近くには保育所、小学校、中学校、公民館が隣接し、教育に関心が高く熱心な地域である。公園等も整備され、緑豊かな自然環境に恵まれている。

園の教育目標は「夢をもち、豊かな心で主体的に活動する幼児の育成」で、幼児は自分の考えをしっかりと持ち情緒も安定している。しかし、園児数が少ないため、多様な個性のぶつかりや磨き合いが不足気味で、その時々のトラブルへの対応や逞しさに欠けるという課題を感じている。

園児数並びに職員数（園児　２５名、職員　６名）

学年	学級数	園児数	職員・人数	
二年保育 ４歳児	1	１３	園長	1
			主任教諭	1
二年保育 ５歳児	1	１２	学級担任	2
			特別支援担当	1
合計	2	２５	業務員	1
			合計	6

②　神功保育園

平成元年に開園される。園の保育目標は「自分の思いを言える子」「意欲を持って最後までやり通す子」「友達を大切にする子」である。子供は、集中力がありコツコツと難しい事に取り組み、達成する喜びを感じ、友達と一緒にのびのびと遊んでいる。しかし、自分の思いを言葉にし、相手に伝えることが苦手な姿もある。

園児数並びに職員数（園児　１１８名、職員　２８名）

学年	学級数	園児数	職員・人数
０歳児	―	１０	園長　1 副園長　1 担任　２１ 調理員　3 パート職員　2 合計　２８
１歳児	―	１８	
２歳児	―	１７	
３歳児	1	２４	
４歳児	1	２５	
５歳児	1	２４	
合計	3	１１８	

② 神功小学校

昭和 55 年、右京小学校から分割し開校される。平城ニュータウンの中にあり、東は春日山、西には生駒・信貴の連峰を眺める丘陵地に立地する新興住宅地にあり、自然環境に恵まれている。

幼保小連携では、「互いの思いを伝え合う力を育てる」ことを目指し、異年齢集団でのかかわり方、多くの交流活動を体験することにより、幼稚園・保育所から小学校への滑らかな接続が重要と考え取り組んでいる。また、幼保小合同会議を軸に、園児と児童の交流活動や教員等の合同研修に取り組み、小中一貫教育と絡ませながら、「確かなつながりの中で、自ら学び続ける心豊かなたくましい子」を目指している。

児童数並びに職員数（児童　２７１名、職員　２０名）

学年	学級数	児童数（人）	職員・人数
1	1	２９	校長　1 教頭　1 学級担任　１３ （特別支援学級を含む） 専科等　5 合計　２０
2	2	４５	
3	2	４５	
4	2	３７	
5	2	５９	
6	2	５６	
合計	１１	２７１	

（２）取組の経緯

神功幼稚園と神功保育園は、10 年程前から交流を行っている。平成２０年度には、神功小学校、右京小学校、平城西中学校が奈良市の小中一貫教育推進パイロット校に指定され、幼保小連携・小中一貫教育の実践を通して、互いに学びをつなぐ取組を進めてきている。平成 21 年度には文部科学省の「幼保小連携推進事業」の委託を受け、小学校への滑らかな接続を重点課題として、幼保小で友達や異年齢の人とのかかわりや交流活動の体験を重視した実践を行ってきた。平成 24 年度は文部科学省の委託を受け、神功幼保合同保育の中で「保

育者の協働と教育的意思決定」に焦点を当てた研究を深めた。平成２５年度は神功幼保小で文部科学省の委託を受け、「自主交流に基づく子供自ら育ち合う幼保小連携～教師・保育者等の〈非指示的指導〉に焦点をあてて～」を調査課題として研究を行った。

平成 26 年度も昨年度の研究実践を続けていくことから、3 校園で文部科学省の委託を受けることになり、「子供自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修～〈自主交流〉・〈非指示的指導〉に焦点を当てて～」を調査課題とし、昨年度まで続けている交流活動や連携について話し合いを行い、今年の３校園のテーマを「計画性と柔軟性を活かした幼・保・小連携の工夫」と決めた。交流活動の実施日、及び研修会・打合せ、振り返り日程とその内容を次の表１にまとめた。その実践については、次に詳しく述べる。

表１　神功幼保小合同研修　交流会・研修会・打合せ・振り返り日程

月日	交流会			研修会・打合せ		
	時間	内容	場所	時間	内容	場所
5/12（月）				15:00～	幼保小合同会議（年間計画等）	神功保
5/30（金）				15:00～	1年と幼保交流会打合せ（6月の交流会）	神功小
5/21（水）	9:30～	神功小運動会予行見学	神功小			
6/5（木）	9:30～	保育園の見学と遊び（1年生と保育園児）	神功保			
6/9（月）	9:30～	幼稚園の見学と遊び	神功幼			
6/11（水）				13:45～	1年生の参観授業（幼稚園教員・保育士）振り返り	神功小
8/19（火）				9:30～ 13:00～	公開保育参観 合同研修会（講師　清水益治） 交流会の打合せ（おもちゃランド）	神功保
9/4（木）				16:00～	2年生と幼保交流会打合せ	神功小
9/25（木）	9:30～	友達さがしゲームをしよう（2年生と幼・保園児）	神功小	16:00～	振り返り おもちゃランドの打合せ	神功小
10/27（月）	9:40～	おもちゃランドで遊ぼう（2年生と幼・保園児）	神功小	15:00～	振り返り 合同研修会（講師　清水益治）	神功小
10/31（金）				15:15～	公開交流会の打合せ	神功小
11/28（金）	13:00～	元気タイムに一緒に遊ぼう（全校児童と幼・保園児）	神功小			
12/15（月）				16:00～	合同研修会（鳴門教育大視察を終えて） 今後の取組について	神功幼
1/16（金）				15:15～	合同研修会　（報告書冊子、研究集会プレゼンの打合せ）	神功小
1/20（火）				16:00～	合同研修会（報告書冊子打合せ）	神功小
1/23（金）				15:15～	合同研修会（研究集会プレゼンの打合せ）	神功小

（３）実践の展開

①　計画交流の継続　～１学期の取組～

毎年、１学期に幼稚園、保育園、小学校の交流会の年間計画を立てている。今年度は、５月の「幼保小合同会議」にて各校園の年間計画を確認し、１学期の交流会の日程調整と打合せを行った。

○「保・小交流会」・・・６月５日(木)

園児と児童がペアになり、園内を案内してもらい見学した。児童は小さな園児と触れ合い、興味を持って各部屋を回っていた。また、園児は自分たちが普段過ごしている部屋を見てもらい、うれしそうであった。

児童が運動会で踊ったダンスを発表し、その後、園児にダンスを教えながら一緒に踊った。始め、児童は園児に対して恥ずかしそうに接していたが、ダンスを教える時には自信を持って積極的にかかわることができた。

園庭では、児童だけが集まって遊んだり、児童自身が遊ぶことに夢中になったりしていたが、教師が「いろんなお友達がいて楽しいね。」と声を掛けると、少しずつ児童の方から園児の遊びにかかわっていき、打ち解けていくことができた。上手に大縄を跳ぶ園児を見て、児童が「上手やなぁ！」と感嘆の声を揚げ、鉄棒で『地球回り』をして遊んでいた児童の様子を見た園児が「わあ、すごい。かっこいいなあ。」と、興味を持った。「○○ちゃんも挑戦してみる？」と、声掛すると、それを聞いていた１年生が「教えてあげるわ。」と、鉄棒の握り方や足の掛け方、回り方を優しく丁寧に園児に教えてくれ、繰り返し挑戦するうち、成功することができた。教えた１年生も、できた園児も共に喜ぶ姿があり、互いに刺激を受け合い、自信を持つことができた。交流後、保育園ではできるようになった園児が、園庭遊びや運動遊び『わくわくランド』の中で友達に『地球回り』を教えてあげ、新しい技がクラスの中で広がった。

○「幼・小交流会」・・・６月９日(月)

園児と児童があらかじめ決めておいたペアになって「触れ合い遊び」をしたので、互いに緊張が解けたようであった。また、幼稚園出身の児童が多いので、幼稚園の教員を懐かしみ、園庭でも慣れた様子であった。

園庭で、児童が運動会で踊ったダンスを発表し、その後、園児にダンスを教えながら一緒に踊った。児童は保育園での交流を経験していたので、自信と余裕を持って積極的にかかわることができていた。

園庭や室内で遊ぶときも、自然な様子で園児とかかわり、　砂場では協力して砂山を作り、一緒に遊びを楽しむ姿が見られた。園児がいつも遊ぶ「泡立てクリーム」に児童が興味を示していたので、上手に泡立てる園児に対して、教師が「すごいね。泡立てが上手やわ。」と声をかけると、傍にいた児童も「教えて！」と園児に話しかけて、

コツを教えてもらいながら仲良く遊ぶことができた。また、片付けの時には幼稚園出身の児童が率先して、片付けが進むようリードする様子が見られた。

（幼稚園　４歳児・５歳児）

その後、１年生が帰った後も交流の余韻を大切にしたいと思いポンポン等を置いておいたが、それを見付けた５歳児は早速曲を流して１年生と踊ったダンスをしたり、付けてもらった手具を真似たりして遊び始めた。廊下でその様子を覗いている４歳児に気付いた教師が、「さくら組さんもやってみる？」と声を掛けると喜んでその中に入っていった。５歳児は４歳児にポンポンを渡したり、前に立って踊りを教えたり、１年生からしてもらったことを今度は４歳児に返していた。

○保育士・幼稚園教員が一年生を参観・・・６月１１日(水)

国語の学習を参観した。児童が大好きな「言葉集め」「音読」の学習だったので、自信を持って学習する姿を見てもらえたことに満足そうであった。また、児童が懐かしい先生方に感想を求め、誉めてもらえたことがうれしそうであった。放課後、振り返りながら、児童の在園当時の様子について話を聞けたことが、児童理解へと繋がった。

○１学期の保幼の交流

６月１３日は幼稚園、７月１日は保育園を会場とし、ふれあい遊びや好きな遊びを幼稚園児と保育園児が一緒に楽しんだ。

それぞれの交流会の前には事前の打合せをし、園児の姿や互いがどのような遊びをしているのかを話し合った。また、どのような遊びがあるのかを事前に園児たちに伝えることで、期待をふくらませて当日を迎えることができたと思う。

（保育園・幼稚園　４歳児・５歳児）

６月の交流会では、昨年からの積み重ねがある５歳児は交流を楽しみにし、幼稚園児は自分たちの遊びを紹介している様子が見られた。泡立てクリームで「水を足したらいいのができるよ。」などと教え、それを受けた保育園児が試している姿もあった。遊びの後の話合いでは、積極的に手を挙げて自分の言葉で思いや感じたことを振り返ることもできた。

一方、４歳児は少し緊張していたのか同じ園同士で集まって遊ぶ姿が多かった。

７月の交流会では、魚釣りコーナーでどれだけ釣れるかを競い合って遊び、ままごとコーナーで野菜の切り方やスープの作り方を保育園児が幼稚園児に教えていた。

これらの交流で、両園の４歳児の緊張も和らぎ、教員等の援助を得ながら少しずつやりとりをする姿が

見られるようになった。 普段とは違う素材に出会ったり、工夫しながら遊ぶ姿にヒントをもらったりと良い刺激になった。

交流後、泡立てクリーム遊びで石けんや水の量を試しながらいろいろなクリームを作ってケーキに仕上げ、砂場ではトイのつなぎ方を真似て今までとは違ったコースにするなど遊びに変化が見られた。

回を重ねる毎に、互いのかかわりが増え「楽しかった！」「次は、いつ遊べるの？」と２学期の交流にも期待が膨らんだ。

② 自主交流の芽生え ～計画交流から新しい広がりへ（１学期の取組）～

事例 「お兄さん、お姉さん、かっこいいな！」～運動会予行の招待を受けて～

【対象児】 幼稚園５歳児

【時 期】 ５月

【ねらい】 ○小学５年生・１年生との出会いを通して触れ合い、親しみを感じる。

〈保育者の意図〉

小学校に興味や関心が持てるように保育者間で計画を立てる。

神功小学校5年生が、運動会予行練習があることを知らせに来てくれた。

その中で、5年生が組立て体操の演技を披露すると、子供達は真剣な表情で見入り、©「すごい。」と、思わず拍手をしていた。

予行練習の招待状をもらい、保育者が時間を知らせると©「9時？！早くいかないと。」「早起きしよう。」と楽しみにする様子が伺えた。最後は、©「またね。」「行くね。」と手を振って見送る姿が見られた。

招待状を保育室に掲示しておくことで、期待を持続してほしい。

保育室に、頂いた招待状を提示しておくようにした。

小学校に着くと、楽しみにしていた子供たちは©「いつ出発する？」「楽しみ！」「早くいきたい。」と出発を待ちきれない様子だった。

予行の様子を見ていると©「がんばれ。」と応援したり、自分の兄弟や知っている1年生の姿が見えると©「○○ちゃん。」と大きな声で呼んだり、手を振ったりして喜んでいた。応援合戦では、小学生の真似をして、帽子を振って応援に参加していた。また、3、4年生の演技を見て真似ながら踊る姿も見られた。保育者も共に楽しんだ。

見守り、共感することで、子供の気持ちを大切にしたい。

園に帰ると©「楽しかった。」「めっちゃ、かっこよかった。」と友達同士で伝え合い©「カードつくる。」と、もらった招待状を真似て数人がカード作りを始めた。ⓣ様子を見守り「素敵なカードができたね。」と共感する。楽しい気持ちを絵や文字にしながら©「これ、渡したい！」「いつ渡せる？」との声が出てきた。

教員間で連携を取ることで、子供の満足感が味わえるようにする。

小学校へ連絡を取り、子供の思いを伝える。カードを渡せることを知らせると「私も描きたい。」と作り出す姿も見られた。

翌日、クラス全員で校長先生にカードを渡し©「ありがとうございました。」「ちょっと読んでみて。」など気持ちを伝えていた。

校長先生も、「全校集会で紹介するね。」と言ってくださり、子供たちは大喜びで満足そうな表情をしていた。

その後、1年生との交流会で、運動会の演技を再び見たり、手具を貸してもらい、一緒に踊ったりして楽しんでいた。

園児の学び

５年生に憧れの気持ちをもつ。

小学校へ行くことへの期待をもつ。

小学生の姿を見て、自然に応援したり真似て踊ったりと、自分らしさを表している

嬉しい気持ちを意欲的に絵や文字で表すとともに、小学生に伝えたい思いを言葉で表現する。

数人の思いをクラスみんなで共有することができた。

校長先生に自分たちの思いを受け止めてもらい満足感を得る。

【反省・評価】

○　５年生が招待状を持ってきて、組立て体操を披露してくれたことで、子供にとっては憧れや親しみ、そして予行練習を見に行くことへの期待が高まった。

○　「楽しかった。」「ありがとう。」の気持ちをすぐに伝えたいという子供の思いを保育者が受け止め、小学校へ連絡すると、校長先生が快く引き受けてくださり、子供の思いを実現できた。

○　昨年（４歳児の時）より継続して小学校との交流に参加しているので、より小学生を身近に感じ、言葉や文字、絵など様々な表現で気持ちを表していた。

○職員合同研修・・・８月１９日(火)

保育園での保育の実際、子供の姿の共通理解を図ることを目的に、幼稚園・小学校の夏休み期間を利用し、神功保育園の５歳児の公開保育を実施した。

４歳児の時から積み重ねてきた『わくわくランド』(跳び箱・鉄棒・巧技台・運動棒・平均台・フープ・トランポリンなどを使っての運動遊び）の取組を通し、カンファレンスを持ちグループ討議で意見交換をした。

《非指示的指導と子供の学び》

・平均台や鉄棒では、子供たちが技を考え工夫し、遊びを発展させていった。保育者がその姿を捉え「新しい技だね。面白いね。」と声掛けをする。子供は保育者から応援されていること、微笑んで見守られていること、認められていることで安心して取り組み、自信を持ち、次への意欲につながっていく。

・友達の新しい発想や、失敗しても何度も繰り返し挑戦したり、成功したりする姿に刺激を受け、「自分も挑戦してみよう」「できるようになりたい」と目標を持つようになる。友達の存在や、友達の姿に刺激を受けることも非指示的指導につながる環境の一つになるのではないか。

・小学校では授業時間が限られていることもあり、「ここまでさせたい」という思いがあり目標に対して先に指示してしまうことがある。保育園では、「こんなにできたね。もう一回やってみる？」と、子供自身がもう一回してみようと思える言葉掛けをしていた。その違いが大きいと感じる。

・幼稚園・保育園・小学校の教員等が合同研修を通して、子供を見守ること、待つこと、認めること、一人一人に応じ適切なタイミングで必要な言葉掛けや援助をすること、積み重ねること、教員等と子供との信頼関係、友達の存在の大きさなど、教育の在り方について考える良い機会となり、互いの理解を深めることができた。

③　自主交流の芽生え　～２学期の取組～

２学期は幼稚園、保育園両園児を小学２年生が生活科の学習「おもちゃランド」へ招待して交流を行っている。平成２６年度については、例年、冬に行っていた小学校での「元気タイム」の交流を秋に行うことを確認し、今までの交流会を生かした取組を模索した。

○「おもちゃランドで遊ぼう」

２年生の生活科『あそび大すきあつまれ』の学習で「おもちゃランド」を作り、幼・保の園児を招待することにした。廃材から作った、思い思いのおもちゃを、どのようにすれば幼稚園・保育園の子供達が喜んでくれるか、一生懸命考えながら制作した。

・グループ分けの打合せ・・・９月４日(木)

おもちゃランドは３校園が混ざり合い、グループで活動を行う。昨年は１年生も一緒に活動したが、今回は２年生、幼稚園児と保育園児の交流であるため、数を減らし１グループ９、１０人（小４、５人、保・幼各２、３人）の１０グループにした。

グループの標示については、小学校から幾つかの候補を上げ、園児にも馴染みのある花を聞き、１０種類の植物に決定した。メンバーは、指導者間で事前に打合せを行い、どう分けるか話し合った。人数やバランスはもちろん、兄弟関係や、配慮を要する子供についても、３校園で共通理解を図った。こうした事前準備をしっかりとすることで、指導者は、自分の学校の子供だけでなく、他の校園の子供の様子についても、気を配ることができ、自然な形で支援を行うことができる。

・グループ分け・・・９月２５日(木)

おもちゃランドに向けて、グループを分ける活動を、おもちゃランドの約一か月前に行った。司会進行は小学校、活動時の音楽、ピアノ伴奏は保育園、歌遊びの計画、説明を幼稚園が担当した。また、準備物は幼保小で分担して用意した。児童には、事前にどのようなことをするのか説明し、見通しを持って取り組めるようにした。

当日はグループに分かれる前に、教師の自己紹介や、仲間探しゲームをした。その後、指導者の合図とともに、自分の名札（子供全員が花の絵の名札を付けている。)と同じ看板のところにそれぞれ移動して、自分のグループを見付けた。移動の際は、２年生がもともとコーンに置いてあった看板を、幼保の子供達が見付けやすいように、上に掲げるなどして気遣っている様子も見られた。しかし、初めて顔を合わす場であったので、グループでの自己紹介では戸惑う様子も見られた。「何をするんだった？」「園のお友達に聞いてあげてもいいよ。」など声を掛けると、全員の紹介ができていないグループも聞き合うことができた。

グループになった後、一緒にダンスをして、くっついたりしながら、自然に互いの距離が縮まったようだった。こうした取組を踏まえることで、本番のおもちゃランドが始まっても、スムーズに活動できた。

・グループ分けの振り返り・・・９月２５日(木)

☆　子供たちについて。初めて出会う場なので緊張した様子も見られた。『散歩にいこう』では、同じ校園の友達同士集まっていることが多く、まだ打ち解けている様子は見られにくかった。なかなか自己紹介が進まないグループもあったが、少し声を掛けると話が進み、児童が園児にうまく声掛けできていた。

　指導者が一グループに１人くらい付くことができたので子供たちの様子をしっかり見守ることができた。最後の挨拶をして、「さようなら。また来てね。」と園児を見送ったことで和やかな雰囲気でお別れをすることができた。

☆　司会進行は、園児にも分かりやすい説明や言葉使いだった。

☆　ひっついたり、輪になったりするなど触れ合う遊びを通して、グループの友達との距離が近付き、表情が和らいだ。

☆　グループごとにプラカードを用意したことで、それを使って２年生が園児を呼んでいて、両方にとって分かりやすく良かった。

・おもちゃランドの打合せ・・・１０月１６日(木)

　打合せではまず、集合時の座り方の確認をした。おもちゃの紹介やグループで集まる時のことを考え、それぞれグループごとに座ること、園児、児童は向かい合って座ることにした。また、たくさんのプレゼントを折り紙などで作っているので、昨年度の反省を生かし、手提げかばんなどを用意してほしいと幼保へ依頼。登園バッグなどを持ってくることになった。今回の打合せは、昨年度の反省を十分に活かすことができた。

・おもちゃ作り・準備

　おもちゃランドに向けて、どのようなおもちゃを作れば楽しんでもらえるか、どのような声掛けをしたら喜んでもらえるかを２年生なりに考えた。おもちゃは全部で１０種類、どの子供も作る際には「説明はひらがなで書かないと読めへんなあ。」「少し高いからいすを用意してあげないとあかんよね。」と園児たちの姿を想像しながら作ることができた。これは、事前にグループ分けの活動を行っているからこそできた。

　活動の前に、１組、２組が交代で２年役・園児役をやり、リハーサルをした。最初は、戸惑いながら、ぎこちなく手をつないでいた２年生も、リハーサルを振り返ってみて、「もっとここはこうした方がいいんじゃないか？」「こういうふうにしたら、幼稚園・保育園の子もわかりやすいんじゃないか？」と自分たちで意見を出し合う姿が見られた。

　おもちゃランドをより一層楽しみにしてもらうために、事前に幼稚園と保育園に２年生が訪れて、招待状を渡した。作っている最中も、「幼稚園の子、来たいと思うかなぁ。」「カラフルにぬったらいいんちゃう。」など、工夫しながら作ることができた。渡

すとき、園児に「早く行きたい。」「楽しみにしているよ。」と言ってもらい、学校に帰ってから「すごく楽しみにしていたから、頑張って作ろう。」と声掛けをする様子が見られた。また、懐かしい幼稚園・保育園の園舎や先生に会えたことも、とてもうれしそうだった。

・おもちゃランド・・・１０月２７日(月)

同じグループでの２回目の活動なので、前回よりも表情も柔らかく言葉掛けもスムーズにできているように感じた。園児と一緒に動くとグループがバラバラになったり、混んでいるところに並んでなかなかスムーズに回れなかったり思うようには活動できない様子も見られたが、園児が十分に楽しめるように、優しく手を握り、「どのおもちゃで遊びたい？」と背をかがめて、同じ目線になって話しかけていた。水の中に手を入れるときには、「ぬれないようにしいや。」「プレゼントの折り紙持っといてあげるわ。」「カードにサインもらった？」など園児を思いやる姿も多く見られた。

また、教員等間で、事前におもちゃランドについてしっかりと打合せできていたことで、スムーズに活動できたことと、打合せしていなかった急な変更でも、すぐに声を掛け合って、臨機応変に対応できたのが良かった。そうしたことは、日頃から顔を合わせて、打合せや会議、実践の参観を行っているからである。

児童の振り返りカードには、園児たちが、声掛けに素直に応じてくれたこと、仲良しの友達ができたこと、今度は２年生になって楽しいおもちゃランドを作ってほしいということが書かれていた。

・おもちゃランドの振り返り・・・１０月２７日(月)

☆　２回目の活動なので､子供たちは前回のグループ分けより慣れた様子が見られた。継続しての取組が大切であることを実感した。

☆　児童は、なかなか思うように活動できなくても、まず園児のことを考えることができていた。

☆　その場の様子から指導者同士で話し合い、計画にはなかったがプレゼントを置きにカバンのところへ戻るという活動を入れた。そういったことを話し合える雰囲気が指導者間にもあることが大切である。

(保育園　５歳児)

保育園では､事前にグループでの顔合わせをし､交流する機会を持っていたことや、

２年生から招待状やスタンプカードを届けてもらったことで「〇〇コーナーに行ってみたいな。」と、おもちゃランドに期待が高まり、当日は緊張せずにスムーズに遊びに入ることができた。

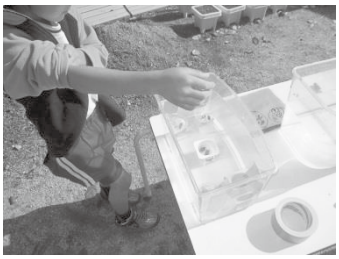
また、園児たちを迎えてくれた２年生たちの「園児たちに楽しんでもらいたい。」「自分たちがリードしていこう。」という意欲が伝わってきた。この２年生たちの迎えてくれた姿勢も、園児たちがより楽しめた一因であったと思う。当日を迎えるまでの小学校でのきめ細かな取組が感じられた。

工夫を凝らした様々なおもちゃで遊んだ園児たちは、おもちゃランド後、楽しかったあのおもちゃを作ってまた遊びたいと言い、空気砲やビー玉転がしなどを友達と一緒に作り始めた。空気砲では、「ここに点数書いてあったなあ。」「ここに絵をかいたら面白そう。」などと言いながら作り、的を倒す遊びが始まった。繰り返し遊んでいるうち、顔に空気が一気に当たると面白いことに気付き、空気を顔に当てる遊びも楽しんだ。おもちゃランドを経験し、保育園での遊びに発展が見られた。

（幼稚園　４歳児・５歳児）

一方、幼稚園でも『交流のあり方』について協議したことがあった。「招待を受けて、２年生の用意してくれた遊びをするだけでいいのかな？」「園児も小学校で何かできないか。幼稚園から園児が作った遊具を持って行くとか…」「園児が作った遊びで２年生が夢中になって遊べるのか？ムリがあるように思う。」「おもちゃランドの招待を大切にして、園児が夢中になって遊び込めるようサポートに徹することが大切なのでは。」「その刺激を、園へ帰ってからの取組に繋げて活かしていこう。」等の意見を交わし、『おもちゃランド』に臨んだ。その後、頂いた招待状を保育室に提示し、個人のカードを見ながら話をした。「コイン落としってなんやろ？」「モグラたたきしたい。」などと期待を持ち当日を迎えることができた。当日は２年生のリードもあり、夢中になって遊ぶことができた。

５歳児は園に帰るとすぐに「コイン落とし楽しかった。」「ゲームみたいに点数書いてたな。」などと思い出していた。その後、身近にあるカップを見付け、水を入れて、そこに様々な形のドングリを一つずつ入れ、浮くもの、沈むものに分け繰り返し試す姿が見られた。また、「木の棒は浮くな。針金は沈んでる。長いから？」「大きさが違うからかな？」など様々なことに気付きながら試していた。その後、園児の要求で大きな水槽を用意すると、実験用とゲーム用に分け、友達と役割分担しながら継続して遊びを進めていた。



特に『コイン落としゲーム』は魅力ある遊びだったのか、自分たちで考え、浮く沈む・速く沈む・ゆっくり沈むという科学的な遊びに発展していった。また、教師が園児の作りたい気持ちを大切

にし、すぐに用具や材料を用意したことで遊び込む姿が見られた。

○「元気タイム」での交流会・・・１１月２８日（金）

例年、冬の時期に園児を小学校に招いて、休み時間を一緒に遊ぶ交流会を行っていたが、気候が悪く中止になったり、体調面での心配も考えられたりするので、秋に行うことに変更した。また、今年度は自主交流に繋がる新しい取組として「仕掛け」を意識して進めていった。

まず、園児が「何をして遊ぼうか」と目的を持って小学校へ来られるように、環境を設定することを考えて進めた。そのために、園児と一緒に遊ぶには「どのような遊びが楽しくできるか」を児童と共に考え、話し合った。その後、４つのグループに分かれ､｢どこで遊ぶか｣｢どのようなルールで遊ぶか｣｢どのようなことに気を付けるか｣を具体的に話し合う中で、『ドッジボール』『砂遊び』『花いちもんめ』『だるまさんが転んだ』に決まった。また、「一年生がどこで、何をしているか」が分かるよう、事前にポスターを作り、幼稚園と保育園に届けた。この活動により、１年生の児童から園児を迎えることを心待ちにする言葉が増えた。

また、２年生の児童は既に「おもちゃランド」での交流があったので、担任から児童に「今日の元気タイムに、園児達が来るよ」と知らせると、児童から「一緒に遊びたい」という言葉がたくさん聞こえてきた。そこで、正門で園児を出迎えて、その後、園児が遊びの輪に入りやすいようにと声を掛ける取組を行った。その結果、１、２年生と園児がスムーズに交流できた。さらに、遊びの輪の中に５、６年生が加わり、遊びの広がりと自主交流への確かな芽生えを感じることができた。

(幼稚園・保育園)

小学校からの招待状を保育室に掲示すると、校庭での遊びのコーナーの紹介を見て「ドッジボールしたいなあ」「かがみ池ってどこにあるのかなあ？」など友達と一緒に元気タイムへの期待が膨らんだ。

(保育園　５歳児)

おもちゃランドで交流を深めた２年生が、校門で出迎えてくれて｢どこで遊びたい？｣｢○○コーナーはこっちやで。一緒に行こう。｣など優しく声を掛けてくれ、誘導してくれたことで遊び始めやすかった。

振り返りの中では､｢一緒に遊ぼうって呼んでもらって嬉しかった。｣「砂場でスコップ貸してもらったり、水汚れたから変えたろうって言ってくれたりした。」など、優しくしてもらったことが嬉しかったと言う意見がたくさん出た。

広い校庭であったが、３校園の教員等が全体に目を向けながらも自然と各コーナーの近くに分かれて見守り、小学生、幼稚園児、保育園児が楽しくかかわり、安心して

遊べるように必要に応じて声掛けや援助をすることができた。

(幼稚園　４歳児・５歳児)

当日は早く着いたので学校内を探検し「ここがかがみ池だよ。どんな遊びがあったかな？」と楽しみが膨らむように話し掛けた。５歳児は出迎えてくれた２年生に「ドッジボールはどこである？」と聞いたり、やってみたい遊びに積極的に参加したりして、昨年まで幼稚園で一緒に遊んでいた１年生との再会を喜んでいた。

４歳児は人の多さに圧倒されたり、広い場所でどこへ行けば良いのか戸惑ったり、遊びの内容やルールが少し高度であったのか､遊びを選べなかったりする姿もあった。遊びに参加できない園児には教師が誘ったり、飼育小屋のうさぎを見たりして安心して過ごせるようにした。また、４歳児と５歳児の反応の差は園に戻ってからも見られ、「またドッジしよう！」と興奮冷めやらず話題にする５歳児と、やや疲れた様子で眠そうにしている４歳児の姿にも表れていた。

休み時間を活用した交流は全校児童の姿を見ることができたり、広い場所での開放感を感じたりと小学校の雰囲気を感じる良い機会となった。今回は研修などが重なり教師の人数が少なかったこともあり､４歳児の参加の有無も含め今後の課題としたい。

④　教員等の柔軟な連携

○生活発表会の交流会

(幼稚園・保育園　４歳児・５歳児)

年間計画にはなかったが､「幼保で生活発表会を披露するのはどうだろうか」という話が出た。忙しい年末の時期であったが、すぐに日程調整を行い交流会が実現した。

幼稚園と保育園に小道具を運び、5 歳児同士の劇遊びを披露することになる｡互いの４歳児も参加した。交流会があることを事前に知らせると「どのようなことをしたのかな？」「自分たちの劇を見てほしい。」と期待をもつ姿が見られた。

当日、保育園児はいつもと場所が違うので戸惑うのではないだろうかと心配したが、普段と変わらずに生き生きと楽しんでいる姿を見せていた。互いに劇遊びを興味深く見ていて、発表後「(保育園で) 魚釣りの所が面白かった。｣｢(幼稚園で)クモの動きが面白かった。｣など、劇の中で良いと思ったところや工夫していたところを園児たち同士で伝え合い､満足そうにしていた。

今までの交流を積み重ねてきたことで、教員等同士が気軽に会話をし、柔軟な新しい取組をすることができた。しかし、４歳児にとっては時間が長く集中が最後まで続かなかったので、そこは考慮しなければならない。

（４）取組の成果

［小学校］

・本校では、従来行ってきた連携の活動を継続し、課題が見付かれば、それを解決して次年度へと繋げていくよう取り組んできている。継続した取組を行うことで、始めは慣れずに様子を見ていた子供たちも自ら歩み寄って話をしたり、誘い合ったりするようになってきた。指導者間もまた、それぞれの実践を知り、互いに尊重し合いながら話し合えるようになってきた。

・幼保小の交流を通して、児童は様々な経験や発見をし、意欲を持って取り組んでいたように思った。また、指導者が「非指示的指導」を意識することで、児童が失敗をしながら、新たな気付きや今までと違った方法を学んでいくことができると思った。その時、成功した満足感や達成感が学びの芽となり、子供の育ちへとつながっていくと感じた。また、子供たちの自主交流のための様々な仕掛けを行った。例えば、5 年生が園児の前で組立て体操を見せることで、より一層運動会に行くことを楽しみにすることができたり、招待状を持って行ったりすることで、園児が活動を心待ちにしているといった姿もあった。直接的な指示をするのではなく、様々な仕掛けをしておくことで、子供たち自らが自主的に活動に参加する姿が多く見られた。子供自身が主体的に考え行動する力が育つために、環境を整え、見守っていくことの大切さを感じる反面、教育内容が多い中でどのように「非指示的指導」を取り入れていくのかが課題となると思った。

・幼保小の連携を行うには、時間的にも難しく、内容も限られてくるので、無理なく連携を行うためには、「特別なことでなく、普段の取組の中で行い、続けていくこと」が大切である。

・合同研修は大切であるが、生活リズムが異なるため、限られた時間での話合いになる。そのために、話合いの内容を精選し進める必要がある。また、幼保小それぞれ目標が異なり、活動の過程や目指すところが違ってくるため、互いの考えや取組を理解し合いながら、進めていかなければならない。しかし、小学校は６学年あり、低学年の担当がいつも同じではないので、円滑な連携が取りにくいこともあると感じた。今年度は、昨年度の連携に関わった者が複数いたため、よりスムーズに進んだが、担当者が一度に変わると、同じように進めていけるかどうか不安に思った。

・交流に際しての打合せや事後研修を丁寧に行うことで、教員等が子供への願いを互いに理解できた。また、気付いたことや感じたこと、学んだこと、困ったことなどを出し合うことで、互いに協力していく雰囲気作りができ、信頼関係が深まった。

［幼稚園］

・５歳児は去年からの積み重ねがあり、交流に意欲的で遊びに刺激を受け、交流後は自分たちの遊びに発展させる主体的な姿が見られた。４歳児は活動に無理な姿も見られ、発達を考慮すべき点を学んだ。ねらいの持ち方や参加の仕方を考え工夫していきたい。

・非指示的指導を常に意識し、日々の実践に取り組んできた。そして自分の援助がどうであったか振り返り、記録をとることを大事にしている。園内や３校園で共に振り返ることで、他の教員等の考えに触れ学び、日々の取組につなげることができた。

・計画交流から新しい広がり（自主交流の芽生え）へとつながったのは、交流の積み重ねや園児の心に残る仕掛けと、交流後の園児の思いをつなげようとする教師の援助があったからである。そこには教員等間の信頼関係が不可欠であると感じた。立地条件から自主交流の難しさを感じるが、互いができる範囲で無理なく進めていきたい。
・連携を通して互いの違いを知ること、ねらいを確認しながら認め合うことの大切さを学んだ。幼児期の教育・保育として、遊びを通して学ぶ重要性を小学校へ発信できるように努めたい。それとともに小学校教育への理解も深めていきたい。その為には、それぞれの実践を参観することも必要である。

［保育園］
・昨年に引き続き、小学校・幼稚園との交流を積み重ねたことで、子供も保育士も多くのことを学ぶことができた。
・非指示的指導については、環境を整えることの大切さを感じた。子供の活動を予想し、子供が主体的に活動できるように教員等が意図を持って環境を整え、その中で子供たちを見守り、必要なタイミングで声掛けをすることで自主的な活動が展開することがよく分り、普段の保育にも生かすことができてきている。
・子供たちはたくさんの交流の中で、小学生に優しく接してもらう経験をした。その経験は園内での縦割り活動や、今後自分たちが大きくなった時に年下の友達に優しく接するという姿につながってくると思う。小学生に憧れの気持ちを持ち、小学校に入学することへの期待も膨らんだ。
・積み重ねてきたことにより、教員等間で気軽に意見や思いを出し合える関係ができ、互いを更に知ることもできた。保育園でねらいを持って大切に取り組んできた部分を知ってもらうことができたことも大きな成果の一つとなった。
・これまで継続でき、より良い成果や学びがあったのは、互いに忙しい中、打合せや振り返りの際にポイントを絞り短時間で話し合ってきたことも大きい。しかし、課題としては、他の２校園とは違い、子供の生活時間が長い保育園では、時間の持ち方で難しい部分がある。担任不在の時間が多くなり、職員間で協力し合ってはいるが、子供に負担を掛けないように配慮する必要があると感じる。

Ⅲ「広げる」: 幼小連携の実践開発（研究実践校園１年目）

１．学びを大切にする幼小連携（認定こども園都跡幼稚園・都跡小学校）

１）幼小連携を進めるために

幼稚園と小学校は道を挟んで隣接しており行き来するには、歩道橋を渡るということもあり、近くて遠い存在であった。小学校就学にあたる連絡会等や、一日体験入学等の交流、幼稚園の作品展を小学生に見に来てもらう等、断片的な交流はあったが子供の学びをつなげたり、職員が互いを知り合ったりする研修などの連携は行っていなかった。今回、取組にあたって、小学校の単元を意識した取組に、幼稚園がどのような内容を組み入れて行くのかを考え、互いのねらいが達成できるような工夫を模索した。また、打ち合わせの時間など研修の時間の取り方等は、前年度の研究の成果を参考にさらに工夫を重ねるように努めた。

２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導

（１）学校・園の概要

①　認定こども園都跡幼稚園

昭和２４年に都跡小学校教室併用して開園される。昭和２８年に園舎が小学校と道を隔て隣接した現在の場所に新築され、４、５歳児の２年保育が始まる。平成２６年に幼稚園型認定こども園となり、３歳児２クラス５０人、4 歳児２クラス６０人、５歳児２クラス６０人の１７０人定員としてスタートした。また、子育て支援として未就園児保育（０歳～３歳）、預かり保育等が始まった。

本園は､｢子供自ら遊びを創る｣を研究テーマとし､子供が主体的に環境にかかわり、友達と遊びのイメージを共有し、課題に気付きながら試行錯誤して遊びを創っていく実践を目標にしている。

「いいこと考えた｣｢こうしたい｣とこだわりや目的を持って、人・もの・ことにかかわる中で、そのものの性質や特徴に気付き、そのおもしろさに惹かれ、遊びを面白がる中に学びがあると捉え、環境の工夫や援助について研究を深めている。

園児数並びに職員数（園児　１３０名、職員　１６名）

学年	学級数	園児数	職員・人数
三年保育 ３歳児	2	５０	園長　1 主任教諭　1 学級担任　6 長時間保育担当　4 子育て支援担当　1 特別支援担当　2 業務員　1 合計　１６
三年保育 ４歳児	2	４１	
三年保育 ５歳児	2	３９	
合計	6	１３０	

② 都跡小学校

明治４３年、三つの学校を統合し、「生駒郡都跡村立都跡尋常高等小学校」として開校される。校区に、世界遺産に指定された『古都奈良の文化財』のうち、平城宮跡、薬師寺、唐招提寺を有し、歴史的由緒のある地域に立地している。本校は「主体的に学び，ともに高め合う子供の育成　～言語活動の充実を通して～」を研究主題とし、言語活動を充実させることによる学び合いの授業作りや、「単元を貫く言語活動」を意識した指導計画作りの研究を進めてきた。昨年１０月に、全国小学校国語教育研究会(大会主題:「伝統的な言語文化を通して主体的な思考・判断等を発動する学習活動の創造―言語活動の充実とその具体化－」)の、会場校として全クラス授業公開を行った。

学級数並びに職員数（児童　５３５名、職員　３３名）

学年	学級数	児童数	職員・人数
1	4	９１	校長　1 教頭　1 学級担任　２２ (特別支援学級を含む) 専科等　9 合計　３３
2	3	９０	
3	3	８２	
4	3	９５	
5	2	７２	
6	3	１０４	
合計	１８	５３６	

（２）取組の経緯

認定こども園都跡幼稚園と都跡小学校は、道路を挟んで隣接しているが、幼小連携の機会は少なかった。

本年度、文部科学省の委託を受け、幼小連携の研究を深めていくために、これまでの幼小連携を見直すことにした。さらに、昨年度の本調査研究における奈良市の幼保小連携の研究実践を参考に、より全市に展開しやすい幼保小連携の在り方も考慮し、子供達の主体的な学びを大切に、両校園の無理のない形で進めていくことを下記のように確認した。

① 教員同士の交流、学びの機会を持ち、互いの実践を知る。
② 小学校の授業の単元の中に幼小連携を位置付け、交流をしやすくする。(本年度は国語の単元)
③ 打合せや研修は、幼小の代表（少人数）が参加し、短時間で行う。
④ 非指示的指導を行い、自主交流を促すために、主体的な学びを大切にしていく。

これらの点を工夫しながら次の表のように実践を重ねてきた。

都跡幼小合同研修　交流会・打合せ・研修会日程

月日	時間	内容	場所
7/17 (木)	15:00 ～16:00	今後の取組について 【幼小合同会議】	小学校

8/19 （火）	13:00 ～14:00	５歳児の遊びについて 【幼小合同研修会】	幼稚園
8/29 （木）	10:00 ～11:00	２学期の交流について 【打合せ】	小学校
9/5 （金）	8:50 ～ 9:35	１年２組国語「夏休みの思い出お話会」 【幼稚園教員による授業参観】	小学校
9/9 （火）	16:00 ～16:30	9/11 の１年生活科「しゃぼん玉で遊ぼう」について 【事前打合せ】	幼稚園
9/11 （木）	9:50 ～10:20 （２限目）	「しゃぼん玉で遊ぼう」（１年全学級と５歳児） 【交流会】	幼稚園 園庭
9/11 （木）	16:00 ～17:00	「しゃぼん玉で遊ぼう」について 【振り返り研修】	小学校
10/7 （木）	16:00 ～16:45	10/10 の１年国語「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」について 【事前打合せ】	幼稚園
10/10 （金）	9:50 ～10:20 （２限目）	１年国語「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」（１年２組と５歳児） 【交流会】	幼稚園 リズム室
10/10 （金）	13:15 ～13：30 (掃除時間)	「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」 【振り返り研修会】	小学校
10/24 （金）	9:50 ～10:20 （２限目）	全国小学校国語教育研究大会 1年2組国語（単元名「昔話を楽しもう～5歳さんに昔話の読み聞かせをしよう～」） 【幼稚園教員による授業参観】	小学校
11/4 （火）	16:00 ～16:40	「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」について 【事前打合せ】	幼稚園
11/5 （水）	9:50 ～10:20 （２限目）	「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」（１年２組と５歳児） 【交流会】	幼稚園 リズム室
11/6 （木）	15:00 ～15:30	「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」について 【振り返り研修会】	市役所 (連絡会時)

（３）実践の展開

①　幼小連携を始める教員等の連携　～１学期の取組～

実際に園児と児童の交流を行う前に、教員等の間で研修を重ね、今後の幼小連携のねらいや在り方を共通理解した。

○　７月１７日（木）幼小合同会議（15：00～16：00）

本年度の幼小連携を進めていくために、これまでの幼小連携の見直しと、今後の取組の方向性について、幼小合同で打合せを行った。

小学校における教科の単元の中に交流を位置付けることで、小学校も無理のない学習計画を組むことができ互いに自然な交流ができるのではないか、ということで、１年２組の国語の単元「昔話を楽しもう」の中で、１年生が５歳児に昔話を読み聞かせるということを目標に取組を進めること

になった。また、互いに親しみを持つことで自主交流が生まれると考え、実際に読み聞かせを行う１１月までに、子供同志の交流を計画することが決まった。

○　８月１９日（火）５歳児の遊びについて職員研修（13：00～14：00）

幼稚園での「５歳児の遊びについて」の職員研修に、1 年生担任が参加する。写真や動画観ながら、５歳児の遊びの中の学びを話し合った。

「じっくり遊べる環境の中で幼児の学びがあることがわかった。」「幼稚園で培った力を小学校でどう活かしていけば良いかということを考えた」という１年生担任の感想があった。

○　８月２９日（木）二学期の交流についての打合せ（10：00～11：00）

まずは、「自主交流」「非指示的指導」についての理解を共通のものとした。「自主交流」とは教員が計画は立てるが、子供自身のやってみたいという思いから生まれる子供発信の活動であり、子供主体の交流のことであるということ、そして「非指示的指導」とは教員の意図や思いは持ちながら、子供が主体になるような指導（問い掛けや投げ掛け）であり、教えるのではなく、子供が気付いて動けるような指導であるということを共通理解した。小学校教員もこのことを意識し、当初は教員が提示しようと計画していた読み聞かせする昔話や読み聞かせの方法を児童が自ら考えて選ぶようにするなど、指導案の改善を行った。

また、二学期の交流についても話合い、第一回の出会いの交流会として９月１１日（木）に１年生４クラスが生活科の学習の一環として幼稚園の園庭に遊びに来るという、交流会を計画した。内容は、１年生が作ってくれたしゃぼん玉の吹き具で遊ぶ、幼稚園の園庭で自由に遊ぶということになった。

また、職員の研修として、９月５日（金）の１年２組の国語の授業参観に、５歳児担任が行くことになった。

②　子供の学びを繋ぐ自主交流の広がり　～２学期の取組～

○　９月５日（金）国語の単元「はなしたいなききたいな」授業参観

５歳児担任が、１年２組の国語の単元「はなしたいなききたいな」の『夏休みの思い出お話会』の授業参観に行く。グループで夏休みの思い出を話し合い、印象に残った友達の話を発表し合うという授業であった。友達に自分のことを話す、友達の話を聴く、聴いた話を話す、ということを伸び伸びと行えるような、教師のゆったりとしたかかわりが印象的であった。

○　９月９日（火）交流会「しゃぼん玉で遊ぼう」事前打合せ（16:00～16:30）

９月１１日（木）の交流会について事前打合せをする。まず、交流会のねらいとしては、初めての交流なので、互いに親しみを持てるようにするということにした。また、当日の流れは、前半は一年生が５歳児にしゃぼん玉の仕方を教える、後半は幼稚園の園庭で一緒に自由に遊ぶという内容に決まった。

○　９月１１日（木）交流会「しゃぼん玉で遊ぼう」（9：50～10：20）
（内容）①小学生が作った吹き具やロープでしゃぼん玉をする
②幼稚園の園庭で自由に遊ぶ

☆小学生が作った吹き具やロープでしゃぼん玉をする

○　始めは、自分から一年生に話し掛けることに戸惑っていた５歳児も話し掛けられたり、一緒にしゃぼん玉を膨らませたりすることで、すぐに打ち解け、楽しむ様子が見られた。

○　棒にロープを付けた道具は、一年生と二人で息を合わせて膨らまそうとする姿があった。息がぴったり合うと、大きなしゃぼん玉ができ、歓声を揚げたり感動したりと、一緒に楽しさを共有していた。

○　一年生が「ゆっくりやで。」「モールが曲がってるから直すね。」など、５歳児に優しく声を掛けてくれていた。

☆幼稚園の園庭で自由に遊ぶ

○　一年生も、久しぶりの幼稚園の園庭での遊びに、無邪気に遊ぶ姿があり、その姿を見て５歳児も同じように楽しんで遊んだ。

☆遊んだ後、互いに楽しかったことを話し合う時間を持つ

「しゃぼん玉がいっぱいできて楽しかった。」「大きなしゃぼん玉が膨らんで楽しかった。」「のぼり屋根に登って楽しかった」等、それぞれ思ったことを話した。

・一年生の姿が見えなくなるまで見送る。「また遊ぼうね。」「また幼稚園に来てね。」と、自然に思いを出していた。

＜交流後の５歳児の様子＞

「一年生に話しかけてもらえて嬉しかった」
「しゃぼん玉の膨らまし方を教えてもらった」
「一緒に大きなしゃぼん玉がつくれた」
「また遊びたいな」
「幼稚園にまた来てもらいたい」
「部屋にも入ってもらいたかった」
「僕たちも小学校行きたいな。」
「しゃぼん玉をもらったお礼が言いたい」
「お礼の手紙を書いて渡したい」

＜交流後の一年生の様子＞

「大きなしゃぼん玉を喜んでくれた」
「楽しそうにしてくれた」
「知ってる子がいた」
「また、一緒に遊びたい」
「もっと遊びたかった」
・５歳児の様子をよくみていた子が多かった。
・ふれあいの様子を絵日記に書いて思い出に残す。

○　９月１１日（火）交流会「しゃぼん玉で遊ぼう」振り返り研修（16:00～17:00）

交流会当日の午後に、振り返り研修を行った。その中で、交流後の子供たちの様子を話し合った。５歳児、一年生ともに、交流後の話合いで、子供たちの思いを知ることができ、今回の交流が子供たちにとって意味のあるものになったということがわかった。５歳児の、お礼の気持ちを手紙やプレゼントで伝えたいという思い、また一緒に遊びたいという思いを、今後の交流にもつなげていきたい。ということで、次回の交流会の日程を１０月１０日（金）と決める。

＜わかったこと＞

○　大きなしゃぼん玉をつくる道具（ロープ）が、協力しないとできない教材だったので、そこから自然にかかわりが生まれた。

○　教員が進める交流ではなく、遊びの時間を設定したことで自然な交流が生まれた。

○　小学校より、専門的なしゃぼん玉液の調合について教えてもらったので、その後の活動に生かすことができた。

○　１０月７日(火)

交流会「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」事前打合せ（16:00～16：45）

１０月１０日（金）の交流会についての事前打合せをする。

小学校の取組の経緯

教員の当初の予定では、国語の単元「サラダでげんき」の読み聞かせをペープサートで行えたらと考えていた。幼稚園児に読み聞かせをしたいという思いを持った一年生に、「幼稚園の子にわかりやすく読み聞かせをするにはどうしたら良いか」と訊ねると、「劇をしたい」「お面を作ったらわかりやすいと思う」という意見があったので、子供たちの思いを取り入れ「サラダでげんき」の劇をすることになった。

当日の内容は、①わらべうた遊び「おてらのはなこさん」「一本橋」、②一年生が５歳児に「サラダでげんき」の劇を見せる、という流れに決まった。観る、聴くだけの活動ではなく、互いの顔を見合わせて触れ合える時間を持つことが必要だと考え、わらべうた遊びを取り入れることにした。

○　１０月１０日（金）

交流会「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」(9：50～10：20)

（内容）①わらべうた遊び「おてらのはなこさん」「一本橋」をする

②一年生が５歳児に「サラダでげんき」の劇を見せる

☆わらべうた遊び「おてらのはなこさん」

○　１年生と二人一組になる時、１回目の交流の時よりも積極的にかかわろうとする姿があった。

○　二人組になって、自分の名前を言ったり、相手の名前を聞いたりする姿があった。

○　「一本橋」で、体の触れ合いも、抵抗なく積極的に行っていた。

☆一年生が５歳児に「サラダでげんき」の劇を見せる

○　ナレーターの児童が国語の教科書をスラスラと読む姿に驚く様子で見入っていた。
○　面を付けた動物が次々に出てくる様子に喜んでいた。
○　話し方の面白さ、１年生の動きの面白さ、両方を楽しんでいる様子だった。

☆感想を伝え合う

（５歳児）
・動物がたくさん出てくるのが面白かった。
・動物の面をかぶっていたから、とてもわかりやすかった。
・蟻の絵がかわいかった。

（１年生）
・緊張したけど、みんながちゃんと聞いてくれたから、劇をしやすかった。

→５歳児「緊張してるってわからなかったよ。」「上手だった。」

☆５歳児から一年生へ、前回の交流のお礼の手紙を渡す

☆面をかぶらせてもらう。

○　積極的にかぶらせてもらい、１年生と同じものを身に付けられたことを喜んでいた。
○　かぶらせてもらった面を、そっと片付ける等、面を大切に扱う姿があった。

＜交流後の５歳児の様子＞

「一年生のお話が上手だった」
「国語の教科書の話だった」
「教科書ってなんだろう？」
「ぼく達も、劇をしてみたいな」
「おてらのはなこさんを一緒にできて楽しかった。じゃんけん勝ったよ」
「いっぱいお話できたよ」
「また一緒に遊びたい」
○　教科書『サラダでげんき』のコピーを置いておくと、興味を持って見たり読んだりする姿があった。

＜交流後の一年生の様子＞

○　小学校に帰って、早速、次は何を読もうか考えたり、５歳児に喜んでもらえそうな昔話を探したりする姿があった。
○　絵日記には……
「緊張した」
「もっと遊びたかった」
「おてらのはなこさんを、また一緒にしたい」という思いが綴られていた。

○　１０月１０日（金）

交流会「『サラダでげんき』の読み聞かせをしよう」振り返り研修（13:15～13：30）

幼小互いの時間が限られていたので、小学校の掃除の時間に１５分と決めて振り返りを行った。

交流後の子供たちの様子を話し合い、前回の交流後に比べて、より親しみの気持ちを持つことができ、５歳児は一年生とまた遊びたいという気持ちを持ち、一年生は、次は何を読もうか５歳児に喜んでもらえそうな昔話を探すなど、相手を意識する姿が見られたことがわかった。この親しみの気持ちを持つことが、また次の交流への期待や意欲へつながっているということを共通理解した。

そして、次回の交流会の日程を１１月５日（水）と決めた。

＜わかったこと＞

○　子供の学び

＜一年生＞・・・憧れの眼差しで見られ、５歳児の喜ぶ姿を見たりして、自尊感情が高まり、次の活動への意欲が高まった。

＜５歳児＞・・・一年生ってすごい、自分たちもやってみたいと、刺激を受けた。次の交流への期待をもつことができた。

○　小学校の学習（国語の音読）と幼稚園の遊びの要素（わらべうた遊び、面をかぶらせてもらう）を組み込んだことで、互いの学びが深まった。

○　振り返りの時間が短くても、当日に伝えたいことを互いにまとめて振り返ることができた。このような、互いに無理のない時間の使い方が必要だと感じた。

○　１０月２４日（金）全国小学校国語教育研究大会　都跡小学校　授業参観

１年２組国語単元「昔話を楽しもう～５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう～」

５歳児担任教員が１年２組の国語の授業参観に行った。１１月に５歳児に昔話を読み聞かせる活動に向けて、自分達で選んだ昔話の読み方や声の出し方を工夫しながら音読する姿が見られた。

「どんな所を工夫して読んだか」の教員の問い掛けに「様子がわかるように」「怖いところは怖そうに」「ごめんくだせえの所は寒そうに」と、それぞれ工夫した所を発表していた。

＜わかったこと＞

○　ただ音読するだけでなく、どのように読んだら５歳児にわかりやすいかということを意識し、工夫しながら読むことをねらいとした授業を展開していた。授業の様子を実際に参観することで、この単元の中で何をねらっているのかということが、５歳児担任にもよくわかった。

○　１１月４日（火）

交流会「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」事前打合せ（16:00～16：40）

１１月５日（水）の交流会についての事前打合せをする。

１年２組の子供たちが、自分たちで選んだ昔話を５歳児に聴いてほしいという思いを持っている。「つるのおんがえし」「じごくのそうべえ」の二つに絞り、劇とペープサートを見せるということになった経緯を聞いた。

当日の内容は、①１年２組の読み聞かせ…劇「つるのおんがえし」ペープサート「じごくのそうべえ」　②わらべうた遊び「おてらのはなこさん」「一本橋」ということに決まった。

振り返り研修は、１１月６日（木）幼保小研修の前に行うことになった。

○　１１月５日(水)交流会「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」（9：50～10：20）

（内容）①１年２組の読み聞かせ「つるのおんがえし」「じごくのそうべえ」
②わらべうた遊び「おてらのはなこさん」「一本橋」

☆1年２組の読み聞かせ

○　「つるのおんがえし」の劇
- １年生が話の内容を全て覚えて、堂々と話す姿があった。
- ５歳児は、大きな声で話す１年生の劇に見入っていた。

○　「じごくのそうべえ」のペープサート
- 背景をロール式にするなどの工夫を子供たちが考えて作っていた。
- 背景の絵や、えんま大王の面など迫力があり、５歳児は喜んでいた。

☆感想を伝え合う
- 話を聞いた感想を５歳児が言ったり、小学生は工夫したところを教えてくれたりした。
- ここで、幼稚園の教員は小学生にねらいを意識した問掛けができた。「どんなことに気をつけて読んだか。」「どんな気持ちで読んだか。」など幼稚園教員が、交流の前段階の小学校の授業を見に行ったことが、ここでの話合いに生かされた。

５歳児の感想
- 声がとってもステキだった。
- 「つるのおんがえし」の話し方が面白かった。

一年生のねらいを意識した幼稚園の教師の質問
- 読むときに、どのようなところを工夫したり、気をつけたりしましたか？

一年生が工夫したところ
- 「ごめんくだせえ」の所を寒そうに読みました。
- 口を大きく開けて読みました。
- 鬼に食べられてしまう所を怖そうに読みました。

☆お話クイズ大会

○　読み聞かせが終わった後、計画にはなかったが、小学生から、いつもしているクイズ大会をしたいという声があり、クイズ大会が始まる。

○　「つるのおんがえしで、娘は何になったでしょうか。」「そうべえはどうして生き返ったでしょうか。」とのクイズに、すぐに答えることができた５歳児の姿から、読み聞かせをよく聞いていたことがわかった。

☆わらべうた「おてらのはなこさん」「一本橋」

○　以前の交流の振り返りの時に「またしたい」という声があったので、わらべうた「おてらのはなこさん」「一本橋」を取り入れた。

○　互いに親しみの気持ちを持ちながら、自然な表情でわらべうた遊びを楽しむ姿があった。

＜交流後の５歳児の様子＞

「大きな声で話をしていてすごかった。」
「じごくのそうべえ、面白かった。」
「劇の服がかわいかった。」
「１年生ってすごい。」
「クイズ大会が面白かった。」
「また一緒に遊びたい。」
「おてらのはなこさんの時に、名前を聞いたよ。」

○　１年生が堂々と音読する姿に感動していた様子だった。

○　読んでもらった話にも興味を持っていた。

＜交流前後の一年生の様子＞

○　劇やペープサートは、練習とは違う姿が見られた。幼稚園児に見てもらうことで、モチベーションが上がり、力が出せたのだと思う。

○　この取組に向けて、自信が付き、声が出るようになった児童もいる。

○　音読を２０回してくるなど、意欲が見られた。

○　緊張したが、５歳児が喜んで聴いてくれる様子がうれしかった様子。

○　１１月６日（木）

交流会「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」振り返り研修（15:10～15：30）

今回の交流会の振り返り研修は、共通の研修会（幼保小研修）参加の前に行なった。交流後の子供たちの様子や、交流までの児童の意欲的な学習態度について話し合った。今回の交流で、５歳児に読み聞かせをするという目的を設定したことで、音読への意欲が増した児童が多かった。５歳児は、これまで交流のあった一年生に読み聞かせをしてもらったことで、小学校の教科への関心や小学生への憧れの気持ちが芽生えたということを話し合った。

その後の取組

・「小学校に行ってみたい」という５歳児の思いから、小学校の校庭に行って体力駆け足をする。
・読み聞かせをしてもらった「じごくのそうべえ」の絵本が好きになり、生活発表会に向けて劇遊びを楽しんでいる。

（４）取組の成果

① 非指示的指導について

・「どんな話を読みたいか」「何をしたいか」というような、子供の思いを引き出す問掛けが、子供の主体的な活動を促した。
・教員が計画したことだけでなく、子供たちの思いや考えを柔軟に取り入れることが、子供たちの主体となって行う自主交流につながる要因と考える。

② 子供の学び（一年生）

・「幼稚園児達に、わかりやすいように読むには」という問掛けが、子供たちが「大きな声で読まないと聞こえないと思う」「様子を思い浮かべながら読んだ方が良い」と自分で工夫して読む姿につながった。
・家庭での練習にも積極的に取り組み、本を一冊全部覚えてしまう児童が何人もいた。
・交流をしたことによって、音読の力が更に付いた。ひらがなが読めず９月末までは１文２文をたどたどしく読んでいた児童が、１０月には昔話を一冊読めるようになり、１２月には教科書をスラスラと読めるようになった。

③ 子供の学び（５歳児）

・交流をしたことによって「一年生への憧れや親しみ」「小学校の学習への興味」「小学校への関心、期待」の気持ちが生まれた。
・大きなしゃぼん玉を膨らませる姿や、大きな声で音読する一年生の姿に、憧れの気持ちを持った。
・小学校にも行ってみたいという思いが生まれ、体力作り駆け足を小学校の校庭で行った。校庭の広さを感じ、小学校への期待が高まった。
・生活発表会に向けて「じごくのそうべえ」の劇遊びを楽しんでいる。一年生がしていたように、感情を込めて表現したり、観る人を意識して、大道具を作ったりする姿が見られる。

④ 教員等の学び

・小学生は、「どうしたらよくわかるか」「どのように読むと良いか」と考えたり、読み聞かせをした時の５歳児の反応や様子を見たりしたことで、自尊感情を高め、学習意欲が高まった。その結果、学力（音読の力）が向上したことがわかった。
・小学校の授業参観をしたことで、単元の中での授業のねらいがあること、授業の進め方など、小学校の学習の在り方がわかった。そのことが、幼小双方のねらいを達成する交流の工夫につながった。互いの実践のプロセスを知るという教員等間の研修が大切であることがわかった。また、「非指示的指導」や「自主交流」は、児童の「主体的な学び」を大切にしていくことで、達成できることが分かった。

⑤　教員の打合せ・研修のあり方

・幼稚園児の遊びの姿を、写真やビデオで説明したり、小学校の授業を参観する研修をしたりしたことで、互いのねらいがわかり、幼小ともに子供の思いを引き出すような教員の指導が大切だと共通理解できた。
・小学校は一年生の代表、幼稚園は５歳児担任２名という少人数での打合せをすることで、打合せの時間が取りやすかった。
・短時間で打合せができるように、話合いのポイントを決める等の工夫ができた。

⑥　交流について

・小学校の単元を超えない交流の工夫（幼稚園が小学校の単元の中にうまく入る）が必要だと感じた。
・小学校の国語の単元「昔話を楽しもう」の内容を、より意欲的に取り組むためのゴールとして、幼小連携の交流会を活用できた。
・交流の中に、小学校の学習の要素と幼稚園の遊びの要素が含まれた交流をしたことで、幼小どちらのねらいも達成できた。
・子供の思いを柔軟に取り入れることで、教員の計画的な交流から、子供が主体となった自主交流につながった。

⑦　次年度に向けて

幼稚園と小学校の互いが目指していることや非指示的指導とはどのような指導と捉えるのか、子供たちの姿を通して研修をしてきた。特に、事前の打合せや交流後の振り返りの時間を大切にし、互いの学びを明らかにしてきた。

その中で、上記のような成果が明らかになってきた。一方、小学校の「一日体験入学」は、日程調整の関係で事前の打合せを取ることができなかった。その結果、交流の中で小学校教員から１年生の児童に「幼稚園児にプリントを折ってあげましょう」や「ジャンバーを着せてあげましょう」等の指導があった。この時期の５歳児は、自分でプリントを折ることやジャンバー着ることができることから、事前の打合せにおいて、子供の発達や学び（どのようなことができるようになっているのか、どのような力が育ってきているのか）について具体的に幼稚園から小学校に知らせることの重要性について改めて認識した。

２．幼小合同研修のきっかけ作りに向けて

１）幼小連携を進めるために

幼児と児童の自主交流や非指示的指導による実践に向けて、現状を再確認するところから始めた。幼稚園と小学校の立地環境、幼児数と児童数の関係、教師間の連携等、様々なことで子供たちの交流が進んでこなかった要因を知ることができた。その現状からどのようにすれば取組を進めることができるのか、要因を改善すればできるのかを考える中で、立地環境や幼児・児童数も急激な変化はないこともあり、はじめの第一歩は教師間のつながりを持つことから行うことにした。

２）自主交流に基づく幼小連携と非指示的指導

（１）学校・園の概要

① 富雄北幼稚園

昭和 14 年に、生駒郡富雄村立富雄北幼稚園が富雄村立国民学校内に、当時は３年保育の幼稚園として設置され、昭和 30 年富雄町の奈良市合併に伴い、奈良市立富雄北幼稚園となる。現在は２年保育と預かり保育を実施している。奈良市の北西部に位置し、通勤の利便性や駅前開発事業の推進に伴い、以前の田畑や里山は宅地化され、年々交通量が増加している。園児は明るく素直で、語彙も豊かで自分の思いを伝えられる幼児が多い反面、室内で遊ぶことが多いことから、友達と身体を動かして遊ぶ経験や様々な人とのかかわりが少ないこともある。

・幼児数並びに職員数　（幼児　72 名　、職員　7 名）

学　年	学級数	幼児数（人）	職員（人数）
２年保育 ４歳児	1	22	園長　1 名 主任　1 名 学級担任　3 名 特別支援担当　1 名 業務員　1 名 合計　7 名
２年保育 ５歳児	2	50	
合計	3	72	

② 富雄北小学校

創立 136 年目の伝統ある学校で、平成 26 年度は児童数 686 名の大規模校である。命の尊さや生きることの喜び、命を大切にすること等を伝えるために「命の授業」に取り組む活動が、今年で 10 年目を迎えた。

・児童数並びに職員数

学　年	学級数	児童数（人）	教員（人数）
１年	4	110	校長　1 名 教頭　1 名 学級担任並びに専科 37 名 合計　39 名
２年	4	105	
３年	4	113	
４年	4	105	
５年	4	141	
６年	4	112	
合計	24	686	

（富雄北幼稚園と富雄北小学校との位置関係の地図）※参考：Google　？地図の著作権？

富雄北幼稚園と富雄小学校とは、川と大きな道路を挟んで 200mほど、離れた所に位置している。

子供に寄れば 10 分弱で互いに行くことができる場所にある。

富雄北小学校とは、交通量の多い大きな道路を挟んで位置している。富雄北小学校は、児童数も 687 名と大規模な学校であり、富雄北幼稚園から入学した子供は各クラスで半数以下となっている。近隣の幼稚園と小学校であるものの、かかわりはとても少ない現状にある。

（２） 取組の経緯

毎年、幼稚園、小学校ともに連携の重要性を意識し、取組を進めようとしていたが、幼児数と児童数が多かったため、子供の交流場所に限りがあったことや近隣とはいえ交通量の多い道路を横断することになり、安全面を考えると交流する機会が少なかったと言える。

しかし、小学校就学前の健康診断を行う時や特別支援の必要な幼児に関する連絡等には、積極的に教師間で話し合うことはできていた。子供同士の交流となると、年１回の体験入学が、唯一それに当たり、体験入学の内容では、１年生の対面式の発表を見ることや一緒に遊ぶことがあった。それから、幼稚園の担任教師が学校内を案内して終わることが多く見られた。

（昨年度の交流内容）

・体育館に集合する。校長・教頭の話を聞く。
・幼稚園の担任教師がクラスの幼児を連れて回る。
・校舎内を見て回る。

・１年生の教室に入る。
・１年生と挨拶し、机に座る。
（ぶんぶんゴマを教えてもらう。ぶんぶんゴマをもらう。）

・体育館に戻る。
・１年生と貨物列車をする。
（ペンダントのプレゼントをもらう。）

（昨年度までの幼小のかかわり）

・校長先生のお話を聞く会
「就学にむけて頑張っておくこと」
「小学校はこんなところ」

と、写真を見せて話をされた。
子供たちは１年生になろうという意欲をもって聞いていた。
・園から幼稚園の様子を知らせる新聞を小学校に掲示（一昨年のみ）

このような数少ないかかわりが見られただけであったので、子供たちの交流活動を行う前のきっかけ作りとして、教員間のつながりを大切にしていこうと考えた。そのためには、昨年度の幼保小合同研修の実践報告の取組を参考に、『お互いのことをよく知り、お互いを尊重しながら、意見を出し合い、具体的にひとつひとつ進めながら考える』ということを心懸けるようにした。取組の大きな柱として、「教員間のつながり」「互いの教育の理解や教育観のつながり」を考えた。

教員間のつながりでは、特別支援教育の教員との交流、校長との交流、１年生の担任教員との交流、その他の小学校教員との交流を図った。

互いの教育の理解や教育観のつながりとしては、特別支援教育について、『命の授業』の内容や指導案について、園内作品展見学から実践することにした。

ａ．きっかけの第一歩

（ア）平成 26 年度の教員間の関わり

月	内　容	関わり
5 月	特別支援の研修（園内研修会の公開保育）教育相談課指導主事より、子供の様子について話を聞く。）	小学校教員（10 名）
7 月	富雄夏祭りでのお神輿作りに参加（富雄北小学校において）	小学校教員（神輿づくり参加希望者）
8 月	地域主催の夏祭り燈花会に参加、小学校教員との顔を合わす程度	小学校教員（自由参加）
9 月	特別支援の必要な幼児について個別研修（幼稚園にて）	小学校特別支援担当教員
9 月	年長児全員が幼稚園運動会へのお知らせとして、ポスターを小学校へ持参。校長室に入る。	校長
10 月	幼稚園教員が地域主催の秋祭りで幼稚園児の絵や作品を展示するため、小学校へ持参（2 日間）	小学校教員　自由参加

10 月	県教育課程公開保育で必要なパイプ椅子を、小学校に借りに行く。	小学校教員（10 名）
11 月	11 月 17 日の富雄北小学校での一年生の担任教師から「命の授業」についての指導案を見せてもらい、園での子供たちの様子が、小学校での活動につながるように、保育内容や一時限の授業内容を話し合った。	小学校一年生担任講師
11 月	園内作品展に小学校教員が鑑賞 鑑賞の際には、幼稚園教員が子供の様子や制作過程を説明した。幼児の作品について学校に戻られて、話されたことで、高学年図工の専科の教員等も次の日に見学に来られた。	校長・教頭・３年担任・１年担任 高学年図工の専科

b．きっかけの内容

(ア)幼小の教員同士のつながりをもつためのきっかけ（幼稚園からの取組）

月　日	内　　容
5/9（金）	・特別支援の必要な幼児への支援についての研修を行うことを伝える。
5/21（水）	・園内研究会（特別支援の研修）に、校長はじめ 10 名程度の小学校教員の参加予定を聞き、指導案を持っていく。
7/22（火）	・7/23 の第 1 回幼保小合同研修推進委員会へ研究部員の参加依頼をして、ともに幼小連携を進める取組を伝える。しかし、学校行事（11/17 の命の授業）での忙しさがあり、参加できない旨を聞く。
8/29（金）	・教頭が事務連絡の資料を市役所から幼稚園の分も一緒に持って帰られ、11 月 22 日のパイプ椅子借用についてと「命の授業の指導案」についても再度依頼する。
10/1（水）	・地域主催の秋祭りで幼稚園児の絵や制作の作品を展示してもらうため、小学校へ展示場所の確認に行く。
10/4（土）	・秋祭りの幼稚園児の作品の展示準備をする。PTA 小学校役員と教頭との話をする。
1/27（火）	・一日体験入学の内容について、紙面に基づき一年生の担任教員と話し合い、子供たちが互いに育ち合えるようにと考え、内容を検討する。

(イ)　教員同士の話すきっかけ

7/25（金）	・地域で行われる富雄夏祭りに向けてのお神輿作りに、幼稚園教員も参加。地域のコーディネーターの指導の下、夏休み朝のラジオ体操参加後に、富雄北小学校においてお神輿作りを行う。 8 月 9 日の夏祭りで地域の子供たちとして、幼稚園児も神輿を担ぐことになり、参加する親子とともにお神輿作りに参加。小学校教員とともに同じ場で制作をするが、お神輿作りの話をする顔を合わせるのみ。
9/1 （月）	・8 月 9 日から 8 月 16 日になった富雄北小学校での燈花会に使用した、幼稚園児の蝋燭を小学校教員が持ってこられる。挨拶とともに顔を合わせて話す。
1/13（火）	・2 月 10 日の一日体験入学について、教頭先生との連絡をとる。 後日、内容等について紙面で連絡することを聞く。

(ウ)幼児教育についての理解を図るきっかけ

5/22（木）	・特別支援教育の園内研究会 来年度、就学する子供たちの様子を 10 名の小学校教員が参観する。教育相談課今西指導主事より指導を受ける。幼稚園教員は、全ての子供の様子を見ながら、特別支援が必要な幼児の集団生活での動きを話す機会を持ったり、幼稚園での学びを遊びの姿を捉らえて、小学校教員へ説明したりする。
8/22（金）	・県教育課程研究集会を幼稚園での公開保育発表のために小学校のパイプ椅子を 100 脚、借りられるかお願いする。教頭と校長に話をして了解を得る。➢10 月 21 日放課後に借用。10 月 23 日返却予定。
8/26（火）	・校長に「命の授業」の指導案を見て研修したい旨を伝える。 1 年生の担任教員に伝えてもらえる。
9/2（火）	・特別支援の必要な幼児についての研修（特別支援教員 2 名） 特別支援の必要な幼児 2 名について、保護者の考え、本人の様子について話をする機会を持つ。小学校ではうかがいにくい内容等であるため、小学校特別支援担当教員から、幼稚園教員（担任）で、本音を聞き取り小学校へつなげてほしい旨を聞き、対応する。
9/11（木）	・特別支援担当小学校教員 1 名来園。9 月 2 日の話の続きを話す。
9/17（水）	・富雄北幼稚園の運動会を小学校に知らせる。運動会のポスターを貼ってほしいことを伝え、了解を得る。
9/18（木）	・運動会の手作りポスターを小学校に持っていく。校長室に招いてもらい、校長から年長 2 クラス全員で話を聞く。その後、運動場で 1 年生の運動会の練習風景を見る。

（３） 実践の展開

① 職員間のつながりから

ａ．特別支援担当教員との交流

5 月　特別支援園内研究会

・A 児へのかかわりや今後どうしていけばよいかを職員全員で研修する

・園内研に来てもらえるよう小学校教員に知らせる

・講師と個別に話をし、今困っていることについて相談する時間があった。

9 月 2 日（火）　15 時 30 分～　特別支援担当教員との交流①

・B 児の就学に向けて。小学校教員からの話では、教育相談後母親から教育委員会に電話があったらしく、「普通学級に在籍し支援を受けたい。」と言っておられるとのこと。そこで保護者の考え、本人の様子などを知りたいと、特別支援学級担任の教員 2 人が来られた。教育相談の様子を伝える。C 小学校と D 小学校の特徴を理解し、B 児に必要とする環境を考えておられることがわかった。友達とのつながりを大事にしながら刺激を受けて生活してほしいと考えておられることと、昨年からの A 児との親子関係を伝えた。特別支援担当教員からは、保護者の今の心境を聞き出せるように声掛けをしてほしいと依頼される。

9 月 11 日（木）15 時 45 分～　特別支援担当教員との交流②

・保護者の考えは確実なサポートを受けたいことが主で、そのためなら支援学級でも普通学級どちらでもいいことや、明確にはサポートと支援学級のシステムがわからないことを聞いて伝えた。また 9 月 2 日以降の子供の様子も伝えた。

特別支援学級の教員から親子で見学の日を相談する電話をしてみますと聞いた。

（反省・評価）

・特別支援を必要とする幼児を中心に、保護者の思いとともに、幼稚園での子供の姿を話し合ったが、幼児一人一人についても、その幼児の成長と同じように小学校へつなぐことが必要であると思われた。就学前教育相談にも幼稚園での子供の姿を詳しく話したり、保護者の思いを信頼関係のある幼稚園の担任教員から聞き取る大事さがわかったりして、小学校就学に向けて、大切なことは何かと話し合うことができたのではないだろうか。

ｂ．校長との交流

9 月 18 日（木）9 時　運動会のポスター掲示　運動会のポスターを小学校に届ける

・毎年、幼稚園の運動会お知らせの手作りポスターを小学校にも掲示させてもらっている。本年度は、年長児全員で、運動会の手作りポスターを小学校に掲示してもらうために届ける。校長室に入れていただいて校長に渡す。「長い時間話しが聞けるかな？」「我慢できるかな？」など小学校までにできるようになっておいてほしいことを話ししてくださり、小学校の教員に教えてもらったことだけに、心掛け頑張ろうとする幼児が増えた。運動会に向けて取り組んでいる最中だったので、その時期に合致した目

標をいただき、子供たちの意欲も高まった。

校長とさよならした後、1 年生が運動場で体育の授業をしている様子を見学させてもらった。運動会の徒競走を練習していて、走り方や走った後の姿などを見て、新鮮な眼差しで見ながら、自分たちのリレーの時にやってみよう！真似てみよう！とする姿が見られるようになった。

（反省・評価）

・校長には、機会あるごとに幼稚園に来てもらっているので、子供たちにとっても気軽に挨拶ができる校長ではあった。校長室に招き入れてもらったことで、小学校で話を聞くということに緊張した姿が見られた。しかし、小学校に向けての心構えを教えていただけたことで、自分たちが少し大きくなったように感じたり、より意欲をもって幼稚園の運動会に取り組もうとしたりする姿が見られた。

② 互いの理解からかかわりの広がりへ

a．小学校１年生の担任教員との交流

11 月 11 日（火）15 時 30 分～　「命の授業」についての話合い

・11 月 17 日には小学校全学年で「命の授業」を行うことを知る。１年生だけでなく他学年の内容も聞くことができた。授業の内容で、幼稚園でも使っている教材があることに気付いたり、１年生の担任教員には幼稚園教育のカリキュラムを知ってもらえたりできた。

・「命の授業」の指導案をいただき、内容を見る中で幼稚園でも１年生につなげていくためにできることは何かを幼稚園教員間で話し合った。幼稚園では、「いかのおすし一人前」の話や命の大切さを子供たちに気付かせるようにした。

1 月 27 日（火）17 時　一日体験入学について話し合う

・一日体験入学の日程や取組について、紙面で知らせてもらった。

・1 年生の学習参観や交流について、幼稚園からも意見を出し、昨年の一日体験入学とは少し変化した取組を行うことにした。

（一人ずつ机に座って１年生の音読を聞いたり、教科書を見たり、ランドセルを背負わせてもらったりする　等）

（反省・評価）

・繰り返し小学校教員に幼稚園から発信し続けたことで、無理なく小学校の授業の話や小学校における体験入学の内容についても意見を聞いてもらえることができた。幼稚園児が何を楽しみにしているのか、何が憧れで、小学校の生活について何を知りたいと思っているのかも話すことができたことで、内容に変化が見られた。

b．幼稚園の園内作品展から

11 月 29 日（土）9 時～　園内作品展見学・見学後の話し合い

・園内作品展について、知ってもらう機会として案内の手紙を配布する。小学校へ持参し校長を通じて他の教員に見ていただけるようにした。

・園内作品展の参観日に小学校教員が見学に来られる。

　その中に前校園で幼小連携させていただいていた小学校教員がおられ、3 年生の担任教員をしておられるとのこと。授業の中で幼児との交流を持たせていただける機会はないかと声掛けると、他の教員にも知らせてみますと言ってくださった。

・土曜参観の際に作品展の見学に１０名程度の教員が来園。

　作品展や参観を一緒に回り、作品の説明や作品作りの過程、素材教材について、遊びや活動について、などを伝えながら、小学校での取組方や内容についても尋ねる。

・小学校の絵の具の使用方法について質問したり園でのそれまでの経験（遊びの中での学び）について知らせたりする。

→　年長の絵画を見ながら､「この時には、絵の具は先生が溶いて部屋の真ん中において自分で絵の具を取りに行く､という形でしています。小学校ではどんな風にされているのですか。」と尋ねると「ひとりひとりが　絵具をといていますね。」と聞かせていただく。

・小学校教員からは作品を見ながら制作方法などについての質問があった。

→　これは年少の作品ですか。自分で切っているのですか。

→　制作物のアイデイアを見て教材の使い方、利用の仕方を見られる。

12 月 2 日（火）園内作品展

・図工の教師が作品展見学。

　図工の授業の際の、素材集めについての話を伺う。子供が作品の材料を集めてくる際、自分でどれだけイメージできるかということが大切であるということを聞き、幼稚園での経験としてそのためには経験やいろいろな素材に触れていること、知っていることで、小学校での作品制作の際に、イメージする土台が広がることを知った。

（反省・評価）

・園内作品展への見学を伝えたことで、今年は多くの小学校教員が見学に来ていただけた。幼稚園の子供の作品を通して、子供の発達の姿について話す機会を持つことができたり、小学校での絵画・工作についての指導の方法を少しうかがうことができたりした。幼稚園で様々な経験をしておくことでイメージが広がり、作り上げていくことが分かった。また、それがイメージできない子に対して、親が必要以上にやってしまったり、既成の物を与えたりすることもあったりするので、何を経験させたいかを知らせていく啓発や家庭との連携の深め方についても課題やヒントを学ぶことができた。

ｃ．一日体験入学

小学校の体育館に集まり校長から話を聞いた後、校内を見学して回り、１年生の教室で『音読』学習参観をした後、１人ずつ教室の椅子に座らせてもらって国語の教科書を開いて音読の様子をしたり、筆箱を開けてみたり、一人一人ランドセルを背負わせてもらったりした。その後体育館に戻り、一年生と一緒に「かもつ列車」を行った。

（反省・評価）

・一日体験入学は、小学校教員に幼児の今の発達の姿を知らせることができた。しかし、子供たちが自ら取り組む活動を通して、自主交流や非指示的指導についても気付いてもらえる機会を持つことはできなかったので、今後も互いの教育観を話し合うことを繰り返し、知らせていく必要があると思われる。

（４）取組の成果

○　教員間のつながりは、幼児と児童がかかわり、交流する前の第１歩になると思われる。そして幼稚園からのアクションを持つことや、どちらからかのアクションを持つことで取組が進んでいくのではないかと思われる。

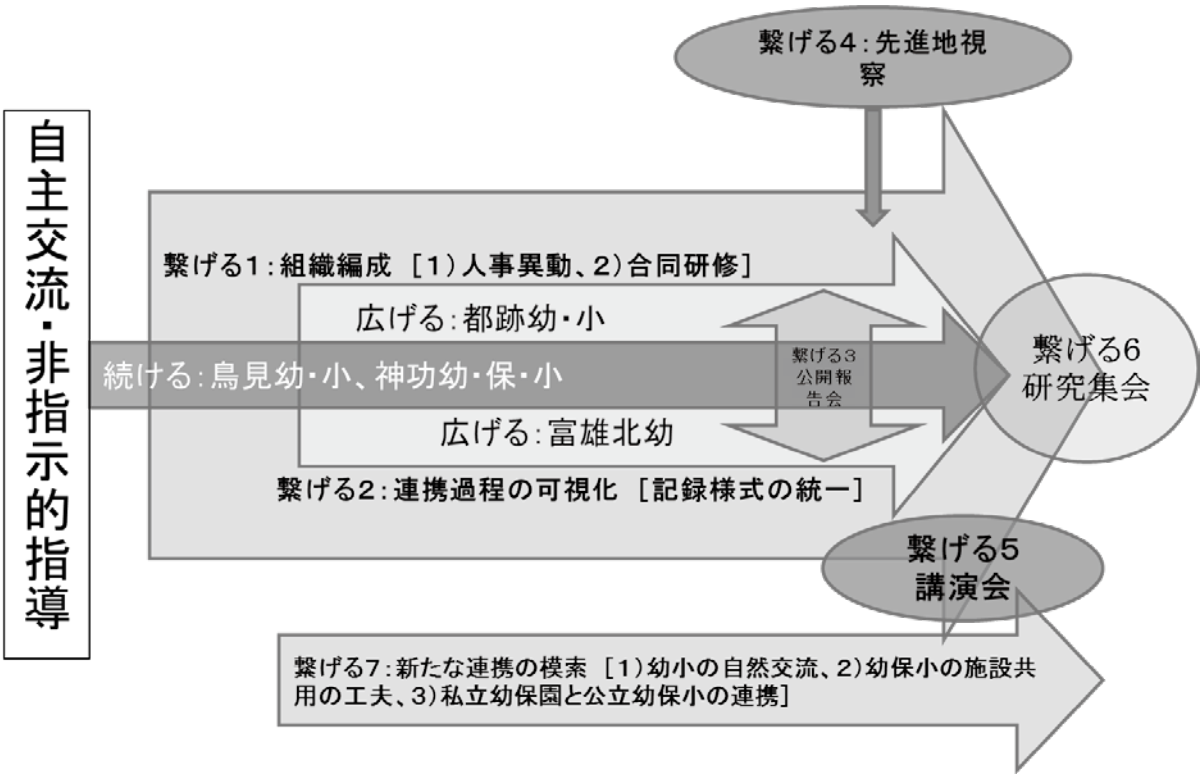
アクションを持つ時には、小学校の考えを十分知った上で進めていくことが大切であること、「できることからはじめる」「次回に向けて１つ１つすすめる」ことに気付くことができた。

○　互いの教育の理解、教育観のつながりとしては、目の前にいる子供たちを通して、互いの教育について語る機会を持つ。その中で指導案を知り、互いの教育カリキュラムについて知ることができることがわかった。学びがつながっていくことを意識した話合いを持つことが大切であることに気付いた。

○　これからの課題として幼児と児童の交流活動に向けて非指示的指導の理解を教員間で深めていきたい。

Ⅳ「つなげる」: 開発した実践の普及と発展

図Ⅵ－１は、本研究で「つなげる」に関して行った取組を示したものである。「つなげる１」から「つなげる７」まで７つの取組を行った。横が時間軸で、左から右に時間が流れている。赤で示した矢印は、自主交流・非指示的指導を「続ける」２つのグループを示している。黄色の矢印は、その取組を「広げる」２つのグループである。水色あるいは青色の矢印や丸が「つなげる」の取組である。以下では、これらの取組について述べる。



図Ⅵ－１.「つなげる」の取組

１．組織編成

１）人事異動

（１）「続ける」: ２年目の研究実践校園

この２グループは、以前から連携の取組が比較的進んでいる校園である。連携学年の担当者が替わっても取組を続けていけるように、教員等間で方向性を共通理解する場を確保してきた。そして、昨年度からは、「自主交流」と「非指示的指導」に焦点を当てて調査研究を行ってきた。

今年度、人事異動でメンバーが大きく替わった。そこで、推進委員や研究部員だけでなく、その他の教員等も加わって互いの教育観・保育観や実践に向けての話合いの場を調査研究開始時に持ち、管理職を中心に方向性を定めて協働体制を強化させた。

このことから、「続ける」には、日頃の共通理解が重要であること、大きな人事異動があった場合は、管理職の力が重要になることがうかがえる。

（２）「広げる」：１年目の研究実践校園

この２グループは、共に交通量の激しい道路を隔てた環境にあることから、園児や児童が行き来するには難しく、幼小連携の拡充まで至りにくい面が課題となっていた。しかし、立地条件を乗り越え、「自主交流」と「非指示的指導」に焦点を当てて幼小連携を行うために、管理職を活用した。

富雄北幼稚園には、昨年度本研究に携わった指導主事が管理職（園長）として配属された。都跡幼稚園は、長年指導主事として文部科学省委託調査研究事業に携わってきた園長が配属された。

さらに、都跡小学校では、元幼保小連携の実践校に勤めていた教師が１年生を担任した。そして、自主交流や非指示的指導に必要な教育要素を熟知している教員等同士が共通理解を図って実践研究を行うことで、幼小連携を急速に広げた。

このことから、「広げる」には、管理職や教員等の役割が大きいことがうかがえる。互いを受け入れ合い、幼小連携の必要性や重要性を理解して協働していくには、意図的な人事異動も時には必要になると言える。

２）合同研修

（１）目的

以下の３点を目的とした。①互いの実践内容や工夫を共通理解し、具体的な子供の姿から非指示的指導の方法や効果を明確にしていくこと。②子供の思いや姿から、柔軟に対応し、自主交流を広げていくこと。③今までになかった新たなことや意識していなかったことなどの気付きが次の実践に役立てること。

（２）方法

①研修の場の確保

各校園の教員等が合同で行うために、細かい調整は電話連絡などで行い、合同研修では、取組の工夫や振り返り、学びや成果などに要点を絞って協議し合うようにした。

②工夫

２年目の実践校園では、要点をまとめておいて打合せを効率よく行ったり、小学校の朝礼に代表者が加わって情報共有を行ったりなどの工夫をした。

１年目の実践校園では、管理職を軸にきっかけを生み出したり、代表者の数名で打合せを行って短縮化を図ったりするなどの工夫をした。

（３）効果

大きな段差は認識しているが、実践に基づき合同研修を重ねることで、この大きな段差を乗り越えるための小さな段差が見えるようになった。子供に付けたい力を明確にすることにもなった。

２．連携過程の可視化

どちらがどのように働き掛けたのか、どのような内容を伝え、それにどのような反応を示したのかなど、各校園同士の働き掛けの形を、見えやすく、分かりやすくするために、記録表を統一した。その記録表が図Ⅵ－２である。この図の枠と、ゴシック体で書かれた文字等はあらかじめ印刷したも

のであり、矢印を○で囲んだり、方法から選択肢を選んだり、明朝体の部分を手書きで書き込むようになっている。

日　時	平成２６年　８月２０日（ 水 ）　１２時５５分～　　時　　分	
校園名　神功幼稚園 氏名 松島		校園名　神功小学校 氏名 向井
矢印はどちらかを○で囲んで下さい。		
方法	電話　　訪問・来園校　その他（保幼小中合同研修前に口答で。）	
内　　容		
担当者から ○わかりました。よろしくお願いします。		相手から ○友達探しゲームのグループのことですが、10グループで分けてもらえますか？お願いします。

図Ⅵ－２　記録表の様式例

この様式で記録を書いた者であれば、様式に書かれた内容を読むだけで、当時のやりとりが想像できる。また日時を追って読み進めれば、連携過程をたどることができる。さらに、この記録を分析すれば、１つの交流会を行うために、いつ頃、何をすればよいかも理解できる。このように統一された様式は、情報共有に役立つ。

さらに、この記録を詳しく分析すると、実践者の意識の変容や連携を促進する要因をも読み取ることができる（資料４）。

３．公開報告会

２年目と１年目の校園がペアを作り、それぞれの実践の中間報告を行った。これを公開報告会と名付けた。公開報告会は 11 月に２回に分けて実施した。第１回は神功・都跡校園の報告とし、11 月６日（木）15 時 30 分から 17 時に、第２回は鳥見・富雄北校園の報告とし、11 月 21 日（金）15 時 30 分から 17 時に行った。それぞれの会に他の校園の者も参加し、カンファレンスを通して情報交換を行った。各回の公開報告会の流れは次の通りであった。

１．幼保小の実践経過報告

２．小グループによるカンファレンス研修

①　自主交流を主にした幼保小連携の実践を行う中での、研修の在り方について

②　非指示的指導に焦点を当てた指導内容や指導方法について

（連携体制の工夫や手立て・研修の在り方・子供の学び・ 教員等の学び）

３．各グループからの報告
カンファレンスの内容報告
その他（参加者より感想・質疑応答）
４．奈良市幼保小合同推進委員によるコメント等
①　委員によるコメントと指導助言
②　委員長による講演

カンファレンス研修には、日頃の合同研修でも、短時間で効率よく研修ができるようになることと、様々な時間を効果的に使えるようになることをねらいとして、次の４つの「仕掛け」を入れた。

①　研修案内の際、事前に何についてカンファレンスをするのかを各校園に伝えた。

②　推進委員・研究部員以外の実践校園の教員等も研修に参加できるようにし、事前に参加者を把握しておいた。その上で、カンファレンスを行うグループ数を決め、「校園のメンバーが分かれてグループに入ること・実践の報告者は分散してグループに入ること」という条件の基に、グループを作り、カンファレンスを行うようにした。

③　全ての参加者が、その日の研修で自分の意見を発言する場を作った。このために、グループの中で、自己紹介を兼ねて、はじめに１人ずつ話していただくときには、２分ずつの持ち時間と決めた。

④　２分という時間を意識してもらうため、各グループにキッチンタイマーを準備した。

（１）カンファレンスを通して共通理解した学び

（非指示的指導）

○　非指示的指導を意識していることで、教員等の行動や援助の方法に変化が生まれた。ただ交流する姿を見守ったり、活動を進めたりすればよいのではなく、子供から引き出すための役割を意識して言葉掛けやかかわりをすることで、子供の姿に変容が生まれる。その重要性と成果を実践の中で明らかにしていった。

○　非指示的指導に焦点を当てた各グループの実践報告から、子供の主体性が大切であることが共通して報告されていた。教員等の意図を前に出さず、子供自身で気付くことがポイントになっていることが確認できた。

○　教員等が直接言うのではなく、子供自身が活動や遊びに自由に「入りたい」「やってみたい」という思いを大事にして子供同士が刺激を受け合って自からすることが非指示的指導の一つである。

○　交流会当日までに、教員等間で連絡を取り合い、準備や活動内容を把握して共通理解を深めておくことで、当日の進行がスムーズになり、ゆとりを持って子供の様子をじっくり見て、非指示的指導を意識してかかわれた。

○　子供自身で進めていけるように「仕掛け」を工夫する。

○　子供が自由に行動できる環境を作っていくことで、子供は安心感を持って進んで取り組める。

（自主交流）

○　計画している教育課程以外の自由選択的なこと。

○　子供の主体性を大事にし、子供自身から生まれる交流であり、自主交流を広げるためには、非指示的指導を活かすことが必要。

○　子供の姿を通して教員等同士で目指す子供像を明確にしながら検討していく。

（合同研修の在り方）

○　交流後の教員等同士の振り返りは、その日のうちにする方がよいということ感じて、短時間でも時間を作って行えるように工夫し、限りある時間を有効に使って連携を進めていく取組の工夫は、連携体制の構築に大きな役割を担っている。

○　振り返りを通して、子供が感じたことや楽しかったことなど、互いの子供の成果についても情報の共有を深めることにつながった。

○　単元の中でどう交流していくかという新しい連携の在り方が見えた。

○　実践を見たり知ったりする機会を設け、互いの教育内容のプロセスや理解を図る機会を作っている。このことが、後の交流のきっかけを生み出す接点にもなった。

○　少人数のグループで話し合い、各校園内で伝えていくことで効率よく進められる。

（２）公開報告会から見えてきた今後の方向性

○　合同研修・振り返り・打合せをどのように持つのかは、昨年から続けている２年目（神功）の校園で工夫してきた「短時間で、ポイントを絞って」という方法を活かして、１年目（都跡）の校園で、更にコンパクトにして、交流当日の掃除の時間を活用して１５分振り返りをするなどの工夫も生まれてきたことは、コンパクトの部分が更に短くできるかもしれないという新しいポイントとして伝わっていく。

　また、昨年度の成果と課題を土台に、今年度更に実践研究で見えてきた成果を互いに活かし合い、展開していけばよいと思う。

○　昨年度神功に行ったが、子供達の中に連携接続の経験が積み重なっている。積み重ねがあって、子供達から進んで交流するようになるので、重ねていくことの大切さが分かる。

○　互いを知ることの必要性を理解していたことから、国語の単元に着目した都跡グループ。教科の中で交流活動をするのは難しいと思うが、単元の中でどう交流ができるのか、新しい連携の在り方を考えていくための交流の在り方ではないかと思う。

○　子供達のために一歩一歩していく中で見えてきた子供の姿から、教員等間の連携を進めていくことになる。

○　神功幼保小では、合同研修を「全体会議」として位置付けようと進めている。幼保小の担当学年や管理職が揃って全体会議を続ける連携の工夫が充実している。

○　今ある環境を変えるよりも自分（教員等）が変わることはすぐにできる。
自分の行動が人を変える。自分の行動が環境をも変える。

○　目に見えないことを認めていくことで、更に意欲を高めることができる。「こんなことをした

い」という思いが大事。

○　連携を始めるために必要なことを 1 年目の実践校園で見付け出している。きっかけのきっかけを作って、次年度につながるようにしていく。

（3）学びの共同体作り

○　この公開報告会の利点は、文字にするということ。みんなが話せること、書いてまとめることから、他の所にどんどん伝わっていく。カンファレンスの機会を多く持ち、教員間で共通理解し、共同体を作っていく。

子供の中にも学びの共同体を作っていくことで、社会参加のきっかけにもなる。

○　批判的指導ということで、他の人から見てどうかという客観的に見る。

○　思い込んだとしても本当にそうだろうかというワンクッションを置く。

○　広い視野と鋭い視点を関連付けることが広い視野につながる。

○　交流会の応用として、公開保育などでは自分の実践や授業を開いていくのもよい。

○　その後のカンファレンスが重要。時間を区切ってカンファレンスをするなど、本日の報告から出ていたように、その日のうちに振り返りをするのは良いことだと思う。時間管理の工夫・自主交流・仕掛け・振り返り・記録がキーポイント。

4．先進地視察

1）先進地視察

研究実践校園の研究部員５名が、先進校園における幼小連携の実践を視察した。

小学校、幼稚園のそれぞれの立場から、幼小連携を進めるために、子供自ら考え行動し、子供も自身の可能性を最大限に引き出す環境構成の工夫や教員等の援助等について視察を通して学んだ。

幼小の学びの連続性について知ることで、自校園での連携が更に深まり、今後の実践計画にも活かすようにした。

・先進地園：鳴門教育大学附属幼稚園　園長　佐々木　晃

〒770-0808　徳島県徳島市南前川町 2 丁目 11 番地の 1

℡　（088）652-2349

・日　時：平成 26 年 11 月 28 日（金）

・参加者：奈良市立鳥見小学校　1 年担任　田中美香子

奈良市立神功幼稚園　5 歳児担任　松島久美

奈良市立認定こども園都跡幼稚園　5 歳児担任　山中裕美子

奈良市立富雄北幼稚園　5 歳児担任　小村有貴

事務局　こども園推進課　和田江利子

〔子供の学び〕・・・小学校につながる力

○　数量・図形・連続性・分離量・平面から立体・審美的な感覚・部分と全体・因果律など、遊びの中で育む子供の学びを教員等が意識する。

○　幼児の無意識を顕在化する（小学校：学習、幼稚園：生活がベース）
○　時計がなくても生活の時間と時計の時間は違う。アナログ時計のように動きとして読めないと子供には伝わらない。
○　１年生から６年生まで相互につながり合い、交流の準備をする。（計画・準備の動機付け）

〔環境の工夫〕
○　狭い敷地の園舎のため、高さで視点が変わるようにしている。
○　色彩感豊かなものや、自然物など目に見えて変わっていくものを取り入れる。
○　砂場の砂を実践前に一工夫（波のように、山のようになど）・・・「仕掛け」
○　同じようだけれども違うもの、違うようだけど似ているものを用意
○　幼小で共有する総合遊具を運動場と園庭の間に設置
○　バランス感覚、挑戦力が身に付く屋上を利用した一輪車コーナー
○　コンセプト「大きくなったら食べられる」・・・食文化としての経験

〔教師の専門性〕・・・非指示的指導
○　言葉の端々、目線の先で伝えるプロフェッショナルな援助
○　人事交流では、園に８割が分かっている人の中に小学校教師が１人入ってもすぐに伝わる。
○　育ちが見える手法を探っていく。
○　協同については教え導くのではなく、子供自らできるように導く。

５．講演会

市内全域で幼保小連携を推進するために、幼保小の教員等に向けて、連携に詳しい講師を招聘し、講演会を行った。講演を通して、求められる学校園段階間の連携と接続、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、接続の目的・子供の発達・手立て、接続を見通した教育課程の開発、第一日野グループデザインについてなど、具体的な内容から、参加者の連携に向けての意欲を高めた。

さらに、今後の展望として、奈良市にとって必要なことなどについても御示唆いただいた。幼保小連携を推進するための具体的な組織作りや交流活動の在り方などの視点は、実践校園をはじめ、参加者の教員等に大きな刺激となった。

・講師：大妻女子大学　教授　酒井　朗氏
・演題：「幼児期の教育と小学校の接続について」
・場所：奈良市教育センター　中講座室
・日時：平成 26 年 12 月 12 日（金）
・参加人数：幼稚園教員　56 名、
保育士　10 名、
小学校教員　14 名、
推進委員・市長部局関係者及び指導主事等　10 名、
合計　90 名

○　講演には、経験の浅い教員等からベテラン教員等に管理職まで様々な年齢層が参加した。幼児期の教育と小学校教育の連携と接続について、なぜ接続が必要なのか、目的や手立てなど、連携の基盤となる話から始まった。

適応を図るための様々な工夫・情報交換・個々の子供の抱える課題の対応・組織体制作りの重要性・教員等間の相互理解、接続期のカリキュラムやスタートカリキュラムについて学ぶことで、どの参加者にとっても自校園の今後の幼保小連携について、改めて考える機会となった。

○　「段差が少ない方が良いと思っていたが、段差をうまく利用することも大切」という言葉が響いたという参加者の感想も聞かれた。その他、「続けられること・広げていくこと」を自身の校園の実践と向き合って取組内容と重ね合わせて、『今、自分達にできること』について考えるきっかけとなった。一人一人の教員等が課題を持ち、幼保小連携をつなげていく研修内容となった。

６．研究集会

他の学校・園への普及を図る機会として、市内の公私立小学校・幼稚園・保育園の教員等、市内大学・短期大学学識経験者を対象に、研究集会を行った。４組の実践校園による実践開発の事例発表を通して、本市の取組の独自性・先進性が明らかにされた。また「自主交流」を生む教師の援助や「非指示的指導」の具体的在り方、幼保小合同研修を進めるポイント、子供の学びの姿についても、他校園に広めるようにした。

・場所：帝塚山大学　18 号館　３階　18311 講座室
・日時：平成 27 年 2 月 6 日（金）
・参加人数：幼稚園教員　50 名、
保育士　23 名、
小学校教員　13 名、
推進委員・市長部局関係者
及び指導主事等　12 名、
合計　98 名

〔研修の流れ〕

１．研究概要について
奈良市子供未来部　こども園推進課　（１０分）

２．研究実践発表　（各２０分）
奈良市幼保小合同研修推進委員会研究実践校園
①　神功幼保小合同研修より
②　鳥見幼小合同研修より
③　都跡幼小合同研修より
④　富雄北小合同研修より

３．質疑応答・休憩

4．奈良市幼保小合同推進委員指導助言者よりコメント
5．奈良市幼保小合同推進委員長よりまとめ

〔実践報告からの学びと気付き〕

○　子供が先を見通したり、考えたことを実行したりする姿は、教員等が非指示的指導を実践で活かしていたからこそ現れた姿である。

○　教員等の相互理解を深めるということは、共に考え、共に課題に向き合い、共に話し合う中で生まれるのだということが分かった。

○　これまで自主交流と計画交流は分けて考えてきたが、本日の実践報告から、自主交流の中で計画したいことが生まれているので、計画交流は自主交流と思ってよい。子供が自主的に「やってみたい」ということを受け止めて計画しているので、計画と自主の境目をあまり付けないようにすることがこれからの考え方ではないか。

○　各校園の物理的な環境の違いはあるが、現状を活かすことをきっかけに、良いものに変えていくということが必要。

○　教員等間のつながりという報告がたくさん出ていたが、教員等間がつながっていくことと並行して子供もつながっていくということが分かった。つながりたいという意欲や欲求がないとつながれない。そのためにも体験の積み重ねが必要。

○　報告内で、人と人をつなげる様々な「アイテム」が出てきた。例えば、お面、掲示板、招待状のポスターなど、つながりたいという欲求を「もの」が助けてくれる。そういう場面がたくさん出て来ていた。「もの」は人と人をつなげるとても大事なアイテムとなり、それでこそものの価値が出てくる。

○　子供が交流会で話し合ったり、誰かがリーダーになったりしている姿が挙げられているように、リーダーの継続的な情熱が大切であり、リーダーにあこがれを抱くと周りもやってみたくなる。どんなに時間があってもその気がなければできない、短時間でポイントを絞ってという報告があったように、その気になれば良い考えが浮かぶ。教員等の非指示的指導があり、続ける広げるつなげる力が、努力が、子供達の力を育んでいく。

○　「続ける」は積み重なった上に試行錯誤しながら伸びていく立体の感覚で登っていくというイメージで捉え、「重ねる」ということになる。重ねていく中で教員等は信頼関係を強い絆で築き上げていく。

○　2年目の実践校園の報告から、子供が相手意識を持って遊びの条件を変えていく姿は、昨年度の自分たちが経験したことと重なって成長していく姿が見えている。自分の経験を基に相手のことを考えていける子供達は大きく成長していること見える。

○　子供の意見を聞いて一緒に遊びたいという思いをしっかり受け止め、年間計画を立てて取り組んでいるという報告内容もよかった。計画には様々な段階がある。1日の中でどのような活動をするのか柔軟に取り組んでいる。行事はあるが、その計画をどのようにするのか、子供はどう入って、どこに行きたいと思うのか、自主的に芽生えたものをどう実現するのかという実践内容は、計画ではあるが、それは自主である。

○　子供の中で自主的に浮かんできたこと、子供だけでは難しいこともある。そこで実現に向けて教員等がどう対応するのかということも大事。

○　子供から出てきたことをつなげていくことが自主交流である。子供の言葉を拾って子供が「やってみたい」「つながりたい」ということを後押ししてくれる教員の存在は大きい。
つながりたいと思う前に計画が必要。この計画と自主の関連が大切である。

○「広げる」は、幼保小がつながるために「結ぶ」ということをした。これから、新たに連携をしていこうとするところは結んでいかなければならない。
　結ぶ時に動のように結ぶのかということが、今日の実践報告で挙げられていた。
小学校の取組に幼稚園がどうかかわれるのか、どういうことができるのかというスタンスを考えた実践だった。

○　招待状を持って行き、出会いの「結び」を作った実践報告。交流というキーワードを考え、理解を広げていきたい。交流は必ずしも子供達が出会うということが大前提ではなく、職員間の交流などもある。どこで交流を繋いでいくのか、どういう経験をしておくと子供の中の経験や学びがつながっていくのかということを捉えた。

7．新たな連携の模索
～奈良市のその他の校園への幼保小連携の実践の拡大～
1）　幼小の自然交流【奈良市立済美幼稚園】

奈良市中部に位置し、隣接する小学校との間にフェンスがなく校庭と園庭がつながり、その境界にあるビオトープで、園児も小学生も自由 に遊んだり学習したりしている。この環境を生かして交流活動の取組（資料 16 参照）を工夫し、幼児と児童が自然なかかわりの中から計画交流を進めている。

小学校と幼稚園が隣接していることで、互いの生活する様子や活動の様子がよく分かる。
中休み 10 時過ぎ　昼休み 13 時 30 分頃には、小学校教員も運動場や園庭でかかわっていることから、園生活との重なり合う時間に日常的に自然なかかわりがある。

課題でもあるが、教員同士、幼稚園生活・教育課程、小学校生活・教育課程を理解し合いながら、経験や活動の中でどのような学びがあって、育ちにつながっているのか意識し、振り返りや反省評価をしている。

２）幼保小交流と施設共用の工夫【奈良市立伏見南幼稚園】

奈良市西北部に位置し、小学校とは道を隔てて隣接した環境にあり、同じ校区の保育園とともに幼保小交流を進めている。また、小学校長は幼稚園長を兼務していることから、教育内容や保育活動についても小学校との滑らかな接続を図るために工夫し、取り組んでいる。(資料 17 参照)

〔保幼小交流年間計画〕

	伏見保育園	伏見南小学校
4 月	年間交流計画打ち合わせ	教員顔合わせ
5 月	第 1 回交流前の打ち合わせ	
6 月	第 1 回交流会、反省及び打ち合わせ 第 2 回交流会、反省	連絡会
7 月		プールに入らせてもらう
8 月	保幼小合同教員研修	交流打ち合わせ
9 月		作品展見学・運動会予行練習見学 連絡会
10 月	第 3 回交流会打ち合わせ、交流、反省 保幼小連絡会・わくわく伏見会	
11 月	第 4 回交流会　小学校運動場でドングリ拾い	ふれあいの日・運動場で駆け足 連絡会・就学前健康診断
12 月		
1 月	第 5 回交流会 保幼小連絡会	運動場で凧上げ 教頭先生と遊ぼう・ひまわり学級体験
2 月	幼稚園の作品展に招待 今年度の反省会 1 日体験入学	ランチルームで弁当を食べる ひまわり学級体験
3 月		幼小連絡会

活動内容　○計画　☆反省評価

〔保育園との連携〕

○　前年度まで年 3 回だった交流を、今年度は 6 回に増やす。

(遊びの時間を多く確保することで、子供同士のかかわりを深めたいという願いが一致したため。)

○　交流会の事前打合せでは、環境面の打合せを重点的に行なう。

☆　交流回数を増やしたことで、顔見知りになり、積極的にかかわり合う姿が見られた。また、小学校入学で出会うことを楽しみにしていた。

〔小学校との連携〕

○　今年度は、プールや運動場、ランチルーム、体育館など、施設の共用を計画し、小学校という場を知ったり、親しみを持ったりできるように取り組む。

○　連絡会は随時行う。特別支援コーディネーターの教員に現状を伝えたり、指導のアドバイスをいただいたりして、就学に向けて滑らかな接続ができるようにする。

☆　保幼合同のドングリ拾いでは、運動場を全面貸していただけたことで、全園児約 120 名で一斉にかけっこをすることができ、子供たちは、広さを体感したり、喜びや満足感を感じたりすることができた。

☆　校園長兼務の為、「園長先生に、収穫したイチゴを届けたい。手紙も書きたい。」など、自主交流が起こりやすい。提案後すぐに、「校長室に来てください。」と返事をもらい、子供たちの思いを実現することができた。

３）私立幼保園と公立幼保小の連携【学校法人ひかり学園ひかり幼稚園】

奈良市西北部に位置した私立幼稚園で、小学校とは離れた環境にありながらも、校区内の市立小学校・幼稚園・保育園との交流を進め、幼保小合同交流会を年間計画に位置付け、継続的に実施している。

〔六条小校区保幼小連携について〕

平成２１年度から２年間実践校園として委託事業に取り組んで以来、現在に至るまで継続して活発に幼保小連携を行っている。連携が始まったころは市立幼保小と私立幼（自園）で進めており、その後校区にできた私立保育園が加わって組織が拡大し、５校園での研修や取組（資料 18 参照）を行っている。

〔保幼小連携推進委員会〕

対象：市立小学校、市立幼稚園、市立保育園、私立幼稚園、私立保育園

時期：第１回　日時：　平成２６年５月１３日（火）

第２回　日時：　平成２６年９月１日（月）

第３回　日時：　平成２７年１月 13 日（火）

第４回　日時：　平成２７年３月９日（月）

研修：平成２６年８月１日（火）

内容…５校園の教員等が共同で製作をし、出来上がった作品で遊び方の意見交換をした。

Ⅴ　振り返りと評価

１．方法

振り返りにはアンケートを用いた。

調査対象は、本研究の合同研修の参加者、具体的には、研究実践校園の教員等のうち、研究実践に参加した者（実践者）、講演会参加者、研究集会参加者であった。所属別にその人数を表１に示す。

表１．調査対象の内訳

	実践者	講演会参加者	研究集会参加者
幼稚園	12	35	44
保育園	8	10	17
認定こども園	4	16	（幼稚園に含める）
小学校	8	11	12
合計	32	72	74（無回答 1）

４種類のアンケートを作成した。１つは実践の最初の状態を調べるもの、２つ目は、講演会の参加者に感想を尋ねるもの、３つ目は、研究集会の参加者に感想を尋ねるも、最後は、全ての実践の終了後に実践者に成果を尋ねるものであった。

実践の最初の状態を調べるアンケートは、４つの設問で構成した。問１では、図１に示すように、自主交流に関する定義を示した後、それを生むポイントとして、どのように考えるかを４段階で評定するものとした。問２では、図２に示すように、非指示的指導に関する定義を示した後、理解や実践の指導の程度を４段階で評定するものとした。なお、問３は、打合せや互いに教育について気付いたことを自由に記述する設問とした。問４には、回答者の属性を尋ねる設問を設けた。詳細は資料 12 を参照されたい。

講演会の参加者に感想を尋ねるアンケートは、12 の設問で構成した。問１から問４は回答者の属性を尋ねる設問、問５は講演内容に対する感想を自由記述で求める設問、問６から問 12 は勤務校園での幼保小連携について尋ねる設問であった。詳細は資料 13 を参照のこと。

研究集会の参加者に感想を尋ねるアンケートは、４つの設問で構成した。設問Ⅰ）回答者の属性を尋ねる設問、設問Ⅱは所属校園での幼保小合同研修について尋ねる設問、設問Ⅲは研究集会に参加して、自主交流と非指示的指導に関する理解と実践について図３の形で尋ねる設問、最後の設問Ⅳは、意見や感想を自由記述で求める設問であった（資料 14 参照）。

全ての実践の終了後に実践者に成果を尋ねるアンケートは 13 の設問で構成した。問１から問３は回答者の属性を調べる設問、問４から問９は勤務校園での幼保小連携（合同研修・交流会）について自由記述を求める設問、問 10 と問 11 は自主交流について図１と同じ形で評定を求める設問（問 10 は現在、問 11 は年度当初の状態を尋ねた）、問 12 と問 13 は、非指示的指導について図２と同じ形で評定を求める設問（（問 12 は現在、問 13 は年度当初の状態をたずねた）であった（資料 15 参照）。

「自主交流」とは、小学校の教科における取組だけでなく、休み時間など、小学校生活のあらゆる場面で幼児・児童が自発的・自主的に取り組むフレキシブルな（柔軟な・順応性がある）交流活動や合同活動のことである。

問１．自主交流を生むポイントとして、あなたは、どのように考えますか。次のＡからＤの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ	保育者と教師が信頼を築いていくことが必要だと思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	保育者と教師は、信頼を築いていくことができると思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	私は、保育者と教師の信頼を築いていくことができる。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
②－ａ	幼児と児童の交流を計画的に展開することが必要だと思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	幼児と児童の交流は、計画的に展開することができると思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	私は、幼児と児童の交流を計画的に展開することができる。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
③－ａ	「自主交流」を生む「しかけ」をつくることが必要だと思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	私は、「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
④－ａ	「自主交流」は、積み重ねた交流の上につくり出すことが必要だと思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	私は、「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる。	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

図１．実践者に対する自主交流に関する調査

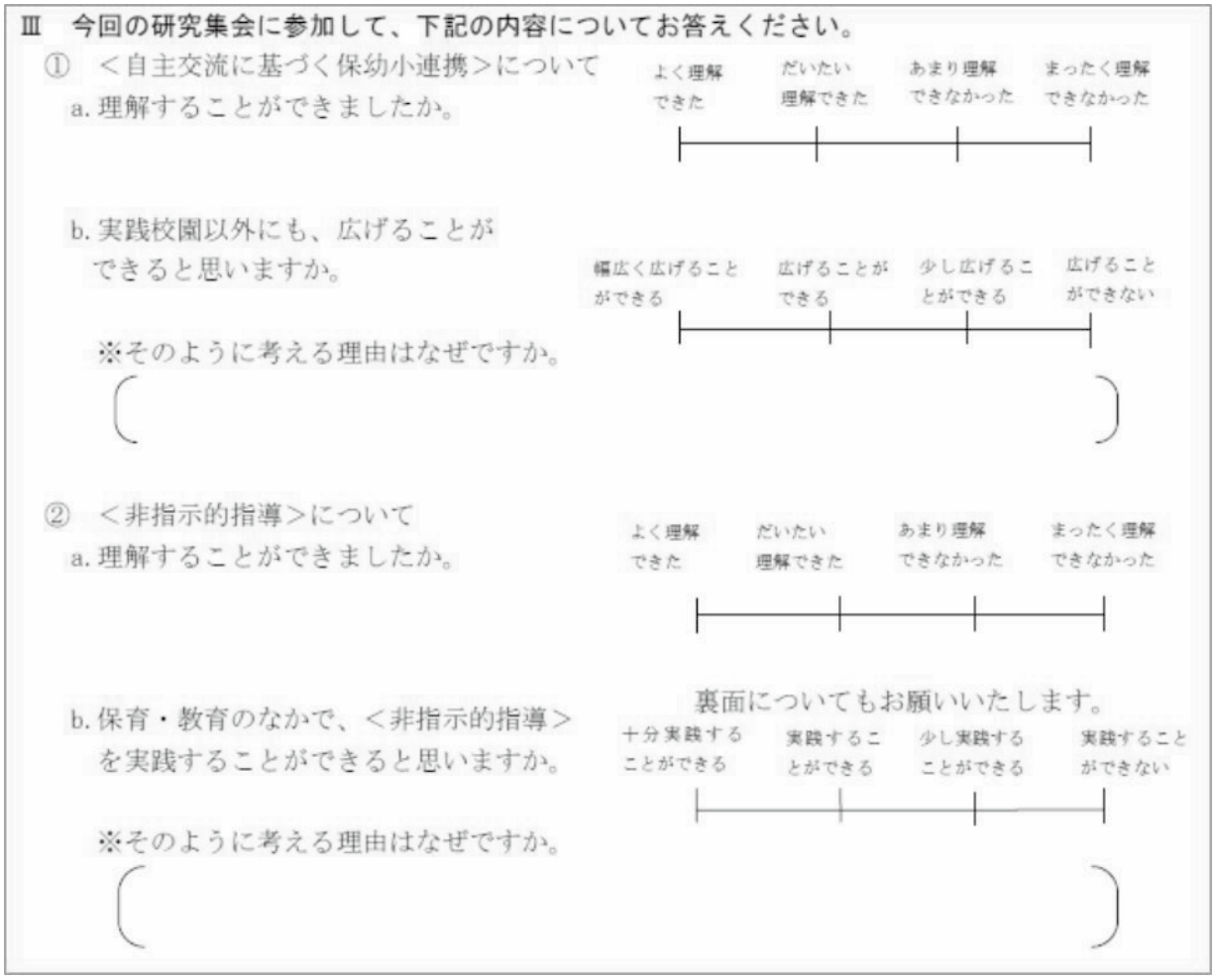
「非指示的指導」とは、次の２つのようなものである。
（１）教師・保育者がすぐに答えたり、導いたりするのではなく、見通しをもちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導。
（２）教師・保育者から子どもに答えとなる方法を与えるのではなく、子どもを見守ることで、その子どもが何をしたいのかを知り、子ども自らその方法を見出すための声かけをしたり、環境を整えたりすること。

問２．「非指示的指導」について、あなたはどのように考えますか。次のＡからＤの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ	（１）について、十分に理解していると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	（１）について、自分では十分に実践していると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	（１）について、他の教師や保育者を指導できると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
②－ａ	（２）について、十分に理解していると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ	（２）について、自分では十分に実践していると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ	（２）について、他の教師や保育者を指導できると思う	Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

図２．実践者に対する非指示的指導に関する調査


Ⅲ　今回の研究集会に参加して、下記の内容についてお答えください。

①　＜自主交流に基づく保幼小連携＞について

a. 理解することができましたか。

よく理解できた　だいたい理解できた　あまり理解できなかった　まったく理解できなかった

b. 実践校園以外にも、広げることができると思いますか。

幅広く広げることができる　広げることができる　少し広げることができる　広げることができない

※そのように考える理由はなぜですか。

②　＜非指示的指導＞について

a. 理解することができましたか。

よく理解できた　だいたい理解できた　あまり理解できなかった　まったく理解できなかった

b. 保育・教育のなかで、＜非指示的指導＞を実践することができると思いますか。

裏面についてもお願いいたします。

十分実践することができる　実践することができる　少し実践することができる　実践することができない

※そのように考える理由はなぜですか。

図３．研究集会の参加者に対する自主交流と非指示的指導に関する調査

実践の最初の状態を調べるアンケートは、７月中旬（実践校園によって時期の違いあり）に、市のメールシステムを使ってアンケートのファイルを当該実践校園の校園長に配信し、担当者に配布してもらうよう依頼した。回収は紙媒体で校園ごとに一括して市役所内のこども園推進課に提出してもらった。

講演会のアンケートは、講演会の当日（12 月 12 日）、開始時に参加者に会場で配布し、講演会終了後に回収した。研究集会のアンケートも同様に、研究集会の当日（２月６日）、開始時に参加者に会場で配布し、研究集会終了後に回収した。

全ての実践終了後のアンケートは、12 月 18 日に市のメールシステムを使ってアンケートのファイルを当該実践校園の校園長に配信し、担当者に配布してもらうよう依頼した。その際、記入は全ての実践終了後にしてもらうように依頼した。回収は紙媒体で校園ごとに一括して市役所内のこども園推進課に提出してもらった。

２．結果

１）実践者に対する調査

実践の最初の状態を調べるアンケートの回答者数は、幼稚園が 12 名、保育園が８名、認定こども園が４名、小学校が８名の合計 32 名であった。実践終了後のアンケートに対する回答者数は、同じ順に９名、４名、２名、10 名で合計は 25 名であった。

自主交流については、図１に示したように、実践者に「Ａ：確かにそう思う」から「Ｄ：全くそう思わない」の４段階で評定を求めた。そこで、Ａを４、Ｂを３、Ｃを２、Ｄを１として、平均値を求めた。実践の最初の状態と、実践終了後の状態の平均値を示したものが表１である。１から４の４段階なので、ランダムに付けた場合の平均値は 2.5 になる。そこでこの値よりも有意に大きな値はフォントを大きくし、ゴシック体とした。有意に小さな値はフォントを小さくし、イタリック体とした。

継時的分析の開始時の列が、実践の最初の状態である。全ての評定項目に対して、評定平均値は 2.5 以上であり、実践者が評定項目のように思っていたことが明らかになった。しかしながら、全ての実践終了後の平均値を見ると、「私は「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる」と「私は「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる」の２項目では、2.5 と変わらない値にまで低下した。他のすべての項目も値は低くなっていた。検定したところ、「「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う」と「「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う」の２項目では、平均値が有意に低下した。これらの結果は、実践の開始時と終了後では、評定の基準が異なることを示唆するものである（清水ら, 2014）。

表１．自主交流に対する評定平均値

領域	評定項目	継時的分析			回想的分析		
		開始時	実践後	検定結果	実践後	年度当初	検定結果
信頼構築	保育者と教師が信頼を築いていくことが必要だと思う。	3.9	3.8		3.8	3.5	*
	保育者と教師は、信頼を築いていくことができると思う。	3.5	3.3		3.3	2.9	**
	私は、保育者と教師の信頼を築いていくことができる。	3.2	3.1		3.1	2.7	**
計画的交流	幼児と児童の交流を計画的に展開することが必要だと思う。	3.7	3.6		3.6	3.3	
	幼児と児童の交流は、計画的に展開することができると思う。	3.4	3.2		3.2	3.0	*
	私は、幼児と児童の交流を計画的に展開することができる。	2.9	2.8		2.8	2.5	*
しかけづくり	「自主交流」を生む「しかけ」をつくることが必要だと思う。	3.8	3.7		3.7	3.3	**
	「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う。	3.6	3.2	**	3.2	2.8	**
	私は、「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる。	2.8	2.7		2.7	2.4	**
交流の積み重ね	「自主交流」は、積み重ねた交流の上につくり出すことが必要だと思う。	3.5	3.5		3.5	3.2	
	「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う。	3.6	3.2	*	3.3	2.8	**
	私は、「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる。	2.8	2.8		2.8	2.5	

回想的分析は、実践終了後に、「現在、どのように考えているか」（実践後）、「本年４月頃、どのように考えていたか」（年度当初）として評定してもらった値の平均値である（継時的分析の実践後と回答者は同じであるが、無記入で年度当初との比較ができない者は除いている）。年度当初と比べて、実践後には平均値が上がっていることがわかる。理解が深まり、実践も可能になってきたと言えよう。

非指示的指導についても、同様の分析を行った。すなわち、「Ａ：確かにそう思う」から「Ｄ：全くそう思わない」の４段階のＡを４、Ｂを３、Ｃを２、Ｄを１として、平均値を求めた。その結果が表２である。

表２．非指示的指導に対する平均評定値

非指示的指導	評定項目	継時的分析			回想的分析		
		開始時	実践後	検定結果	実践後	年度当初	検定結果
教師・保育者がすぐに答えたり、導いたりするのではなく、見通しをもちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導。	十分に理解していると思う	3.1	3.0		3.0	2.6	*
	自分では十分に実践していると思う	2.8	2.6		2.6	2.3	
	他の教師や保育者を指導できると思う	2.2	***2.0***		***2.0***	***1.9***	
教師・保育者から子どもに答えとなる方法を与えるのではなく、子どもを見守ることで、その子どもが何をしたいのかを知り、子ども自らその方法を見出すための声かけをしたり、環境を整えたりすること。	十分に理解していると思う	3.1	3.1		3.1	2.6	**
	自分では十分に実践していると思う	2.9	2.7		2.7	2.3	**
	他の教師や保育者を指導できると思う	***2.1***	***2.0***		***2.0***	***1.9***	

継時的分析の開始時を見ると、理解と実践はともに 2.5 よりも高いが、指導に至っては 2.5 よりも低くなっている。実践後は、実践についても 2.5 と変わらない値となった。回想的分析でも、理解は十分であるが、実践や指導は困難であることが明らかになった。

２）講演会参加者に対する調査

「あなたの幼稚園・保育園と小学校との間では、連携を行っていますか。該当するものに○をつけてください」として、「ア．積極的に連携している」「イ．連携しているが十分ではない」「ウ．連携できていない」の３つの選択肢を提示した。その結果、「ア．積極的に連携している」は 30、「イ．連携しているが十分ではない」が 37、「ウ．連携できていない」が２、無回答が３であった。このうち、以下ではアとイを比較した。

「幼稚園･保育園と小学校との連携を行っている先生方にお尋ねします。現在、どのような連携を行っていますか。該当するものに○を付けてください。(複数選択可)」として 15 の選択肢を提示した。○が付いた割合を示したものが表３である。重みを書けない平均を求めて、その値の高い順に並べた。また、アの割合とイの割合で、有意な差が見られた数値はゴシック体で示した。

「就学時の連絡会」「交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ」「指導要録・保育要録の送付」「運動会や○○祭りなどの行事を通した交流活動」という４項目の平均値は 75%以上と高く、これらの連携は行われていることが明らかになった。反対に、「就学時における学童保育の教員との話し合い」「保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し」「保育園･幼稚園での就学に向けたアプローチカリキュラムの作成」「小学校入学時（1 学期）のスタートカリキュラムの作成」の４項目は平均値が 10%以下と低く、今後、奈良市として取り組んでいくべき連携であることが示された。

「積極的に連携している」と「連携しているが十分ではない」のグループの間に有意差が見られたものには、「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」と「保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会」の２項目があった。前者が２つのグループの差であることは、交流活動の量だから当然である。後者が興味深い。このような研修会を開くことは管理職の役割であり、今後、市を挙げてこの体制作りが求められていると言える。

表３．行っている連携の割合（%）

		積極的に連携している	連携しているが十分ではない	平均
サ	就学時の連絡会	90.0	86.5	88.2
オ	交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ	86.7	73.0	79.8
シ	指導要録・保育要録の送付	73.3	81.1	77.2
イ	運動会や〇〇祭りなどの行事を通した交流活動	83.3	67.6	75.5
ア	日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動	６３.３	３５.１	49.2
コ	保育士・幼稚園教員による小学校の授業参観	50.0	43.2	46.6
ウ	小学校での授業体験	50.0	27.0	38.5
エ	小学校での給食体験	46.7	29.7	38.2
ケ	小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観	46.7	29.7	38.2
ス	保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会	５０.０	１０.８	30.4
セ	就学時における学童保育の教員との話し合い	10.0	5.4	7.7
カ	保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し	6.7	0.0	3.3
ク	保育園・幼稚園での就学に向けたアプローチカリキュラムの作成	3.3	0.0	1.7
キ	小学校入学時（1学期）のスタートカリキュラムの作成	0.0	2.7	1.4
ソ	その他	13.3	5.4	9.4

次に、「幼稚園・保育園と小学校との連携を行っている先生方にお尋ねします。今後さらに連携するとしたら、どのような連携を行いたいですか。また、連携を行っていない先生方は、今後実施するとしたら、どのような連携を行いたいですか。〇をつけてください。（複数選択可）」として、表３と同じ項目を提示した。〇が付いた割合を、重みを書けない平均値の高い順に並べたものが表４である。有意差が見られた数値はゴシック体で示した。

表４．今後、行いたい連携の割合（%）

		積極的に連携している	連携しているが十分ではない	平均
ケ	小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観	３３.３	６４.９	49.1
ア	日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動	３０.０	５９.５	44.7
コ	保育士・幼稚園教員による小学校の授業参観	33.3	45.9	39.6
ク	保育園・幼稚園での就学に向けたアプローチカリキュラムの作成	40.0	24.3	32.2
キ	小学校入学時（1学期）のスタートカリキュラムの作成	36.7	27.0	31.8
ウ	小学校での授業体験	１３.３	４５.９	29.6
エ	小学校での給食体験	16.7	37.8	27.3
オ	交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ	６.７	３７.８	22.3
ス	保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会	16.7	27.0	21.8
セ	就学時における学童保育の教員との話し合い	20.0	18.9	19.5
カ	保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し	13.3	10.8	12.1
サ	就学時の連絡会	10.0	10.8	10.4
イ	運動会や〇〇祭りなどの行事を通した交流活動	6.7	13.5	10.1
シ	指導要録・保育要録の送付	6.7	5.4	6.0
ソ	その他	0.0	0.0	0.0

「小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観」と「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」の２項目については、平均で 40%以上と、多くの参加者が希望していた。特に連携が不十分と感じている参加者では６割程度の者が希望していた。反対に、「就学時における学童保育の教員との話し合い」「保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し」「就学時の連絡会」「運動会や○○祭りなどの行事を通した交流活動」「指導要録・保育要録の送付」の５項目については、20%以下の者しか希望していなかった。

グループの間に有意差が見られたのは、「小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観」「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」「小学校での授業体験」「交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ」の４項目であった。「十分ではない」と感じている者の方が希望する者の割合が高かった。「十分ではない」と感じている者が、より交流し、「積極的に交流している」と感じるようにするためには、これら４項目の優先順位を高めることが必要である。

「幼稚園･保育園と小学校との連携や接続において，どのようなことが課題となっていると感じますか。○をつけてください。（複数選択可）」として、表５に示す 13 項目を提示した。表３と表４と同様に、○が付いた割合を、重みを書けない平均値の高い順に並べた。有意差が見られた数値はゴシック体で示した。

表５．連携や接続の課題として選ばれた割合（%）

		積極的に連携している	連携しているが十分ではない	平均
ク	日程調整が難しいこと	60.0	62.2	61.1
エ	連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること	３０.０	６７.６	48.8
コ	交流活動時間の確保	２６.７	６２.２	44.4
カ	毎年継続していくこと	26.7	45.9	36.3
ウ	校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること	１３.３	５４.１	33.7
イ	保育･教育課程に位置づけていくこと(アプローチ/スタートカリキュラムの作成等)	26.7	27.0	26.8
オ	指導の難しい，あるいは配慮の必要な園児や児童が増加していること	26.7	10.8	18.7
ア	連携の具体的な内容や手順を決めること	６.７	２９.７	18.2
シ	担当者が異動した後の継続	２６.７	８.１	17.4
キ	計画や準備に手間がかかること	23.3	8.1	15.7
サ	移動時間･移動手段の確保	13.3	5.4	9.4
ケ	交流活動中･移動時の園児･児童の安全確保	3.3	2.7	3.0
ス	その他	0.0	0.0	0.0

「日程調整が難しいこと」は、60%を超える参加者が課題として選んだ。連携・接続においてはこれが最も大きな課題である。一方、「移動時間・移動手段の確保」と「交流活動中・移動時の園児・児童の安全確保」は、10%以下であった。この２つの課題は、少なくとも奈良市では、それほど重視されていない。

グループの間に有意差が見られたのは、「連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「交流活動時間の確保」「校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「連携の具体的な内容や手順を決めること」「担当者が異動した後の継続」の５項目であった。このうち、「担当者が異動した後の継続」は、積極的に連携している校園の参加者の方が課題としている割合が高く、他の４項目は連携はしているが十分ではない校園の参加者の方が課題としている割合が高かった。

連携はしているが十分ではない校園のグループでは、「日程調整が難しいこと」「連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「交流活動時間の確保」「校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」の４項目を、50%以上の者が課題として○を付けた。このことは、連携はしているが十分ではない校園の者にとっては、これらの４項目が大きな課題であることを示すものである。しかしながら、このうち３項目、すなわち「連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「交流活動時間の確保」「校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」の３項目では、積極的に連携している校園の者は、それほど課題として認識してはいない。そのため、積極的に連携している校園の者と、連携はしているが十分ではない校園の者が、連携や接続に関して情報を共有する機会を設けることで、これらの３項目は解決の糸口が見付かると期待できる。

３）研究集会参加者に対する調査

図３に示した４段階の評定について、各選択肢が選ばれた割合を示したものが表６である。理解に関しては、自主交流、非指示的指導のどちらに関しても、「だいたい理解できた」が最も多かった。自主交流の拡張は「広げることができる」、非指示的指導は「実践することができる」が多かった。

表６．自主交流と非指示的指導に関する各選択肢が選ばれた割合（%）

自主交流の理解	割合	自主交流の拡張	割合
よく理解できた	35.1	幅広く広げることができる	6.8
だいたい理解できた	62.2	広げることができる	58.1
あまり理解できなかった	1.4	少し広げることができる	29.7
まったく理解できなかった	0.0	広げることができない	1.4
欠測値（無回答）	1.4	欠測値（無回答）	4.1
非指示的指導の理解	**割合**	**非指示的指導の実践**	**割合**
よく理解できた	31.1	十分実践することができる	20.3
だいたい理解できた	59.5	実践することができる	55.4
あまり理解できなかった	8.1	少し実践することができる	9.5
まったく理解できなかった	0.0	実践することができない	0.0
欠測値（無回答）	1.4	欠測値（無回答）	14.9

次に、「よく理解できた」「幅広く広げることができる」「十分実践することができる」を４、「だいたい理解できた」「広げることができる」「実践することができる」を３、「あまり理解できなかった」「少

し広げることができる」「少し実践することができる」を２、「まったく理解できなかった」「広げることができない」「実践することができない」を１として、回答者の属性ごとに平均値を求めて比較した。

まず所属による差を比較した。幼稚園（認定を含む）は44名、保育園（認定を含む）は17名、小学校は12名であった（無回答１名）。非指示的指導の理解に関して有意差が見られた。図４に示すように、保育所（認定を含む）が幼稚園（認定を含む）よりも平均値が低かった。

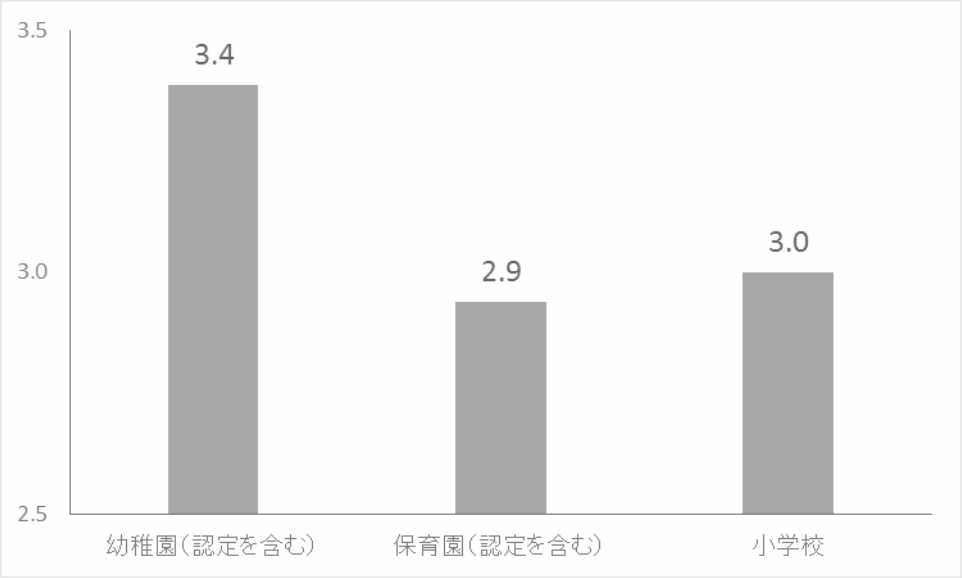


図４．研究集会終了後の非指示的指導の理解に関する平均評定値

現在の職について、校園長は10名、副園長・主任・教頭は８名、保育士・教諭・講師は55名であった。校園長と副園長・主任・教頭は人数が少ないので、管理職として統合し、管理職と保育士・教諭・講師を比較した（図５）。いずれも管理職が高かった。

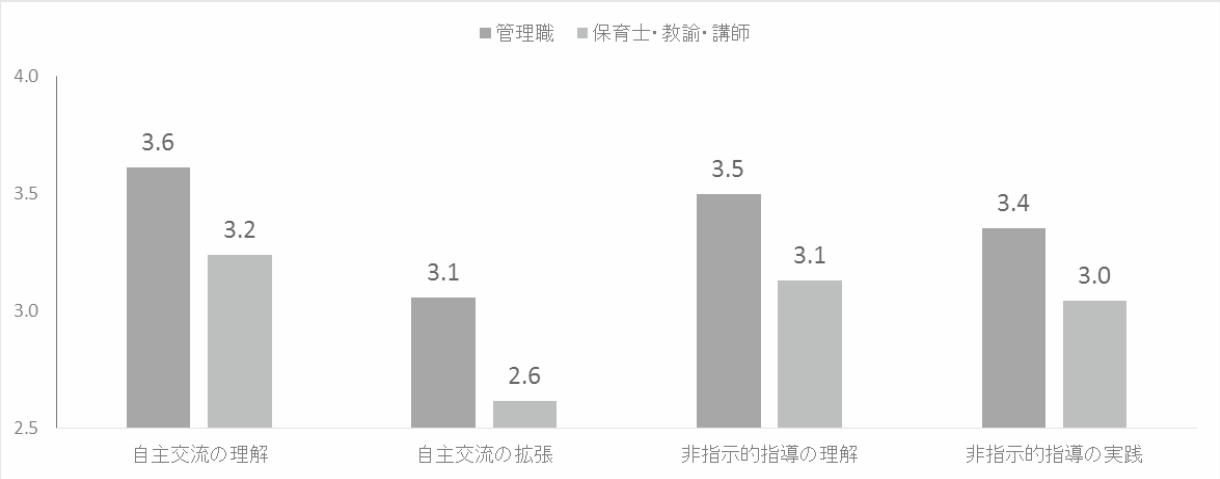


図５．管理職と保育士・教諭・講師の平均評定値

続いて、経験年数による違いを調べた。５年以下は20名、６～10年は14名、11～15年は８名、16～20年は12名、21年以上は19名であった（無回答１名）。15年以下と16年以上に分けた。図６に示すように、自主交流の拡張に関して、16年以上の経験年数を持つ者の方が15年以下の者よりも平均評定値が高かった。

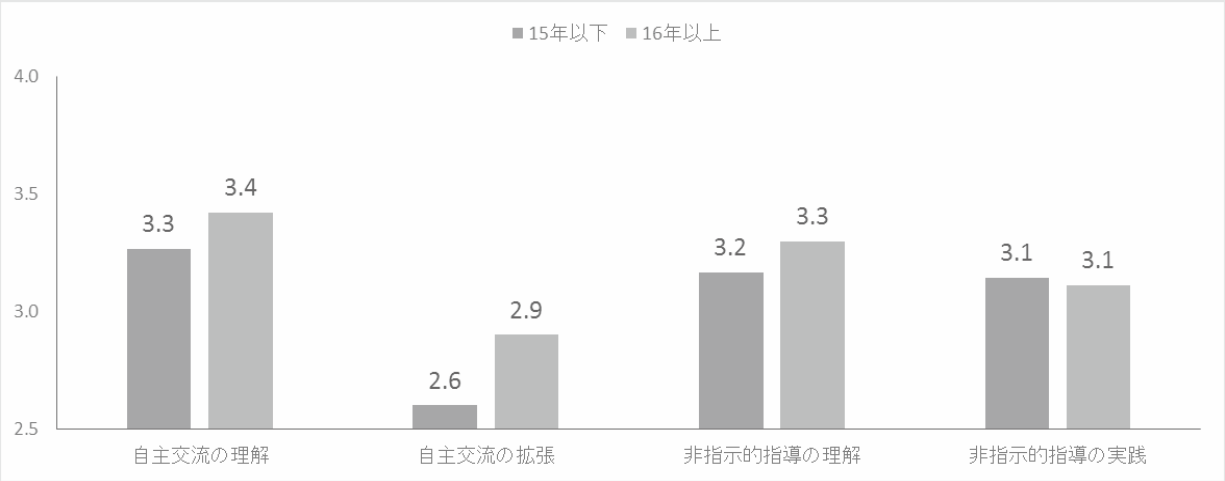


図６．経験年数による平均評定値の違い

最後に、幼保小合同研修（交流会を含む）を１年に行っている回数による違いを調べた。年１回は３名、年２～３回は19名、年４～６回は19名、年７回以上は27名、その他２名であった（無回答４名）。年６回以下と年７回以上を比較した。図７に示すように、自主交流の理解と非指示的指導の理解において顕著な差が見られた。

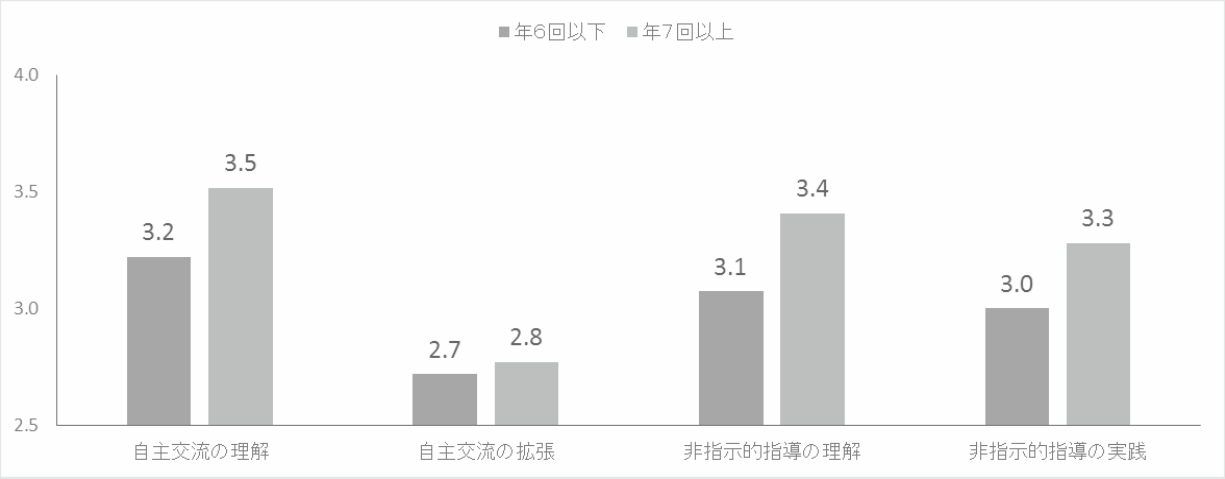


図７．幼保小合同研修の回数による平均評定値の違い

３．まとめ

振り返りにはアンケートを用いた。

（1）実践者に対する調査

実践者に対する調査は、自主交流と非指示的指導について項目を設定し、実践後と年度当初にどのように考えるかを４段階で評定を求めた。自主交流については、「信頼構築」「計画的交流」「しかけづくり」「交流の積み重ね」の４領域に、それぞれ３項目を設定した。実践後は、全ての項目で理解が深まり、実践も可能になった。非指示的指導については、２項目を設定し、「理解」「実践」「指導」の程度を４段階で評定を求めた。その結果、どちらの項目でも、実践後には、理解は十分であるが、実践や指導は困難であることが明らかになった。

（2）講演会参加者に対する調査

講演会参加者に対する調査では、「あなたの幼稚園・保育園と小学校との間では、連携を行っていますか」と尋ねて、「積極的に連携している」と回答した者と「連携しているが十分ではない」と回答した者を比較した。15 の連携を挙げて、行っている連携に丸をつけてもらったところ、「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」と「保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会」の２つの連携については、連携の程度に顕著な差が見られた。保幼小合同研修会を管理職が開くこと、市を挙げてのその体制作りが必要であることが示唆された。

連携を行っている場合は「今後さらに連携するとしたら、どのような連携を行いたいか」、また、連携を行っていない場合は「今後実施するとしたら、どのような連携を行いたいか」に〇を付けてもらった。その結果、４つの連携「小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観」「日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動」「小学校での授業体験」「交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ」で、連携の程度に顕著な差が見られた。「十分ではない」と感じている者が、より交流し、「積極的に交流している」と感じるようにするためには、これら４項目の優先順位を高めることが必要である。

「幼稚園･保育園と小学校との連携や接続において，どのようなことが課題となっていると感じますか」を尋ねて、丸を付けてもらった。その結果、「日程調整が難しいこと」は、60%を超える参加者が課題として選んだ。「連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「交流活動時間の確保」「校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること」「連携の具体的な内容や手順を決めること」「担当者が異動した後の継続」の５項目では連携の程度による差が顕著に見られた。「担当者が異動した後の継続」は「積極的に連携」の者が、他は「十分ではない」の者が多く選んだ。「積極的に連携」の者と「十分ではない」の者の間に、連携や接続に関して情報を共有する機会を設ける必要性が示唆された。

（3）研究集会参加者に対する調査

自主交流について、「よく理解できた」「だいたい理解できた」「あまり理解できなかった」「まったく理解できなかった」から選んでもらったところ、「だいたい理解できた」が 62.2%、「よく理解できた」が 35.1%であった。非指示的指導の理解度も同様に尋ねたところ、「だいたい理解できた」が 59.5%、「よく理解できた」が 31.1%であった。

自主交流について「幅広く広げることができる」「広げることができる」「少し広げることができる」「広げることができない」から選んでもらったところ、「広げることができる」が 58.1%、「少し広げることができる」が 29.7%であった。非指示的指導について「十分実践することができる」「実践することができる」「少し実践することができる」「実践することができない」から選んでもらったところ、「実践することができる」が 55.4%、「十分実践することができる」が 20.3%であった。

理解、拡張、実践共に高い値であった。

これらの評定には、所属（幼稚園、保育園、小学校）、職（管理職、保育士・教諭・講師）、経験年数（15 年以下、16 年以上）、幼保小合同研修の回数（年６回以下、年７回以上）による違いが見られた。

Ⅵ　総合考察：成果と今後の課題

１．主な結果

本研究で得られた主な結果は、次の３つであった。

（１）「続ける」に関して、自主交流を子供に求めるには、計画交流の積み重ねと仕掛けが必要であった。また、各校園が独自の業務を充実させながら、効率よく、かつ効果の高い連携を行うためには、次の４つの工夫が有効であった。

①無理なく普段の取組の中で続けていく。

②打合せまでに土台となるベースの案を用意する。

③年度の初めに見通しを持って計画し、細かい点は修正するという形にする。

④それぞれの指導計画に共通するものを交流の内容として取り上げる。

（２）「広げる」に関して、立地環境、幼児数と児童数の関係等で交流が途絶えていた校園については、教員等間のつながりを持つことがきっかけ作りに有効であった。断片的な交流を子供の学びをつなげたり、職員等の共通理解を深めたりするには、以下の２つの工夫が有効であった。

①小学校の単元を意識した取組みに、幼稚園がどのような内容を組み入れて行くのかを考え、互いのねらいが達成できるようにする。

②打合せの時間など研修の時間の取り方等は、前年度の研究の成果を参考に更に工夫を重ねる。

（３）「つなげる」に関しては、校園内での担当者間のつなぎ、２年目の校園と１年目の校園の間のつなぎ、指定校園とそれ以外の校園の間のつなぎなど、様々なレベルがあることが明らかになった。それぞれのつなぎを効果的に行うためには、次の３つの工夫が有効であった。

①　記録の様式を統一し、いつ頃、何を、どのようにすればよいかを可視化する。

②　研修は、報告を聞くことで終わらせず、意見を述べ合う。

③　人事異動や合同研修、公開報告会など、組織の力を利用する。

２．本研究の意義

これらの結果には、次の３つの意義がある。

（１）幼保小連携を始めるきっかけ作り

幼稚園・保育所・小学校の連携は、平成 10 年から答申等に表れている。平成 20 年に告示された幼稚園教育要領や保育所保育指針に明記されたことで、幼稚園や保育所が小学校との連携を進めることは、法的に求められる形にもなった。連携を進めるための資料も「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」など、数多く出版されている。

しかしながら、まだ始められていない自治体、あるいは、つながりがない校園もある。更に困ったことに、一度成立した連携が途絶える校園もある。

本研究では、１つの校園で始めた連携を、続け、広げ、つなげる方法を提示した。本研究で提案した方法を市町村レベルで実施すれば、その市町村に勤務するすべての保育者が連携を経験することになる。小学校教員は都道府県の採用で市町村を越えた異動があるため、全ての教員に広げることは時間がかかるが、きっかけができれば、後はそれをつなげていけばよい。

（2）幼保小連携を深めるための資料

奈良市の幼小連携は、平成12年に始まった。「生きる力を育成することを目的とした将来の学校・園像を協議するための検討委員会」を設置し、「（仮称）中学校区別教育協議会」が編成された。平成14年には「教育改革に向けた具体的な施策を検討する懇話会」が「奈良市教育改革３つのアクション」を提言し、奈良市教育改革プログラム事業が始まった。この中に「幼稚園・小学校・中学校・高等学校の交流連携の調査研究事業」がある。その後、総合施設モデル事業や文部科学省委嘱事業・委託事業を受け、連携を推進してきた。平成 21 年の懇話会提言「奈良市教育ビジョン」では、「幼小連携」を重要課題にし、一時期は学校教育課の下で、全ての幼稚園と小学校が連携をしていた。

しかしながら、校園によっては連携がマンネリ化し、形骸化したところもあった。また、他の事業等の関係で、一時期あった交流が弱まる校園もあり、校園による取組の差が大きくなった。

本研究では、「自主交流」と「非指示的指導」に焦点を当てた。これは、より深い連携を推進するための手段であった。昨年度は、２つのグループの校園がこの深い連携を実践した。本年は、これらの校園が深い連携を続け、新たな２つのグループに広げ、グループ内、グループ間、そして他の校園にもつなげてきた。

この「つなげる」で実践的に検討した方法は、他の深い連携を推進する際にも利用可能である。このような深い連携は、マンネリ化、形骸化、弱体化した校園の関係を、再び元の状態に戻し、新たな、より強力な関係に作り替えることができる。１つの市の中であればグループごとに、小規模な市町村であれば当該自治体の単位でも、深い連携を提案することは可能である。それをカリキュラムと連動させれば、子供の発達や学びの連続性を保障することにもなる。

（3）新たな連携への第一歩

奈良市では、幼保小連携だけでなく、パイロット校での小中一貫教育とその他の小中学校においての小中連携を推進している。試験的に幼小中連携教育にも取り組んでいる。これらの連携にも、本研究で開発した「つなげる」の方法は活用できる。すなわち、経験者を異動させるなど組織の力を使うこと、公開報告会など意見を述べ合う研修で、実践に対する理解を深めること、取り組みを可視化することなどが活用できる。この方法は、他の自治体でも同様に活用できよう。

新たな連携として、奈良市が取り組み始めたのは、私立幼稚園・保育園と公立小学校との連携である。一般に私立幼稚園・保育園は、小学校区を越えて通園している子供がおり、特定の小学校との連携が困難である。しかしながら、このような子供たちにも幼児期の経験として、小学生との交流や、小学校教員との接触、小学校という施設での学びの基礎につながる経験を保障することは必要である。新たな「つなげる」を模索したい。

３．応用と発展

本研究から見えてきた次の実践研究の課題は次の３つである。

（1）連携が弱まる、あるいは途絶える原因の究明

市としてのビジョンを立て、重要課題として取り上げ、一時期はすべての幼稚園と小学校が連携をしていた奈良市においても、校園によっては連携が弱まったり、途絶えてしまったりすることがあった。これには様々な原因が考えられる。例えば、異動により中心となっていた教員がいなくなったこと、管理職が替わり、別の業務に力を入れるようになったこと、市の中の組織が変わり、幼稚園と小学校が別の組織に属することになったこと等である。

これらの原因は、いずれの市町村でも、いつの時代でも生じうる可能性がある。しかしながら、子供は、特定の市町村の下で、今、幼児期や児童期（学童期）を生きている。子供の「今・ここ」の発達や学びを、次の発達や学びの基礎として役立たせるためには、連携を途絶えさせないことが重要である。そのため連携が途絶える原因を解明し、リスクを減らす手立てを打つことが求められる。

（2）保育士と幼稚園教諭、保育園と幼稚園の違いを埋めること

主な結果としては取り上げなかったが、保育士と幼稚園教諭の間には、様々な違いが見られた。例えば、研究集会終了後の評定で、非指示的指導の理解は、保育士が幼稚園教諭よりも有意に低く、小学校教員とほぼ同程度であった（これは実践校園としての本研究への参画が１園だけであったことも関係するかも知れない）。

しかしながら、奈良市では段階的に全ての幼稚園・保育園を認定こども園として統合する予定であり、保育士と幼稚園教諭、保育園と幼稚園の間の違いはできるだけなくしたいと考えている。非指示的指導は、認定こども園でも有効な指導法であり、将来的には奈良市の全ての教員等が日常業務として使えるようになることを期待したい。

そこで、保育士と幼稚園教諭、保育園と幼稚園の間の違いを明らかにし、それを埋めるための対策を立て、その対策を実施し、評価していくことが課題となる。

（3）研修システムの構築

実践校園に所属し、該当する年齢の子供を担当し、実際に連携を行い、公開報告会に参加し、先進地視察に行き、講演を聴き、研究集会で発表した者は、この１年で大きく資質を向上させたと期待できる。しかしながらこれら全てに当てはまる者は４人だけである。人数が極端に少ない先進地視察や研修会の発表を除くと少し増えるが、それでも４０人に満たない。管理職等を除くと更に減少する。幼稚園教諭と保育士に限定すると１５人だけである。

一方、奈良市には、様々な勤務形態を含めると、幼稚園教諭と保育士が約幼４５５人いる。ほとんどの者は、講演を聴くことも、研修集会に参加することも全くなかったのである。このことから、研修をいかに広げるかが、大きな課題となる。子供は、研修を受けた保育者を選んで接することはないからである。

４．まとめ：成果と課題

本研究の成果は次の３つの内容を明らかにしたことである。これらの成果には、

① 幼保小連携を始めるきっかけ作り、

② 幼保小連携を深めるための資料、

③ 新たな連携への第一歩という３つの意義がある。

（1）続ける：自主交流を子供に求めるには、計画交流の積み重ねと仕掛けが必要である。各校園が独自の業務を充実させながら、効率よく、かつ効果の高い連携を行うためには、計画段階で様々な工夫が必要である。

（2）広げる：交流が途絶えていた校園については、教師間のつながりを持つことがきっかけ作りなる。断片的な交流を子供の学びをつなげたり、職員の共通理解を深めたりするには、小学校の単元に、幼稚園の内容を組み入れ、互いのねらいの達成をめざす。

（3）つなげる：つなぎには、様々なレベルがある。繋ぎを効果的に行うためには、連携過程の可視化、

研修の有効活用、組織の力を利用することが有効である。

本研究では次の３つの課題が明らかになった。

① 連携が弱まる、あるいは途絶える原因の究明

② 幼稚園教諭と保育士、幼稚園と保育園の違いを埋めること、

③ 研修システムの構築。

今後は、これらの課題を解決するための実践研究が必要である。

資　料　編

資料：１　＜幼小連携・記録表＞　　奈良市立鳥見幼稚園・小学校

日　時	平成２６年８　月２８日（木）

校園名　鳥見小学校	校園名　鳥見幼稚園
識経験者 校園長・１年担任・２年担任 特別支援担当職員	主任・５歳児担任・４歳児担任

矢印はどちらかを〇で囲んで下さい。

方　法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　）

内　容　（Ｔ：教師、　Ｃ：子ども、　幼：幼稚園、　小：小学校）

＜幼小合同連絡会＞

o 何を育てたいかを明確にして研究を進める。

o 自主交流の持ち方

o 昇降口に幼の様子の写真を貼って小学生に見てもらう。

① ９月、１０月、１２月どんなことをしたいかアンケートを取る

② 一学期小運動会「グッドラッキー」のダンス→幼運動会に「グッドラッキー」と「ラジオ体操」を入れ込むよう計画。

o １年生との計画的な交流…今後検討
二学期「秋みつけ」、「世界遺産なら」わらべうた・読みきかせ（なら弁）を予定

o 環・幼T用の椅子を小職員室にもうけて下さっている。

・園庭で顔見たら、会った時に話して、打ち合わせの場になってる。

・元一年の先生の顔をCが覚えてくれてた

幼メンバーかわる
幼に足運んで保育室にもどんどん入ったりしている

職朝に９月～主任（ほぼ毎日）→少しずつ（週1回ずつぐらい）担任→担任１人ずつ参加する。

１学期は落ち着いてなかったが、２学期からは参加できるように計画を立てた。

幼・年少Ｔ

o 少も「自分たちのしたいことを見てもらう」という場に。→作ったものを小に見せに行くなど、どんな形になっていくのかは解らないが、足を運ぶ関係づくりをしていきたい。

元１年Ⓣより

o小昨年は、「なんで遊ばなあかんの？」の声が出ていた。

今年になって、自ら運んで遊びに行く姿が見られた。
→これこそが「自主交流」だと思った。

大学のⓉより

o やってみたら、楽しいこともいっぱいあることがわかった。そこから繋いでいく理解者を増やす。
行事を引継ぐのではなくそこを引継ぐ。
o 「よかったな」＝というところをどうつないでいくのか。次の世代に引継ぐために
o いいと思ったことは引継いでいける。
o やること自体は変わっていっても、
大切なものは変わらない。　非指示指導 ＜ 助言 ↓ 自主交流

o 自分も楽しい
o 非と自…を理解した上でしないと続けていけないよ。
↓
（わからないとできない）
Ⓣ同士も聞き合う

o 幼小が繋がっている校園は幸せ。
それがないとこの子はかわいそうだよね。
o １つのものを残していく。絶対かわらないものを繋いでいく。
o 知っている学年も繋がっていく。そういう流れの中に繋がっていく

元１年Ⓣ

o 幼でどんなことを育ててもらって小にくるのかを知っていることが幼小連携と思っていた。（相手を知る）

資1

↓

そこに［自主交流／非指示的指導］とかが入ってきたから、私は解らないところがある。

幼稚園Ⓣ

o まずは、Ⓣが「やろう！」って言ってくれる、仲良くなれることが大事。

大学のⓉより

・大人も子供非で動きたいよね！Ⓣも「やりたい」、と思ってもらわないとダメなんですよ。それが非

o はじめは無理するが、そこから形ができてきて、そこから予算がついてくるもの。（サークルとかと同じ）

☆誰に言われなくてもする非をする先生であってほしい。

・Ⓒから力をもらっている。

幼稚園Ⓣ

o 1年生にこういうⓉがついてくれているのはありがたい。

o Ⓣ同士が仲良くなる。

大学のⓉより

o 交流活動が続くことだけではない。教育だから本当にねらっているところは違う。それが他のことにも生かせることが大事。それが教育。

o やりながら見えてくるものを探る。
「なかよくなる」＝手を繋ぐことが出来る。
‖
信じること（信頼）Ⓣ Ⓒも ］それが連携すること。

↓

o 「何を繋げるか」「何が繋がったか」「何を繋げたいか」を明確にすることが、鳥見の今年の筋。

↓

≪奈良市にひろげる≫

○動機付けが必要
・内発的動機づけ・・・自ら進んで「やりたい」と思ってすること。
・外発的動機づけ・・・まわりから言われてすること

楽しい→またやりたい→長続きする

o 動機づけは内発的でなければならない。

o 読み聞かせとかはきっかけ。その中に内在しているものを楽しむことが大事。

o 活動方法のキーポイント⇒自主交流

o 指導のキーポイント⇒非指示的指導

・「なかよくするためにこの遊びをしましょう」と言って、遊ばないもんね。
・めあてがあったとしても㊫のめあてが目的じゃない。
↓
その中で何を楽しんでいるか

それが
非指示的指導

＜今後について＞
o 作成資料についての検討

☆いろいろⒸから出たことを（自主交流）
☆年 5 本の「指導案」は、決めて作成
（計画的交流）
☆併設園だからできるではなく、みんなができるものに
☆悩んでることを教わる。
指導案をみてもらいたい。
ビデオを撮って見てもらうなどの工夫を。

<校園長＞
o ㊫がかわった姿をみた。
Ⓒの姿が変わった。

運動会 10 月
第１１週目

o 顔見知りって、うちはもう 1 回でできたよ。
o 今年はこういう自主交流ができた→結果を 3 学期報告。

資1

資料：２　　神功　保小合同交流会　指導案（保育園５歳児と小学校１年生）

日時　６月５日（木）　１０時～１１時

場所　神功保育園

参加者　保育園　５歳児　２４名　小学校　１年生　２９名

指導者　（保育園）　５歳児　織田由起子　河野美知　（小学校）１年生　木下須美子

ねらい　（保育園）　○一年生に親しみを持ち、一緒にリズム遊びや園庭遊びを楽しむ。

（小学校）　○生活科の一環として校区の保育園を訪ね、異年齢の園児と交流する。

内容　（保育園）　・小学校や保育園の先生の話を興味を持って聞こうとする。

・一年生と一緒にリズム遊びをする。

・一年生と一緒に園庭で遊ぶ。

（小学校）　・同上

時間	子どもの活動	１年生に対する支援・助言	園児に対する援助	非指示的指導 （実際の支援や援助）
10:00 10:10 10:20	○一年生を迎え入れる。 ・挨拶をする。 ・園長先生の話を聞く。 ・小学校の先生の話を聞く。 ・保育園の先生の話を聞く。 ○保育園の部屋を見て回る。 ○リズム遊びをする。 ・一年生の運動会でした踊りを見せてもらう。 ・一年生の踊りを教えてもらい、一	○温かく迎え入れ、緊張感を感じさせないようにする。また、再会を喜ぶ姿を受け止める。 ○興味をもって話を聞くことができるように言葉をかける。 ○楽しく活動する姿を認めたり、園児をリードしたり、優しくかかわっている様子を認め、言葉かけをする。	○事前に一年生が来ることを知らせ、期待をもって迎えられるようにする。 ○興味をもって話を聞くことができるように言葉をかける。 ○一年生に教えてもらうことで	 ○話を聞く姿勢が出来ている子どもを認めることで、他児が気付けるように促した。 ○保育者も共に楽しみ踊ることで、楽しい雰囲気を作り、子ども

	緒に踊る。 〇園庭で好きな遊びを楽しむ。 ・固定遊具で遊ぶ。 ・砂遊びをする。 ・大縄跳びをする。 ・ダンスをする。 〇片付けをする。 〇学校に戻る一年生を見送る。	〇園児たちにやさしくかかわってくれたことや一緒に遊んで楽しかったことを伝える。	親しみや憧れの気持ちが持てるようにする。 〇一年生とかかわりながら、楽しく遊んでいる様子を見守ったり、言葉をかけたりする。 〇楽しかった思いを受け止めたり、一年生に伝えたりする。	と楽しさを共感する。 〇鉄棒で１年生が、園児が知らないまわり方を楽しんでいたので、それに気付けるような声掛けをさりげなくし、興味を持ったり、教えてもらったり出来るようにした。
10:50 11:00				

≪反省・評価≫

保育園　◇一緒に部屋を見てまわった時、1 年生と手をつなぎ名前を教え合ったり、「ここは〇〇組のお部屋やで。」と話したりする姿などがあり、自然とかかわりが持てて良かった。

◇1 年生に踊りを教えてもらい、初めは少し戸惑う姿もあったが少しずつ慣れてきて、真似をしながら一緒に踊れて楽しんでいた。

◇園庭遊びでは交流は少なかったが、1 年生が大縄を跳んだり、鉄棒の知らない技をしているのを見たりして刺激になり、やってみようという気持ちにつながった。

◇鉄棒の新しい技（地球回り）を教えてもらい、出来るようになって喜んでいた。他の友達にも教えてあげると張り切っていたので、今後の遊びに繋がりが持てそうである。

小学校　◆いきなり遊ぶのではなく、園児と手をつないで保育園の部屋を見てまわることで、お互いににっこりと顔を見合わせたり、楽しそうにしゃべっていたりしたので良かった。

◆園児と一緒に踊りながら、一生懸命に教えようとする様子が見られ、自信を持って積極的に活動出来た。

◆園庭での遊びはどうしても自分主体となり、園児との関わりを持とうとする児童は少なかったが、一緒に遊びの場を共有し、楽しむことが出来た。学校へ戻ってからいろいろな感想があり、「保育園の〇〇ちゃんと仲良くなれた。」「〇〇ちゃんと遊んで嬉しかった。」という発言もあった。

資料：３　　神功　幼保小合同交流会　指導案（幼稚園 4, 5 歳児、保育園 5 歳児、小学校 2 年生）

「おもちゃランドで遊ぼう」

日時　10 月 27 日（月）2,3 校時　(9:40～11:30)　場所　神功小学校(体育館)

参加者　(小) 2 年 1 組 23 名　2 組 22 名　(幼) 4 歳児 13 名　5 歳児 12 名　(保)5 歳児 24 名

指導者　(小)川口千香　向井麻紀　衣笠宣江　(幼) 松島久美　松石花央里　竹内円　(保)織田由起子　河野美知

ねらい（小学校）　○園児に分かるように説明し、お店を開くことができる。
　　○園児にやさしく接し、一緒に遊ぶことができる。
　（幼・保）　○いろいろなお店に興味を持ち、楽しく参加する。
　　○児童と一緒に遊びを楽しむ。

内　容　・遊びを通して、グループの友だちに親しみを持つ。

お店の種類
【１組】しゃてき・ボーリング
　　魚つり・空気砲
　　ビー玉ころがし
【２組】弓矢・コイン落とし・風船車
　　パチンコ・モグラたたき

時間	子どもの活動	2 年生に対する教師の支援・助言	園児に対する教師・保育士の援助	非指示的指導 （実際の支援や援助）
一週間前				○幼稚園、保育園に招待状を届ける。 ○招待状を保育室に掲示する。 ○個人のスタンプカードを見て、おもちゃランドに期待をもてるようにする。
9:40	１．本時の活動の確認をする。(保幼小で並ぶ)	○めあてを持って活動できるようにする。	○期待をして話が聞けるようにする。	○グループに分かれ、保幼小で向かい合って座る。
9:45	２．お店を開く。			
9:55~ （前半）	①　お店の説明と２交代制の確認をする。	○大きな声でよく分かるように説明できるようにする。	○興味を持って話を聞けるようにする。	○同じグループの園児を迎えに行く。 ○店番は二交代制とし、一方は店番、もう一方は園児と一緒にまわるようにする。
10:20~ （後半）	②　お店で遊ぶ。	○協力して、園児も一緒に楽しめるようにする。	○２年生と一緒に、楽しく参加できるように見守る。	○自分達で考えて、お店をまわる。
10:45	３．振り返りをして、発表する。(保幼小で並ぶ)	○自分の思いを表現させる。	○自分の思いを表現できるように声をかける。	
10:55	４．園児を見送る。	○園児が入学後に仲良くすることを意識	○入学後に２年生と遊べることに期待が	

11:05	5．片づけをする。	した態度で見送るように声をかける。 〇協力して、最後まで行うように声をかける。	持てるような言葉がけをする。	

≪子どもの見取り≫

- 招待状を作成し幼稚園、保育園に届けた時に園児が喜んでくれたことで、児童は学校に戻り、さらに遊びやすくするにはどうしたらよいか、何を用意すれば園児が遊びやすいのかなど、園児のことも考えてもう一度おもちゃを作った。
- おもちゃランドを見据えて、事前にリハーサルをしたが、園児の様子を思い浮かべ、児童から様々なアイディアが出てきた。
- 2 回目の活動ということで、前回よりリラックスした表情で活動することができた。
- 出迎える 2 年生の姿勢により、園児たちはより楽しい気持ちで参加することができた。
- グループに分かれ、お互いの顔を見て座ることで、同じグループの友達を思い出し、期待を膨らませていた。
- 各グループから、おもちゃについての説明があったことで期待をもてた。
- 園児を座っているところまで迎えに行くことで、自分たちが招待し、上手に案内してあげたいという、お兄さん、お姉さんとしての自覚をもつことができた。
- おもちゃの種類が多く、どれも楽しそうだったので、園児は興味をもって活動できた。
- 順番を決めずに、自分達で考えてまわることで、どこがすいているのか、どこへ行けばスムーズに遊べるかを考えることができた。
- 「どこへ行きたい？」と目線を合わせて園児の思いを聞き、その思いに寄り添いながらまわろうと、自分たちで考える姿が見られた。
- カードに 2 年生がサインしてくれたのが、園児はとても嬉しそうだった。
- 「もっとこうするとうまくいくよ。」「こうやるのがコツだよ。」と園児がやりやすいように教えてあげていた。
- おもちゃが壊れたときに、他の材料で代用するなど、臨機応変に動いていた。
- コイン落としで、濡れた手を優しく拭いてあげていた。
- お別れの際、「次もまたぜったい遊ぼうね。」と別れを惜しむように手を振り続けていた。
- おもちゃランドの後、園に帰ってから、楽しかったおもちゃを作ってまた遊びたいと言い、空気砲やビー玉転がしなどを友達と一緒に作り始めた。おもちゃランドを経験し、遊びに発展が見られた。コイン落としゲームは、自分たちで浮く、沈む、速く沈む、ゆっくり沈むという科学的な遊びに発展した。

資料：４　＜幼保小連携・記録表＞　　奈良市立神功幼稚園・保育園・小学校

記録①

日　時	平成２６年　８月２０日（水）　　１２時５５分～　　時分	
校園名　神功幼稚園 氏名 松島		校園名　神功小学校 氏名 向井
矢印はどちらかを○で囲んで下さ		
方法	電話　　訪問・来園校　（その他）（保幼小中合同研修前に口答で。）	
内　　容		
担当者から ○わかりました。よろしくお願いします。		相手から ○友達探しゲームのグループのことですが、１０グループで分けてもらえますか？お願いします。

この記録から分かることは、合同交流会に向けて、前日の打ち合わせで調整した計画内容について、さらに具体的な方法について連絡し、次の９月４日の合同研修（打ち合わせ）までに準備しておくことを確認し合っている。

これは、合同研修当日に時間を要するであろうことを、事前に準備して短縮化を図るため、教員等間で調整している。

また、連絡内容についても、多くを語らずとも、前日の打ち合わせから互いに了解し合ったことであり、継続的に計画交流を行ってきた２年目の実践校園ならではの連携体制の成果といえる。

記録②

日　時	平成２６年　９月１１日（木）　　１５時４５分～　　時　　分
校園名　神功幼稚園 氏名 松島	校園名　神功保育園 氏名 織田 矢印はどちらかを○で囲んで下さ
方　　法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　）
内　　容	
担当者から ○『手をつなごう』のＣＤありますか？ ○では、他の触れ合い遊びを考えてまた、連絡します。	相手から ○曲が分からないのでないですねえ。 ○分かりました。お願いします。

この記録は、９月２５日に行う合同交流会について、保育園保育士が進める活動内容こと、幼稚園保育者が進める活動内容と、小学校教師が進める活動内容の３種に分けて計画している中で、打ち合わせ当日に幼稚園保育者が進めるふれあい遊びの曲名が決まっていなかったので、再度電話連絡で調整を行っている。尋ねたり、相談したりしていることから、幼保の保育者同士が助け合える信頼関係をつくっている。

曲名は、昨年度とは違うもの、子どもたちが聞いたことがあるもの、当日すぐにできそうなことなどを選ぶようにし、活動内容を覚えることよりも、子ども同士がかかわりをもって交流を楽しめるようなものを選択するようにしている。選曲を一緒に時間をかけて行うよりも、こうしたきめ細かい短時間での連絡調整の積み重ねが当日までに繰り返されている。

記録③

日　時	平成２６年　９月１０日（水）１６時００分～１６時１０分
校園名　神功幼稚園 氏名 松島 松石	校園名　神功小学校（２年） 氏名 向井 川口
矢印はどちらかを○で囲んで下さ	
方　　法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　）

内　　容	
担当者から	相手から
○ありがとうございます。 いろいろお世話になりました。	○９／２５　友達探しゲームの指導案と名札、札を持ってきました。
○分かりました。 当日、持っていけばいいですか？	○札の方を切っていますので、よろしくお願いします。
	○はいお願いします。
○友達探しゲームで、初めて２年生と出会い、触れ合ったことにより、次回に期待がもてると思うので、おもちゃランド前で、良いですよ。 いろいろありがとうございます。	○以前言っておられた、おもちゃランド前に、園の子どもたちに渡す招待状は、友達探しゲームの前にもあった方がいいですか？
	○分かりました。 よろしくお願いします。
○よろしくお願いします。	

この記録では、招待状をどのタイミングで出すのかについて語られている。子どもの実態から期待感が高まるようにという教員等が意図をもっている。

また、校園間で足を運び、交流会前に準備を進める計画的な連携体制が図っている。

このように、事前に打ち合わせを行った大枠の活動内容から、必要なものを各校園で分担しながら準備し、共に協働して進めている。

記録④

日　時	平成２６年　９月１６日（火）１６時４０分～１６時５０分
校園名　神功幼稚園 氏名 松島	校園名　神功保育園 氏名 織田
矢印はどちらかを○で囲んで下さ	
方　法	電話　訪問・来園校　その他 （　　）
内　容	
担当者から ○次回のことですか、幼稚園担当の触れ合い遊びを『ひっつきもっつき』と『じゅげむじゅげむのちょうすけちゃん』にしました。 ＣＤ、歌詞と振付を書いた紙をお渡しします。 ひっつきもっつきは、ＣＤを一度流した後、次はピアノとマイクで２回目をします。（振付の説明をする） また、何かあれば、連絡して下さい。 よろしくお願いします。	相手から ○ありがとうございます、 わからなかったら、連絡します。 よろしくお願いします。

ここでは、記録①で検討していた幼稚園保育者が、曲名を決めて保育園保育士に届けていることを記録している。今回の曲は、当日すぐにできるようなものを選び、保育者同士が遊び方を事前に知った上で交流会を進めていけるようにという配慮がなされている。また、ＣＤ、歌詞、振付を書いた用紙を渡していることから、さらに情報共有の短縮化を図っている。

「ひっつきもっつき」をピアノとマイクを使って行うことを伝えているのは、当日の子どもの動きを想定して、十分触れ合いが楽しめるように子どもの様子やペースに合わせて時間を確保し、進めていけるようにといった保育者の意図があり、子どもが主体的に行動できるように活動内容の工夫を行っている。

資4

記録⑤

日　時	平成２６年　９月１６日（火）　１６時４０分～１６時５０分	
校園名　神功幼稚園 氏名 松石		校園名　神功小学校 氏名 向井
矢印はどちらかを○で囲んで下さ		
方　法	電話　訪問・来園校　その他 （　　）	
内　容		
担当者から ○９月２５日の交流の内容ですが、幼稚園担当の触れ合い遊びは『ひっつきもっつき』と『じゅげむじゅげむのちょうすけちゃん』になりました。 曲の入ったＣＤと歌詞と、振付を書いた紙とお渡しします。 ひっつきもっつきは、一度ＣＤでやってその後ピアノ伴奏で違うところをひっつけようと思います。よろしくお願いします。もし、何かあればまた連絡して下さい。		相手から ○ありがとうございます、子どもたちでも楽しめそうな遊びですね。また、わからなければ連絡します。よろしくお願いします。

記録④と同日に、小学校にも同じものを届けている。ここでは、同時刻に別の幼稚園の保育者が手分けをして小学校を訪問し、園内での協力体制が見えてくる。

この幼稚園では、単クラス２学級編成であることから、５歳児の担任だけでなく４歳児の担任も協力し、幼保小連携を進めている。

また、記録④と同じく、「何かあればまた連絡してください」という会話から、ちょっとしたことでも連絡し合い、受け入れ合える関係ができていることが分かる。ちょっとしたことと思えることでも、いつでも快く対応し合える関係性が、幼保小連携を継続的に続けるということを支えている。

記録⑥

日　時	平成２６年１０月　１日（水）　　１６時３０分～　　時　　分
校園名　神功幼稚園 氏名 松島	校園名　神功小学校 氏名 川口 矢印はどちらかを○で囲んで下さ
方　　法	電話　訪問・来園校　その他（　　）
内　　容	
担当者から ○９／２５、交流会での非指示的指導の方を書いて持ってきましたので、お願いします。 ○記録の方、お世話かけていますが、よろしくお願いします	相手から →○ありがとうございます。 ○また、よろしくお願いします。

ここでは、合同交流会を終え、その後の教員等から見取った振り返りの成果について情報交換を行っている。交流活動に終わるのではなく、互いに確認し合った視点を再度振り返って記録に残して情報を共有し合っている。

また、幼保小の３校園が集まって振り返りを行うといった方法だけでなく、記録を通して非指示的指導の視点から見た成果と課題を伝え合うといった連携の工夫を行っている。

資4

〔記録表から見えてきたこと〕

○　実践を積み重ねてきたことで、担当者は打ち合わせでキーとなるポイントを判断している。そのことで、１ヶ月単位くらいのいいタイミングで打ち合わせや合同研修を行い、その他は電話連絡で対応していくといった工夫を行っている。

○　年に数回の合同研修会でも、打ち合わせのポイントが分かっているため、話し合いをする際、より的を得た話し合いになっているので、効率化も図られている。

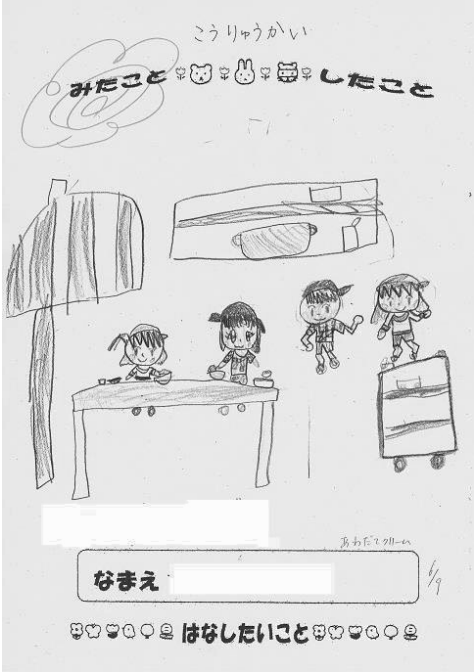
○　細かい調整ができていることで、年々交流をスムーズに行えるようになっているという成果も出ている。このように、具体的な計画内容を、事前に細かい調整を行って教員等が共通理解しておくことで、交流会当日、教員等が子供達に指示をする必要がなくなる。また、一人一人の子供の様子をよく見ることもできるようになり、無駄な指示をする必要もなく、子どもの様子に応じて柔軟な対応をしている。

○　教員等の指示を無くしていくことも「非指示的指導」であるといえる。

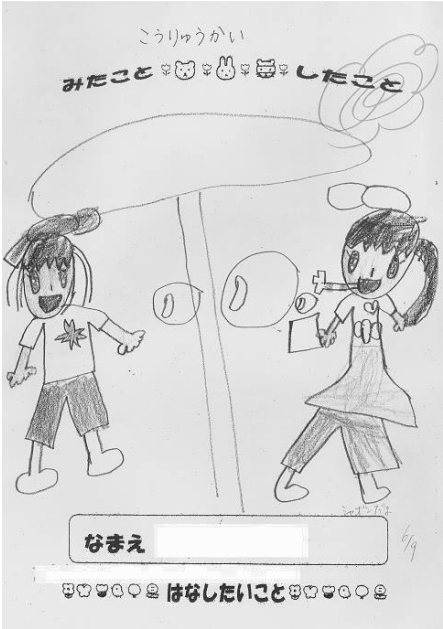
○　調査研究のテーマでもある「研修の在り方」の工夫であり、幼保小連携を円滑に進めていくことにも繋がっている。円滑に進められるから、継続的に何年も幼保小連携を続けていけるのだということが見えてきた。

○　こういった実践を積み重ねてきたからこそ生まれる連携の工夫が「続ける」「広げる」「繋げる」幼保小連携のキーポイントとなっていることが記録表から明らかとなった。

資料：５　神功小学校≪１年生の振り返り≫
～保育園・幼稚園と小学校の交流会（６月）を終えて～



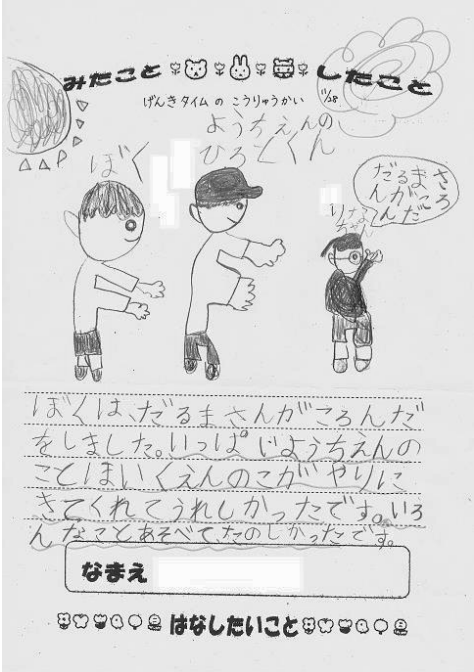
「泡立てクリームが楽しかった」



「シャボン玉を一緒にした」

～元気タイム交流会（１１月）を終えて～

「ボールがつよくて、びっくりした」



「いろんな子と遊べて嬉しかった」

資
5

資料：６　＜幼小連携・記録表＞　　奈良市立認定こども園都跡幼稚園・小学校

記録①

日　時	平成２６年７月１７日（木）　15：00～16：00
担当者　山中裕美子 校園名　奈良市立認定こども園都跡幼稚園 園長　松本知子 ５歳児担任　山中裕美子、鎌田大雅	相手　長浜佐知子 校園名　奈良市立都跡小学校 校長　植島佳子 １年生担任４名
方法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　） 都跡小学校

内　容	
園長から 幼小連携について 今後の方向性について	校長先生から 10月24日（金）に、第４４回全国小学校国語教育研究大会奈良大会の学習公開を都跡小学校で開催する。その中で１年２組は「５歳さんに昔話の読み聞かせをしよう」というテーマで取り組む授業を展開する予定。 実際に読み聞かせをするのは１１月の初旬になるので、それまでに９月か１０月頃に、一年生が幼稚園に遊びに行くなどの交流ができれば良いと思う。
１年２組の取り組みについて詳しく教えてください。	長浜先生より １年２組の取り組みについて 『おむすびころりん』の話を、幼稚園児にわかりやすいように、様子を想像しながらはっきりとした声で読むということに向かって取組んでいく。取り組みの流れとしては、読み聞かせたい絵本を選ぶ、歌を入れながら読む、その他の話も探す、ということを経て、１１月初旬に実際に幼稚園児に読み聞かせる、歌う、他の話の紹介をする、ということをしたい。
・５歳児の幼稚園での姿を、小学校に知ってもらう機会も持ちたいと思っています。幼稚園では、遊びや生活の中での総合的な学びの中での言葉という領域がある。どんな風に過ごしているのかを知ってほしい。 ・幼小の研修は、時間をかけず、要件を決めて端的に行いましょう。	

・交流についての次回打ち合わせは、8 月19 日（火）はいかかですか。 ・幼稚園で行いましょう。	８月１９日（火）にしましょう。
	後日、相手より電話 ・「読み聞かせ」のお話は『おむすびころりん』と決めず、1 年生が自分達で内容を決めることにしました。

資6

記録②

日　時	平成２６年８月１９日（火）　13：00～14：00
担当者　山中裕美子 校園名　奈良市立認定こども園都跡幼稚園 園長　松本知子 ５歳児担任　山中裕美子、鎌田大雅 奈良教育大学　横山真貴子教授	相手　長浜佐知子 校園名　奈良市立都跡小学校
方法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　） **認定こども園都跡幼稚**

内　容

園長から ・横山教授と（認）都跡幼稚園職員で５歳児の遊びについて研修するので、参加してほしいと誘いかける。	来園
横山教授、５歳児担任より ・５歳児の一学期の遊びの姿を、画像を見ながら説明する。 （砂場での樋を使った遊び、樋をつなげて長いコースをつくろうと試行錯誤する姿など。）	・じっくり遊べる環境の中で、いろいろなことを学んでいると思った。 ・「樋」と聞いて、「問い」だと思った。何でも遊びに利用できるのだと思った。「樋」をつなげていく遊びは「ピタゴラスイッチ」の装置のようで、小学校でもできるかもしれないと思った。 ・幼稚園で培った力を、小学校でどう生かし、どう伸ばしていけば良いかということを考えた。
担当者から ・１１月初旬の「読み聞かせ」までに何度か交流をして、５歳児と小学生お互いに十分に親しみを感じた中で「読み聞かせ」をしてもらう方が、お互いに意味のある交流になると思う。	
園長より ・例えば、９月 16 日に教育大学の学生が絵本を読んでくれる「絵本広場」があるが、そこに参加する等どうですか。	・学年との兼ね合いや授業の予定もあるので、小学校に持ち帰って前向きに検討します。
・８月２９日に小学校に伺います。	・次回打ち合わせはどうしましょうか。

資6

都跡幼小〈幼小連携・記録表〉

記録③

日　時	平成２６年８月２９日（木）　10：00～11：00
担当者　山中裕美子 校園名　奈良市立認定こども園都跡幼稚園 園長　松本知子 ５歳児担任　山中裕美子、鎌田大雅	相手　長浜佐知子 校園名　奈良市立都跡小学校
方法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　） 都跡小学校

内　容	
園長から ・「自主交流」「非指示的指導」について 「自主交流」とは、教師が計画は立てるが、子ども自身のやってみたいという思いから生まれる子ども発信の活動であり、子ども主体の交流のことである。 「非指示的指導」とは、教師の意図や思いはもっておきながら、子どもが主体になるような指導。教えるのではなく、子どもが気付いて動けるような指導。見通しをもって探究心を持たせるような援助が大切。	相手から
担当者から ・今後の連携や交流について、予定を話しあいましょう。	・９月１１日（木）１年生４クラスで、幼稚園に遊びに行きたいと考えている。時間は２限目（９：４０～１０：２５）の間に行きたい。どういった形で交流すると良いか。
・初めての出会いの交流で、時間も限られているので戸外で一緒に遊ぶ等、自然に交流できるようにしたい。	・１年生がつくったしゃぼん玉の吹き具を持って行くので、それで遊ぶ等もできますがどうでしょう。
・１年生がつくってくれたもので遊ぶことは、５歳児も喜ぶと思います。では、しゃぼん玉を含めた好きな遊びを一緒にするということにしましょう。	・１０月１０日（金）の２限目に、１年２組の子どもたちが幼稚園に行くことはできます。「サラダでげんき」というお話のペープサートを見てもらおうと思っています。
・その他に交流できる日はありますか。	・「はなしたいなききたいな」という単元で、９月５日に夏休みの思い出お話会をするので見に来られますか。
・５歳児担任が、授業の様子を見に行くことはできますか。	
・９月５日５歳児担任２人で見学に伺います。	
・次回打ち合わせは、9 月 11 日の交流について、9 月 9 日に行いましょう。	

資6

記録④

日　時	平成２６年９月９日（火）　16：00～16：30
担当者　山中　裕美子 校園名　奈良市立認定こども園都跡幼稚園	相手　長浜　佐知子 校園名　奈良市立都跡小学校
方法	電話　訪問・来園校　その他（　　） **認定こども園都跡幼稚**

内　容	
担当者から ・９月１１日（木）の交流について	相手から ・１年生が紙コップでしゃぼん玉の吹き具をつくって持って行くので、それを使って遊びたい。あと、大きなしゃぼん玉がつくれるロープも持っていきます。時間配分はどうしましょう。
○９：５０～１０：２０ ・挨拶をする。 ・小学生にしゃぼん玉の説明をしてもらう。 ・みんなでしゃぼん玉をする。 ・砂場やのぼり屋根で遊ぶ。 ・初めは、みんなでしゃぼん玉をして、子どもたちの様子をみて、他の遊びをしても良いという声掛けをしましょう。 ・しゃぼん液を入れるバケツやたらい、それを乗せる台や机を用意しておきます。 ・教師の振り返りはどうしましょうか。	・吹き具、しゃぼん液、ロープ等を持って行きます。 ・当日９月１１日の予定が空いていれば、その日にしましょう。
・１６時に小学校に伺います。	相手から電話 ・しゃぼん玉の吹き具ですが、紙コップでうまくいかなかったので、モールでつくったものを持って行きます。 ・９月１１日の振り返り、予定大丈夫です。

記録⑤

日　時	平成２６年９月１１日（木）　16：00～17：00
担当者　山中裕美子 校園名　奈良市立認定こども園都跡幼稚園 ５歳児担任　山中裕美子、鎌田大雅	相手　長浜佐知子 校園名　奈良市立都跡小学校 → ←
方法	電話　　訪問・来園校　　その他（　　） **都跡小学校**

内　容	
担当者から ○本日の交流について ・教師の「交流しなければ」という思いが強く、ふれあわさなければという思いが先走ってしまったのではと反省している。 ・一年生は、５歳児に優しくかかわろうとしてくれていた。 ・大きなしゃぼん玉は、二人でしなければうまくいかず、一緒にすることで成功できる道具があって良かった。 ・一年生も、幼稚園を思い出して無邪気に遊ぶ姿が楽しそうだった。 ・一回目の交流なので、思い切り自分を出せるような交流になって良かった。 ・相手（５歳児）のことを考えてかかわる姿がとても良かった。 ・子どもたちとの話し合いの中で、いろいろな声が聞かれた。 ○本日のねらい ・初めての顔を合わせての交流ということで、今日は、小学校の友達と遊ぶことを十分に楽しむことをねらいとした。 ・次回の交流では、「非指示的指導」を意識し、声のかけ方など考えたい。 ・しゃぼん玉液の配合を教えてください。	相手から ○本日の交流について ・大きなしゃぼん玉のロープは、二人でしなければ成功しないので、１年生と５歳児が息を合わせてしゃぼん玉を膨らまそうとする姿がみられた。声をかけなくても自然にかかわれる道具があって良かった。 ・「大きいしゃぼん玉を喜んでくれていた。」「楽しそうにしていた。」と、一年生の子どもたちは５歳児の様子をよく見ていた。 ・ペアをつくって…等ではなく、遊びを通して自然な形でふれあうことができた。 ・１年生は、今日の交流の様子を絵日記に書いた。 ○本日のねらい ・幼稚園に行ったことのない子も、また行きたい、また会いたいと思えるようにすることをねらいとした。また、他の組の先生への啓発として、このくらいの交流ならと気軽に思ってもらえるような交流にしたかった。 幼稚園と小学校が大切に思っていることが、お互いに見えにくいので、こうして話し合う中で思いをつなげたい。 ・泡の力（食器洗剤）400ｍｌ、洗濯のり750ｍｌ、グリセリン250ｍｌ、湯冷まし３ｌｍｌ

資6

資料７　　幼保小合同研修・交流会実践後の意識アンケート調査①

奈良市は、平成 26 年度に文部科学省より、「幼児教育の改善・充実調査研究等事業」の委託を受け、「『子ども自ら育ち合う幼保小連携を生み出す合同研修』～自主交流と非指示的指導に焦点をあてて」という実践調査研究を実施しています。ここで言う、自主交流や非指示的指導とは、以下に示すようなものです。この調査は、小学校や幼稚園・保育所の先生方に、幼保小合同研修・交流会後に、ご意見やご希望をお尋ねするものです。調査目的をご理解いただき、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

奈良市幼保小合同研修推進委員会
委員長　清水　益治（帝塚山大学）

「自主交流」とは、小学校の教科における取組だけでなく、休み時間など、小学校生活のあらゆる場面で幼児・児童が自発的・自主的に取り組むフレキシブルな（柔軟な・順応性がある）交流活動や合同活動のことである。

問１．自主交流を生むポイントとして、あなたは、どのように考えますか。次のＡからＤの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ　保育者と教師が信頼を築いていくことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　保育者と教師は、信頼を築いていくことができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、保育者と教師の信頼を築いていくことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　幼児と児童の交流を計画的に展開することが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　幼児と児童の交流は、計画的に展開することができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、幼児と児童の交流を計画的に展開することができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

③－ａ　「自主交流」を生む「しかけ」をつくることが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

④－ａ　「自主交流」は、積み重ねた交流の上につくり出すことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

「非指示的指導」とは、次の２つのようなものである。
（１）教師・保育者がすぐに答えたり、導いたりするのではなく、見通しをもちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導。
（２）教師・保育者から子どもに答えとなる方法を与えるのではなく、子どもを見守ることで、その子どもが何をしたいのかを知り、子ども自らその方法を見出すための声かけをしたり、環境を整えたりすること。

問２．「非指示的指導」について、あなたはどのように考えますか。次のＡからＤの中から １ つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ　（１）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（１）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（１）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　（２）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（２）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（２）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

問３．勤務校園での幼保小連携（合同研修）について、合同交流会や自主交流に向けての打ち合わせ等で、互いの教育（就学前教育と小学校教育）について気付かれたことや思ったことがありましたら自由にご記入ください。

資7

問４．あなたご自身のことについて、該当するものに〇印をご記入ください。
①あなたの勤務校園は
ア.幼稚園　イ.保育園　ウ.認定こども園　エ.小学校　オ.その他（　　）

②あなたの担当している子どもの年齢や学年は
ア.０歳児　イ.１歳児　ウ.２歳児　エ.３歳児　オ.４歳児　カ.５歳児　キ.１年生
ク.２年生　ケ.３年生　コ.４年生　サ.５年生　シ.６年生　ス.その他（　　）

③あなたの経験年数は（経験年数には講師経験も含みます）
ア.１～３年　イ.４～６年　ウ.７～10 年　エ.11～15 年　オ.15～20 年
カ.21～25 年　キ.26～30 年　ク.30 年以上　ケ.その他（　　）

④あなたの学校園は、幼保小連携の活動を始めて何年目ですか。
ア．１年目　イ．２年目　ウ．３年目　エ．４年目以上

※　奈良市幼保小合同研修推進委員及び研究部員の方のみ、氏名をご記入ください
氏　名　（　　）

ありがとうございました。

資料８

講演会に関するアンケート調査②

本日は奈良市幼保小合同研修推進委員会・講演会へご参会いただき、ありがとうございました。お手数ですが、今後の参考とさせていただくために、アンケートにご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

奈良市幼保小合同研修推進委員会
委員長　清水　益治（帝塚山大学）

◪ あなたご自身のことについて

該当するものに〇印をご記入ください。

問１．あなたの勤務校園は

ア.幼稚園　イ.保育園　ウ.認定こども園　エ.小学校　オ．その他（　　）

問２．あなたの担当している子どもの年齢や学年は

ア.０歳児　イ.１歳児　ウ.２歳児　エ.３歳児　オ.４歳児　カ.５歳児
キ.１年生　ク.２年生　ケ.３年生　コ.４年生　サ.５年生　シ.６年生
ス.その他（　　）

問３．あなたの経験年数は（経験年数には講師経験も含みます）

ア.１～３年　イ.４～６年　ウ.７～10 年　エ.11～15 年　オ.15～20 年
カ.21～25 年　ク.26～30 年　ケ.30 年以上　コ.その他（　　）

問４.平成 25 年度の文部科学省委託事業「講演会」（講師：上智大学　奈須正裕氏）にも参加されましたか。

ア．はい　イ．いいえ

◪ 講演内容について

問５．本日の酒井朗先生のご講演についてのご感想をお聞かせください。

◪ 勤務校園での幼保小連携について

問６．あなたの幼稚園・保育園と小学校との間では、連携を行っていますか。
該当するものに〇をつけてください。

ア．　積極的に連携している　イ．　連携しているが十分ではない　ウ．　連携できていない

また、連携している場合、どの校園間で連携を行っていますか。〇をつけてください。

ア.（　）保育園・小学校　イ.（　）幼稚園・小学校　ウ.（　）保育園・幼稚園・小学校

問７．幼稚園･保育園と小学校との連携を行っている先生方にお尋ねします。
現在、どのような連携を行っていますか。該当するものに○をつけてください。（複数選択可）

ア（　　）日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動
イ（　　）運動会や○○祭りなどの行事を通した交流活動
ウ（　　）小学校での授業体験
エ（　　）小学校での給食体験
オ（　　）交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ
カ（　　）保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し
キ（　　）小学校入学時（1 学期）のスタートカリキュラムの作成
ク（　　）保育園･幼稚園での就学に向けたアプローチカリキュラムの作成
ケ（　　）小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観
コ（　　）保育士・幼稚園教員による小学校の授業参観
サ（　　）就学時の連絡会
シ（　　）指導要録・保育要録の送付
ス（　　）保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会
セ（　　）就学時における学童保育の教員との話し合い
ソ（　　）その他〔　　〕

問８．幼稚園・保育園と小学校との交流活動(行事・日常)を行っている先生方にお尋ねします。
どのくらいの頻度で実施されていますか。該当する番号に○をつけてください。

ア．年１回　　イ．年２回　　ウ．年３回（学期に１回）　エ．年４，５回　　オ．年６回以上

資8

問９．幼稚園･保育園と小学校との連携を行っている先生方にお尋ねします。今後さらに連携するとしたら、どのような連携を行いたいですか。また、連携を行っていない先生方は、今後実施するとしたら、どのような連携を行いたいですか。○をつけてください。（複数選択可）

ア（　　）日常の活動（保育）のなかでの子ども同士の交流活動
イ（　　）運動会や○○祭りなどの行事を通した交流活動
ウ（　　）小学校での一日授業体験の交流活動
エ（　　）小学校での給食体験
オ（　　）交流活動前後における相手校（園）教員との打ち合わせ
カ（　　）保育園・幼稚園と小学校の保育・教育課程の見直し
キ（　　）小学校入学時（1 学期）のスタートカリキュラムの作成
ク（　　）保育園･幼稚園での就学に向けたアプローチカリキュラムの作成
ケ（　　）小学校教員による保育園・幼稚園の保育参観
コ（　　）保育士・幼稚園教員による小学校の授業参観
サ（　　）就学時の連絡会
シ（　　）指導要録・保育要録の送付
ス（　　）保育や授業などの実践についての保幼小合同研修会
セ（　　）就学時における学童保育の教員との話し合い
ソ（　　）その他〔　　〕

問１０．幼稚園･保育園と小学校との連携や接続において，どのようなことが課題となっていると感じますか。〇をつけてください。（複数選択可）

ア（　　）連携の具体的な内容や手順を決めること
イ（　　）保育・教育課程に位置づけていくこと(アプローチ/スタートカリキュラムの作成等)
ウ（　　）校内（園内）で連携の必要性や指導観の共通理解を図ること
エ（　　）連携を行う校園の教員間で，連携の必要性や指導観の共通理解を図ること
オ（　　）指導の難しい，あるいは配慮の必要な園児や児童が増加していること
カ（　　）毎年継続していくこと
キ（　　）計画や準備に手間がかかること
ク（　　）日程調整が難しいこと
ケ（　　）交流活動中・移動時の園児・児童の安全確保
コ（　　）交流活動時間の確保
サ（　　）移動時間・移動手段の確保
シ（　　）担当者が異動した後の継続
ス（　　）その他（　　）

問１１．自園の幼保小連携もしくは幼小連携を進めるにあたって、どのような取組や工夫をされていますか。

問１２．その他，幼稚園・保育園と小学校の連携・接続について、お考えやご意見等ございましたら、ご自由にご記入下さい。

※　奈良市幼保小合同研修推進委員及び研究部員の方のみ、氏名をご記入ください
校園名（　　）氏名（　　）

アンケート調査にご協力いただき、ありがとうございました。（こども園推進課）

資料９　　奈良市幼保小合同研修推進委員会　研究集会　アンケート調査③

本日は、研修集会へのご参加、ありがとうございました。

本事業の成果をまとめ今後の研修の充実に生かすために、下記アンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

Ⅰ　あなたの所属、現在の職、経験年数についてご記入ください。

①　所属について

1　幼稚園（認定を含む）2　保育園（認定を含む）3　小学校　4　その他

②　現在の職について

1　校園長　　2　副園長・主任・教頭　　3　保育士・教諭・講師　4　その他

③　経験年数について

1　5年以下　　2　6～10年　　3　11～15年　　4　16～20年　　5　21年以上

①

②

③

Ⅱ　あなたの校園での幼保小合同研修（交流会を含む）について、ご記入ください。

④　幼保小合同研修（交流会を含む）を年何回行っていますか。

1　年1回　　2　年2～3回　　3　年4～6回　　4　年7回以上　5　その他

⑤　今後、幼保小合同研修（交流会を含む）をどのように進めていきたいですか。

1　現状のまま　　2　現状より少し回数を増やす　　3　現状より少し回数を減らす

※　選択した理由をお書きください。

（　　）

④

⑤

資９

Ⅲ　今回の研究集会に参加して、下記の内容についてお答えください。

①　＜自主交流に基づく保幼小連携＞について

a. 理解することができましたか。

よく理解できた　　だいたい理解できた　　あまり理解できなかった　　まったく理解できなかった

b. 実践校園以外にも、広げることができると思いますか。

幅広く広げることができる　　広げることができる　　少し広げることができる　　広げることができない

※そのように考える理由はなぜですか。

（　　）

② ＜非指示的指導＞について

a. 理解することができましたか。

よく理解できた　だいたい理解できた　あまり理解できなかった　まったく理解できなかった

b. 保育・教育のなかで、＜非指示的指導＞を実践することができると思いますか。

十分実践することができる　実践することができる　少し実践することができる　実践することができない

※そのように考える理由はなぜですか。

（　　）

Ⅳ　今回の研修会に参加されてのご意見・感想を自由にご記入下さい。

ご協力ありがとうございました。

資料１０　　幼保小合同研修・交流会実践後の意識アンケート調査④

これは、奈良市幼保小合同研修推進委員会が、平成２６年度 文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査」にかかわって、小学校や幼稚園・保育所の先生方に、幼保小合同研修・交流会後に、ご意見やご希望をお尋ねする調査です。

調査目的をご理解いただき、ご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。

奈良市幼保小合同研修推進委員会
委員長　清水　益治（帝塚山大学）

◪ あなたご自身のことについて　　該当するものに〇印をご記入ください。

問１．あなたの勤務校園は

ア. 幼稚園　イ. 保育園　ウ. 認定こども園　エ. 小学校　オ. その他（　　）

問２．あなたの担当している子どもの年齢や学年は

ア. ０歳児　イ. １歳児　ウ. ２歳児　エ. ３歳児　オ. ４歳児　カ. ５歳児
キ. １年生　ク. ２年生　ケ. ３年生　コ. ４年生　サ. ５年生　シ. ６年生
ス. その他（　　）

問３．あなたの経験年数は（経験年数には講師経験も含みます）

ア. １～３年　イ. ４～６年　ウ. ７～10 年　エ. 11～15 年　オ. 15～20 年
カ. 21～25 年　ク. 26～30 年　ケ. 30 年以上　コ. その他（　　）

◪ 勤務校園での幼保小連携（合同研修・交流会）について

問４．幼保小合同交流会に向けての打ち合わせや準備を行う時に、互いの教育（就学前教育と小学校教育）について気付かれたことや疑問に思ったことを自由にご記入ください。

問５．幼保小合同交流活動の中で、子どもの姿を見取り、援助や支援を行う時に気付かれたことや気になったこと（自分の行った支援や援助、言葉かけや他の先生の様子を見て感じたこと）等をふまえて自由にご記入ください。

問６．幼保小合同研修や交流会を終えて、互いの教育（就学前教育と小学校教育）の在り方について、気付かれたことを自由にご記入ください。

問７．幼保小連携を進めていくうえで、難しかったこと・苦心したこと、また、それをどのようにして改善してこられたかについてもありましたら自由にご記入ください。

問８．自主交流について、学んだことや留意点など、今後の授業・保育の中で生かしていこうと思われることがありましたら自由にご記入ください。

「自主交流」とは、小学校の教科における取組だけでなく、休み時間など、小学校生活のあらゆる場面で幼児・児童が自発的・自主的に取り組むフレキシブルな（柔軟な・順応性がある）交流活動や合同活動のことである。

問９．非指示的指導について、学んだことや留意点など、今後の授業・保育の中で生かしていこうと思われることがありましたら自由にご記入ください。

資10

「非指示的指導」とは、次の２つのようなものである。

（1）教師・保育者がすぐに答えたり、導いたりするのではなく、見通しをもちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導。

（2）教師・保育者から子どもに答えとなる方法を与えるのではなく、子どもを見守ることで、その子どもが何をしたいのかを知り、子ども自らその方法を見出すための声かけをしたり、環境を整えたりすること。

◪ 「自主交流」について　該当すると思われることに〇印をご記入ください。

「自主交流」とは、小学校の教科における取組だけでなく、休み時間など、小学校生活のあらゆる場面で幼児・児童が自発的・自主的に取り組むフレキシブルな（柔軟な・順応性がある）交流活動や合同活動のことである。

問１０．自主交流を生むポイントとして、現在のあなたは、どのように考えていますか。次のAからDの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ　保育者と教師が信頼を築いていくことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　保育者と教師は、信頼を築いていくことができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、保育者と教師の信頼を築いていくことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　幼児と児童の交流を計画的に展開することが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　幼児と児童の交流は、計画的に展開することができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、幼児と児童の交流を計画的に展開することができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

③－ａ　「自主交流」を生む「しかけ」をつくることが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

④－ａ　「自主交流」は、積み重ねた交流の上につくり出すことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

問１１．自主交流を生むポイントとして、本年４月頃のあなたは、どのように考えていましたか。次のAからDの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思っていた、　Ｂ：まあそう思っていた、　Ｃ：あまりそう思っていなかった、　Ｄ：全くそう思っていなかった

①－ａ　保育者と教師が信頼を築いていくことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　保育者と教師は、信頼を築いていくことができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、保育者と教師の信頼を築いていくことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　幼児と児童の交流を計画的に展開することが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　幼児と児童の交流は、計画的に展開することができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、幼児と児童の交流を計画的に展開することができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

③－ａ　「自主交流」を生む「しかけ」をつくることが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を生む「しかけ」は、つくることができると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を生む「しかけ」をつくることができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
④－ａ　「自主交流」は、積み重ねた交流の上につくり出すことが必要だと思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことは、できると思う。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　私は、「自主交流」を積み重ねた交流の上につくり出すことができる。　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

◪ 「非指示的指導」について　該当すると思われることに〇印をご記入ください。

「非指示的指導」とは、次の２つのようなものである。
（１）教師・保育者がすぐに答えたり、導いたりするのではなく、見通しをもちながら問題解決に向けて準備したり共に考えたり認めたりする指導。
（２）教師・保育者から子どもに答えとなる方法を与えるのではなく、子どもを見守ることで、その子どもが何をしたいのかを知り、子ども自らその方法を見出すための声かけをしたり、環境を整えたりすること。

問１２.「非指示的指導」について、現在のあなたは、どのように考えていますか。次のＡからＤの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思う、　Ｂ：まあそう思う、　Ｃ：あまりそう思わない、　Ｄ：全くそう思わない

①－ａ　（１）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（１）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（１）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　（２）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（２）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（２）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

問１３.「非指示的指導」について、本年４月頃のあなたは、どのように考えていましたか。次のＡからＤの中から１つを選んで丸をつけて下さい。

Ａ：確かにそう思っていた、Ｂ：まあそう思っていた、Ｃ：あまりそう思っていなかった、Ｄ：全くそう思っていなかった

資10

①－ａ　（１）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（１）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（１）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

②－ａ　（２）について、十分に理解していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｂ　（２）について、自分では十分に実践していると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
－ｃ　（２）について、他の教師や保育者を指導できると思う　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ

※　奈良市幼保小合同研修推進委員及び研究部員の方のみ、氏名をご記入ください

校園名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

最後までアンケート調査にご協力いただき、ありがとうございました。（こども園推進課）

資料 11：鳴門教育大学附属幼稚園へ先進地視察より【研究部員】

◇　参加者の学びと感想

① 鳴門教育大学附属幼稚園の幼小連携の様子

◇牛乳パックを使って、５歳児と一年生が作りたいものを話し合い、協力して作る活動をしていました。小学校の教員が、５歳児にもわかりやすいように、写真を見せながら今日の活動の説明をしたり、丁寧な言葉掛けをされたりしているのを見て、小学校の教員が５歳児の発達を理解されている上での交流だということがよくわかりました。

◇グループに分かれての活動の中で、教師が子供の様子を見守りながら必要な時にだけ声を掛けるなど、子供同士のかかわりを大切にしていると感じました。その中で、幼小関係なく自然な形でかかわり、役割分担し、協力し合いながら活動を進めていく子供たちの様子を見ることができました。牛乳パックは、１年生が他の学年に紙パックを洗って乾かして貯めておいてもらえるよう自分達で頼みに行くなどして集めたもので、自分達で材料を集めることで、今回の活動への動機付けにもなっているというお話が印象に残りました。

◇交流活動の動機付けとして、事前に小学校 1 年生だけでなく、全児童を巻き込んで交流準備をすることにより、全学年が幼児とかかわることができるように計画されていた。自園でも計画的ではあるが、低学年に限らず、他の学年ともかかわりが持てるような計画を立ててきたが、かかわり方の難しさもある。園児と児童が、自然なかかわりができるような学びのしくみ作りの工夫の大切さを改めて感じることができ、勉強になった。

◇教師は、子供の気持ちが揺らいでいるときは、様子を見守ることにより、子供自身で考えることができるようになる。そして教師はタイミングを逃さず声掛けすることの大切さを、本日の活動を通して改めて感じることができた。

◇交流の回数は少ない方の１年生クラスと聞きましたが、子供一人一人の育ちをしっかりと受け止め見取る姿が、幼稚園、小学校、双方の教員の姿や言葉掛けに表れていると感じました。指示を急いだり、行為をさせたりせず、方向はしっかりと示しておられました。

◇牛乳パック集めにも学年を越えてつながり合いがあることを聞き、連携のための保育や授業だけはなく、子供の育ち・学びの仕組みを作るためになされている連携であるところが大変勉強になりました。

◇小学１年生と幼稚園児との交流学習で、その時間に行う活動についての説明の後は「非指示的な指導」がなされていた。児童が少し横に逸れる行動をしていても、「待つ」ことで本来の活動に戻っていた。

◇牛乳パックを使ってベッドを作るという作業で、テープを切る子供やパックをつなげる子供、等と自然に役割分担をしていた。(以前は担任同士の思いで計画外の交流を行っていたが、今年は計画的に行っているとの事。)

◇人数が多いにもかかわらず、大きな声を出さなくても指示が通っていた。

② 視察を通して学んだことや、感想

◇幼小連携は、子供同士の交流だけが連携ではなく、幼稚園小学校が互いに子供の発達や学びを理解すること、小学校につながる学びを意識してかかわること、遊びや生活の中で様々な感性や感覚が育つような環境を設定するといったことも、小学校との接続において重要なことであることがわかりました。

◇鳴門教育大学付属幼稚園を視察させて頂き、私自身の保育を振り返ることができ、また今後の保育の参考になることもたくさんありました。佐々木園長先生の言葉を振り返りながら、幼小連携、接続を意識した保育を展開させていきたいと思いました。

◇鳴門教育大学付属幼稚園のねらいを持っての環境作りは、とても印象に残った。季節の花、木、野菜は対比することにより子供が自然にものとかかわり、学べるようになる。教師が何を意図としていくか、しっかりねらいを持ち、環境作りをしていくことで、子どもの学びに繋がると改めて感じた。

◇小学校との園舎が区仕切りなく運動場に行き来できる環境は、とても素晴らしいと思った。そして小学校・幼稚園の教師同士がお互いの保育観や指導観に関心を持つこと、そして連携は最終目的ではない。滑らかな接続をする為に、子供たちの為に、連携を深め、より充実させていくことが必要だと感じた。

◇環境作りは明確な意図を持ってなされるべきものだということを改めて学んだ。

◇子供の遊びや日々の暮らしの中で、今何を体験し、それが今後何につながっていくのかということまで知ってかかわる、教師の専門性が今問われているのだということも知りました。

◇日々の保育の当たり前をもう一度見直すことも必要ではないかと感じました。

◇体幹がしっかりしているようで座っている姿勢が美しかった。また、基本の座り方が正座であるとの事。学習面以外に体幹や筋力に関しての研修も必要であると感じた。

◇異なる校種の教員の話を聞くことは、自分にとっても勉強になった。

◇小学校へつながる幼児の学びや教師のかかわり、環境構成の大切さなど、実際の保育を見ながらのお話が、大変勉強になりました。特に、子どもが「もの」とかかわる中での科学的なものの見方や考え方が小学校の学習につながるということ、教師がそれを意識することで子どもの学びや育ちが変わるということが参考になりました。例えば、牛乳パック１個でもつながると長く（○ｍ）なる、濡れたコップを机に置くと輪軸ができる、同じ量の水を違う容器に入れると高さが違う等に、子どもが遊びや生活の中で気付いている姿を、教師が意識するのとしないのでは、言葉、ふるまいに違いが表れるので、意識するという、保育の専門性が大事だということがわかりました。

資11

③ 佐々木園長先生の講話を通して学んだこと

◇園内の様々な環境が、子供の感性や感覚を育てているということ、子供の育ちや学びを意識した環境であるという話も印象に残りました。例えば、うさぎ小屋の前に、うさぎが食べる野菜を植えたプランター、うさぎが食べない花を植えたプランターを置いて、対比させることで、子供が体験の中で自然に学んでいけるようにしているという話等、それぞれの環境に意味があるということ、それを考えて環境を考えることが大切だということがわかりました。

◇佐々木先生の講話を通して、何に対しても教師がしっかりと“ねらい”を持って取り組むことが大切だということを改めて感じることができた。例えば、『体操』だと表現をするのか体操をするのかによって、ねらう所は変わってくる。教師がしっかりと意図を持つこと、そして、その意図とするねらいを保護者、周囲にも伝えていくことで、なぜ子供たちはそうしたのかを知ってもらうことはとても大切である。また、子供自身で考え、ものとかかわれる環境を大事にされていて、土や水で育つ花、季節の花、動物が食べられる葉などが対比できるように環境を作っておられた。その環境の中で、子ども達が無意識の間に学んでいることを教師は見逃さず、認めることにより、子供たちは、自信をもつことができる。自然に学ぶことができる環境を作り、また、教師は、子供の姿を見逃さずタイミングよく声掛けすることの大切さを改めて感じることができた。

◇「学びの仕組み作り」について

◇子供の学びやしていることの意味を、親に説明していくことの重要性。

◇今は、ほっておいて子供が育つ環境ではなくなってきている。そのために今幼稚園では何が必要かを環境作りとして行っていく必要がある。

◇世の中のことわりを感じられる毎日にしたい。それを自然と学んでいける環境作り。生活の中に、「ちょっとずつかませる」環境作り。

◇教員の資質として子供の感性をみられるトレーニングが必要。

◇審美眼を養うことに関して、親や教師が幼児期に果たす役割は大きい。

◇幼児期に、「他人の立場に立ってものを考える」というのは難しいので、教師が悲しむことでしてはいけないことなのだということを学ぶ。

◇図形や単位量の基礎は幼児期に養われるので、遊びの中で見付けられるように仕組む。

◇教師の側が様々な意図を持って活動することで、子供達の学びが違ってくる。

資料１２：　**奈良市幼保小合同研修推進委員会　アンケート①調査（記述式）より**

勤務校園での幼保小連携（合同研修）について、合同交流会や自主交流に向けての打ち合わせ等で、互いの教育（就学前教育と小学校教育）について気付いたことについて

◇みんなが同じ気持ちで取り組んでいくことはむつかしいと思うが、いろいろな人の意見を聞き、いろいろなやり方ですすめていく必要があると思う。
◇幼保と小学校では、指導の仕方が違うと感じた。
◇幼稚園では子どもの内面を読取り今できるできないで評価するのではなく、目に見えないものを豊かにできるように心がけている。学校でも、もちろんそれはあるが、やはり課題に向けての出来る、出来ないことへの評価が前にくるように感じ、指導の仕方も変わってくると思う。保育園とも違いを感じる。
◇教師が子供たちの経験や育ちのために積極的に歩み寄ることで互いの教育への理解が広がると思います。連携しなければということよりも子供たちの育ちのために何かできるかと言うことを考えていきたいと思います。
◇打合せに参加させていただくことで、小学校の先生の思いを知る機会になったり、幼稚園でやっていることを知っていただいたりすることで、相互理解につながりました。
◇互いに教育に対する思いにずれがあるのではないか。
◇互いに持つ教育観の違いから子どもの関わりについて、話し合い統一して共通理解をすることを心掛けた。
◇まず打合せ等の出来る体制ができると良いと思います。
◇小学校は目標を設定しそれに向かって教師が声かけや授業をする。非指示的指導は非常に良いとは思うが、非常に時間が掛かるので体育や生活科にはいかせるが、算数、国語に生かすには無理がある。
◇本校園は常に連携を取りながら研修が出来ていると思う。踏み込んだ話をするに至るにはかなりの時間が要るので時間確保は難課題である。
◇活動の方法と活動の子ども達への任せ方、幼稚園の方が任せ方が大きい気がする。
◇大切にしてるところは同じであるという点

資料１３：合同研修「講演会」アンケート②　調査（記述式）より【参加者】

①酒井朗先生のご講演から参加者が学んだこと・気付いたこと

ａ．講演を聞いて学んだこと

＜保育園＞

・子ども同士が触れ合う機会を作っていく。

・実際にできることを始めて行くことが大切だと感じました。その一歩として職員同士の交流の場をもつこと、悩みや子供の姿を通しての話し合いの場をもつことから深めて行くものだと改めて確認する機会となりました。

＜幼稚園＞

・子供の気持ちを支える為には、保幼小の職員がお互いの保育観、指導観を理解するそして、双方の主体性を尊重する。日々の実践を振り返っていくことが、連携を進めていくうえで大切であると、改めて感じた。

・環境をつなぐなど､具体的に話し合い､分かり合えるような教師同士の時間(交流)を作り大切にしていきたいと思いました。

・段差が少ない方が良いと思っていたが、段差をうまく利用することも大切と言う言葉が響いた。

・連携することで子供だけでなく教師自身の成長につながるのだと改めて感じました。まずは互いが歩み寄り、雑談でもできる場をつくれるとそこから子供へも広がっていくと思います。無理なくできることを増やしていきたいです。

＜小学校＞

・今取り組んでいることを積み重ねていくことが大切であると感じました。リーダーシップを発揮して今取り組んでいる内容にプラスしていきたいと思います。

・改めて連携することの大切さを学びました。まずは管理職、教師から強い意志を持って出来ることから取り組むことが大切だと感じました。

・ただたんに交流をするのではなくて、質を高めることや何を重点的におくのか、目標を置くのか、幼小の教員が理解したうえで取り組むことが必要だと思いました。

ｂ．課題から今後に向けて

＜保育園＞

・先生のお話を聞かせて頂き、課題がいくつか見つかりました。その一つに交流の後”教員等同士の交流”にはつながっていただろうか。ということがあげられます。

・今のままの交流では私たちの保育の質の向上にはつながっていないのではないか、もっと活きた取り組みにしていかなくてはいけないのではないかと気づかされました。

・連携・接続のための手立てとして教員等同士の交流が一番大事と言うことで、子ども同士の交流がより意味のあるものになるよう、魅力ある交流を保幼小の職員間で話し合い企画しそこから私たち自身の学びに繋げていかなければならないと感じた。

・職員間子ども間の交流にもちろん５歳児担任なので小１，２の教育カリキュラム

資13

との連携が出来るようにカリキュラムの作成などの大切さを痛感した。

＜幼稚園＞

・「できることから始めること」これは、現在の自園での取り組みを考える上ではっとした言葉です。子ども同士の交流と言うことよりもまず職員同士の交流をもっと濃くしていきたいと考えます。管理職として互いの思いや願いを理解してもらえるようにしていこうと思います。

・話し合いはもてる機会は少なくても様々な地域での活動に一緒にかかわる機会を利用していきたい。

・今日の講演を聞きながら、自園の交流の仕方やそれに対する職員の考え方などを思い浮かべて考えました。その中で、今までモヤモヤとしてことが晴れたことがありました。それは、今まで子の交流の中で何を育てたいのか、というところがはっきりしていなかった。小学校側のそれも全く見えずに「いつも通りで・・・」流れている所があることでした。先生の話の中の「双方の主体性を尊重する」「相手の育てたい子どもの姿も大切にする」ということが、互いに薄かったのだと思いました。

・子どもたちを何の活動で交流させていくのかが主になってしまいがちな交流。職員同士が交流し相手がどんな思いで子どもに関わっているのか、お互いの保育観、指導観を理解し合うその言葉がとても心に残りました。

＜小学校＞

・カリキュラムのとらえについて、今まで学習系統のみ考えていましたが、環境の問題指導方法や教室チャイム（時間）など広げて考えられるようになりました。

②講演会終了後のアンケート調査より

ａ．連携を進めるために重視していること

＜保育園＞

・交流活動の前後に打合せや振り返りを行い、なるべく短時間で要点を絞って話をする。

＜幼稚園＞

・教職員間でお互いの時間を相談した後、計画的な打ち合せをしている。行事に関連して少しでも交流できるようにと考えている。

・カリキュラムに位置づけている交流活動の前後で連絡を取り合い互いの校園に行き来し合って打ち合せを行い、振り返りをする。

・当園園長が小学校校長を兼務しているので個々の幼児の様子・小学校への連絡など常に情報交換をしながら連携を取っている。

・幼児や児童が自ら互いをよき環境の一部として必要とし連携を進めていけるように考えている。

・普段の子どもの様子をお互い伝え合う時間を少しでもとる（幼稚園の教師が小学校の様子を伝えるまた反対も）

＜小学校＞

・教師同士の交流を出来るだけこまめに行う。

・全職員による合同研修を行い、共通課題の理解と解決方法について話し合っている。

b．自校園で行っている幼保小連携・幼小連携

＜保育園＞

・クラス懇談会に小学校の先生に来ていただき、就学を前にした保護者に子どもたちにとって小学校入学に向け身につけていってほしい習慣や大事なことなどを話して頂いたり保護者からの質問に答えて頂いたりと言う機会を設けています。

・日程調整がむずかしい中、合同運動会を行っています。地域の運動会を兼ねていますが、交流し合える良い場になっていて、慣れていない小学校での運動会であったが3度使わせてもらう機会があり、事前の話し合いを重ねた。

＜幼稚園＞

・自主的な交流計画的な交流を異互いのカリキュラムの中に計画的に位置づけていけるようにしている。

・交流では小学校は時間が区切られているので、できるだけ幼稚園が時間を合わせるようにしている。1学年ずつだが、小学校全校の児童と交流する機会をつくっている。

・幼稚園の方が時間の都合がつきやすいので行事などに参加するときは、小学校の時間に合わせるようにしています。

・児童生徒の交流だけでなく先生方との普段の交流も大切にし、卒園した子どもの様子など連携を図るようにしています。小学校へのグラウンド、図書館など施設も利用しています。

・小学校のプールに行ったり、体育館に行ったりして出かける機会を増やす。

・交流後子どもたち一人一人に感想を聞き、それを交流後の反省会で小学校の先生に伝えています。実際に交流をした子どもたちの思いを伝え合うことが次回の交流内容へつなげていける一つの要素になっていけたらと思っています。

・自園ではまず幼稚園の生活や行事などを知ってもらおうと写真などを貼った手作り新聞を子どもと一緒に持って行き、見てもらえるように発信することから進めています。

・最初の幼小の交流の時に、幼稚園児と小学校の児童といくつかのグループを分けておくことにより、何度かの交流がスムーズにいくことが多かった。

・幼稚園の好きな遊びの時間に招待する。

・秋の自然物を取りに行ったり、使ったりし、一緒にそれらで遊ぶ。

・運動会へ招待するのも子どもたちがポスターを持って小学校へ行くなどの工夫をする。

・小学校長が園長を兼務しているので、行事予定を確認する際に施設を借りる予定などをたてる。また、特別支援コーディネーター先生と、連絡をよくとるようにし、就学に向けてのアドバイスをもらったり状況を伝えたりしている。

・幼稚園と小学校の間にフェンスなどのしきりがないので、日常の体育や授業（体育）を園庭・校庭からみることができる。「小学校のお兄さん、お姉さんがあんなことをしているよ。」と声をかけるようにしている。

資13

＜小学校＞
・学校全体や低学年の活動や行事に交流や参加してもらえる時は連絡をとりあっている。
・幼小連携で小学校教員が幼稚園に入って鉛筆の指導（運筆の指導）など、子ども同士の交流だけでなく、教員が実際に幼稚園に入り込むような取り組みに力を入れている。
・プール、芋掘り、芋うえ、秋の収穫物を使った合同授業などを通して、低学年と保育園年長との交流を深め顔なじみになるように心がけている。また、場所も小・保の両方を利用している。

資料１４：合同研修「研究集会」アンケート③　調査（記述式）より【参加者】

①研究集会を聞いて、参加者が感じたこと（参加者全員にアンケートをとる）

ａ．今後、幼保小合同研修（交流会を含む）をどのように進めていきたいか。

・園児、児童がお互いプラスになるような内容になするための見直しをしていきたい。
・幼児、児童の交流を計画的に増やしていきたいと思います。
・はじめたばかりなので、その年、その子どもたちにあったものにしていきたい。
・回数も大事であるが現状の内容の見直しを深め、成果と課題を具体的に出し合う。
・互いのカリキュラムをつなげ交流を実行しているので現状のままとしたが、次期、内容の工夫や調整は行っていきたい。
・交流の打ち合わせはするが、その後の反省評価の時間がとりにくいのが現状であるので、少しの時間でも確保していきたい。
・小学校・・・1年生との交流会内容の見直し、他学年とも交流もできたら・・・小学校区が２校区あるので兼ね合いも難しいです。保育園・・・同じ校区内の保育園との交流がないので、保育園とも相談して交流会をもちたい。
・研修をどうとらえるのか、少しスタンスを変えて学び合う機会としてとらえると、短時間でも出来ると考え増やしたい、タイムリーに研修することが大切と思った。
・継続している幼小連携なので現状のまま、もう一度見直し学びの多い質の高い交流となるようにしたいと思います。
・幼小連携を推進することは負担になるが、小１プロブレムの解消や、小学校児童にとっても良い効果があるから。
・こども園になるにあたって、合同で学ぶことは大切だと思う。しかし、それぞれが色々な事情もあるので、研修が負担になるいと意味がないと思う。
・現状は、今までしてきたものを今年もするというものが多い。今後は、計画、振り返りの時間を持ち、進めていきたい。
・今回参加させていただいて、幼小の交流を無理なく日常的に続けていくことは、可能であるし、大切であると感じたから。
・回数を増やすとしても無理のない回数を追求したい。そして、合同研修（交流）の質的向上をめざしたい。
・1年間に幼と小が顔を合わせる機会をつくりたい。

資14

b．実践校園以外の園でも「自主交流」を広げることができると思いますかという質問に対して、できると思った理由について。

・各校園の実態に応じた取り組みを聞かせて頂いて、連携方法がいろいろあると考えることが出来ました。
・自主交流についてのコメントを多く聞くことが出来き、子ども同士の交流がすぐには難しかった場合には、もの、ことのつながりで考えることが出来るということがわかったので、進めていきたいと思った。
・立地条件であきらめていたが、交流の方法は色々あることに気付いた。
・時間を決めて無理なくできることをしたら良いと思う。
・それぞれが意識を高めていけばできると思います。
・全校園無理なく互いのカリキュラムの中から実践できるよう考えられた。内容であったから自分たちにもできると思った。
・自校園では続けるということができていないので、続けるというところに視点をおいていく必要がある。また、続けることをすると広げることも出来ると思う。
・少しのきっかけでお互いがやりたいと思うことで出来ることと感じたから。
・校園長兼務のため、子どもたちから出た思いをすぐに自主交流につなげやすいかと思います。
・研究取組を聞かせて頂いて、教師の意識の持ち方と工夫で、できると学びました。
・視点を見直すと、人、物、事の何かの中で交流は出来ると思いました。
・無理のない範囲で交流していくことで子どものスムーズな成長につながっていくと思った。
・教員の心がけ次第で、少しずつでも進めていけるから。
・校園ごとの理解があってこそ成り立つものだと思う。一方だけではなく学校側の理解ももっと広がればよいと思う。
・何も行動を起こさなければ何も始まらないと思います。少しずつ話をする機会をつくることなどをすると一歩進むのではないでしょうか。
・学校園の所在地が離れていると交流がとりにくいところもあるが工夫により交流は深められると思う。まずは交流と理解が必要ですね。
・物理的な問題はあっても、交流は可能であると感じたので。
・「自主」という言葉についての理解度は高い低いがあるように思うが、よりよいかかわり合いは広げられると考えるから。
・時間の打ち合わせを行うことで、少しでも広げることが出来ると思う。どこかで折り合いをつけたければいらないが。
・小学校との温度差がある。できる交流は参考にしたいと思います。
・小学校の思い、保育園の思い、幼稚園の思いや考えがあると思うので、双方向となった時の難しさがあると思いました。
・このような研修会によって、いろいろな小学校と幼保が共通理解していける部分があると思うので、前向きに考えていくことが出来るのではないか。
・他校園でも例年している交流があると思うので、その中で自主的な活動を重視していけばよいと思う。
・お互いに知り合うことが必要だと感じているから。

ｃ．実践校園以外の園でも「非指示的指導」を実践することができると思いますかという質問に対して、できると思った理由について。

・交流を１回限りにするのではなく、つながっていくように計画し、子どもたちの中で「一緒にしたい」「かかわりたい」という思いが育めるよういしていくことでできるようになると思った。
・子どもが主体的に考えることで、意欲がわき、どんどん考えることを楽しんでいる姿から、できると思った。
・子どもたちが自分で考える力をつけられるように教師がやっていくべきだと思います。
・幼稚園は基本的に非指示的指導のため。
・保育、教育の基本的な部分だから。
・子どもが主体的に活動していける環境や、遊びの中からなぜ、どうして、という探究心を引き出していけるような援助、声かけを保育者が心がけようと思う。また、依存心が高い幼児が多くなってきているがどうやったらできるか、すぐに手伝うのではなく、一人でできるようになるまで、共に考えたりヒントを与えたりして、その過程を大切にしていきたい。
・すぐに教師に聞くいのではなく、自分や友達と考えたり試してみたりするのは、教師の援助によって実践できることにつながっていくと思います。
・非指示的指導は子どもの主体性を伸ばす大切な指導方法であることから、この実践を日々の教育、保育に活かす必要がある。
・子ども自身が常に考えて選択していく力をつけていくことはとても大切だと思うので、常に非指示的指導をしていくという気持ちで保育していくことが必要だと考えるから
・子どもたちに自分で考えて行動する場面が必要となることがあるから
・子どもが中心となり、自分たちの遊びや生活を作っていくことは、自分たちが意欲的に生きていくということにつながると思う。教師の力量が必要だと思う。
・子どもたち自身が”交流したい”と感じさせる工夫は教師次第だと思うから
・保育を進めていく中で子どもたちが自主的にできるようなことを考えてき、環境を整えていきたいと思うから。
・幼小連携以外の普段の保育の中でも、子どもの「こうしたい」「こんなふうにしたらいいんじゃないか」という思いを引き出せると思います。それが、非指示的指導につながると思いました。
・与えるのではなく子どもたちに考えさせる、環境作り、場の決定も大切になってくると思います。非指示的指導を行うことで自主性を育てると思います。
・意識を持ち続けていくことが大切だと思う。
・子どもの自主性を大切に教育しているかだと思います。
・職員の共通理解や、日々の振り返りの中で一人一人が心に留めながら日々を保育していくことが大事であると思いました。
・非指示的指導ではなく「見通しを持たせて主体的な学びを大切にしていきましょう」と小学校側に提案すれば、非指示的指導をすぐに実践できると思います。ただ、時数の制限がありますので、多くの実践はむずかしいと思います。

d．今回の研修会に参加されてのご意見・感想について

・４校園の実践報告、取り組みを聞かせて頂き、各校園の実態に応じて、子どもの学びを頭におきながら、無理なく連携できるように校種間の文化の違いを知りながら、自園でも出来る連携を小学校に発信し、できることから取り組んでいきたいと思いました。「つづける」「広がる」・むすぶをキーワードを心に取込んでいきたいと思います。

・「つながっていきたい」とお互いが思わないと実現することは難しいと思いますが、今日の発表の園校は、交流が子どもたちにとって本当に活きたものになっていると思いました。それには先生方の大変さがあったと思います。「じゃあしましょう」でできることではないと思いますが、交流していけば、子ども達ももっと小学校への親しみ憧れの気持ちを持てると思うので、計画の見通しをしたいと思いました。

・大学の先生の６つのポイントについての話がとても分かり易かったと思います。またその中で現状を生かす小と幼との距離、現状、良いものへと変えていく考え方ひとつでうまく計画していこうと思えるヒントになりました。また、計画交流、自主交流について、もう少し詳しく意見交流したかったと思います。

・現状を工夫し深める。大人も子どもたちも積み重ね続ける、広がる、つなげる。そして、それは、力になる。そのためには、柔軟に対応できる計画と環境構成を豊富に用意し連携できた時が非指示的指導に少し近づくのかなと感じました。

・各校園の取り組みを聞かせて頂き、今後の自校園の取り組みを進めていく中で大変参考になりました。自校園でも取り組みを進めていく中で”計画と自主”とは何かと言うことがふり返りや分析していく中で互いに話し合い進めてきています。

・今日のお話を聞く中で次へとつなげるにあたりあらためて全職員で話し合いを進めていきたいと思いました。

・本日参加させていただいて、小学校が遠いからあまり協力的でないから等合同研修のやりにくさを言い訳にするのではなく、その現状をありのまま受け入れ、どうするかの工夫をすることが、子どもたちの経験の為に、教師がするべきことだということを大きく学びました。

・物を使ってのつなげ方は、子どもたちからも意見として出てきやすいものなので、どんどん活用していけたらなと思っています。記録の残し方や、カリキュラムへの取り入れ方をもっと研修していきたいと思いました。「自主交流」という概念、もう一度どこかの研修で学ぶ機会があればありがたいです。

・子どもの一つの計画した実践の中に、非指示的な指導をすることで子どもの主体的な自主交流が生まれると考える。幼小のふりかえりと打ち合わせの中でしっかり学びをつなげるために、学びや出来ること（生活習慣的なこと）どんな力はついているのか（グループで話し合う等）そんなことをしっかり伝え合えることと５歳のつけていく学びの力をどんなふうに小学校にわかるように、どう活かしていくか、課題はあるが重ねておきたいと思う。小学校と話し合う機会（研修）の在り方が課題であると思う。

・学びの連続性は誰もが大切であると認識しているので、幼小連携を無理のない形で最大限の効果につながる取り組みを進めるにあたっては、きっかけとなる計画の打ち合わせをしっかりしていかなければならないと考える。

・子どもたちの期待や喜び楽しみを重ねていくことで計画交流から自主交流へとつながっていくのではないか。
・今日参加することで、自園の交流連携をもう一度見つめ直すことが出来ました。この時期、来年度に向けてのまとめとして、小学校に何かの形で伝え、幼稚園の中でも話し合い、一歩前進したいと思いました。
・保幼小連携の取り組みがよくわかりました。自分が実践するなら、どうしていくのか、何を大切にしていくのか、考えるきっかけになりました。
・各校園とも「やらなければ」ということで素晴らしい取り組みの発表となっていると思います。今後その実践がどのような形で継続されていくのかを見ていきたいです。
・敷地の距離のむずかしさを考えるよりもまずは「やろう！」という意識からスタートして、地道に活動を続けることが大切であり、子どもたちの為になるのだということがわかりました。
・学校園のそれぞれの立地や人数の規模などで交流の厳しいところもあると思う。教師間で工夫して実践されていることから、学ぶことが多い会でした。
・事前の合わせ、後の反省会などきちんと時間を設けて取り組んでおられた。また、幼・小・保が互いのことを理解しあって進めていくことは、連携する上でとても大切なことだと思った。自園でも交流（小学校）はもっているが、教師間で決めた内容で行事を絡めたものが多い。もう少し、形式にとらわれない交流も考えていけるのではないかと思った。
・各校園の取り組みは職員間の交流、信頼関係をもつことにより広がっていくと思いました。自園でも前向きに取り組んでいきたいと改めて感じました。
・今まで交流と言うのは、子どもたち同士の交流の事だけを考えていましたが、「もの、ことの交流」「学びの交流」もあると知りました。勉強になりました。
・各校園の取り組みがよくわかった、幼保小連携の形は一つではないと思うので、今後、他の校園でも独自の連の仕方を模索していってほしいと思った。
・小学校からの視点での幼保小交流について知りたい。
・各校園の取り組みを聞いていて、連携のとり方のヒントをたくさん教えてもらったと思いました。自園では、形式的に毎年していることで、交流を重ねているようで、園児は楽しみにして喜んで参加していても、それで終わってしまっている状態です。次へ広げられるように園からもっと声をかけて職員間の交流からやり直し見直していかなければいけないと思いました。
・日頃の先生方の取り組みの報告を聞いて、自分の園ならどうだろうと改めて考える機会を頂いたと思います。子ども同士の交流は比較的取りやすい状態で小学校の先生も積極的に声を掛け合って下さっています。職員同士も理解をしながら、地域の中の幼稚園、小学校、中学校としての役割についても再認識していきたいと思いました。交流はとり易いですがお互いの職員が一緒にふり返りが出来ているかと言えばその点が課題だと思いました。
・”できることから一つずつ”の心で教師一人一人が考えていく大切さを感じました。どんなことが”交流”としてとらえられるのか柔軟に考えていきたいと思いました。

資14

・この合同研修を繋げていく、広げていくことが奈良市の子どもたちの未来につながっていくと、おっしゃっていたことが印象的でした。保幼小の連携をもっと勉強して理解していく必要があると感じました。
・計画を積み重ね体験交流を重ねることで広がり繋がっていけるのだと思いました。
・様々な実践の内容を聞くことが出来、勉強になりました。交流の仕方は園や学校の立地条件や行事等その園や学校により工夫されており、決まりのない中で無理なく、進められていることが分かりました。また、”交流”という概念について改めて考えさらに交流を深めていきたいと思います。
・保幼小の物理的環境や今までの交流の経緯によって、各保幼小の連携の仕方にも特徴があるのかなと思いました。連携することにより園児にとっても興味の刺激や広がり思いや憧れなどを持ち、関わり方を学んでいける大切な教育の一つだと感じました。
・それぞれの環境によって交流の仕方は異なると思いますが、教師間の繋がりの大切さを改めて感じました。忙しい中で、短い時間でより効率的に打合せやふり返りなどを行う工夫が続けていく１つのポイントになっていると思いました。
・神功の保幼小の交流はとても楽しく子どもたちがイキイキと交流している様子が感じられた。固い枠、考えにとらわれず、子どもたちの思いやアイデアでより楽しい交流が深まり子どもたちが育ちあう素晴らしさを感じました。

資料１５　：　　実践後のアンケート調査④　集計（記述式）より【参加者】

◇　実践を通して気付いたこと

①子どもの様子から分かったこと

園児

・鉄棒で小学生が見たことのない技をしていて、興味をもつ園児に１年生が教えてくれる園児もその技をじきに身に付けることができ、異年齢でのかかわりが子どもの成長に大きな意味をもつと感じた。また、友達が成功している姿を見てやる気になり、友達ができた時、一緒に喜ぶ姿が見られた。このように、教師が直接知らせる経験だけでなく、子ども同士で刺激を受けて「やってみたい」「おもしろそう」と意欲を高めることが、学ぼうとする姿に繋がっていくのではないかと考える。

・クラスの友達に広げていくことが出来たので遊びが広がった。

・交流の積み重ねが子どもの意欲を高める。

・２年生の子どもたちがやさしく声をかけてくれることで、園児が自分の気持ちを伝えたいという気持ちが強くなり、楽しかったこと気づいたことを話したいという姿が見られた。

・交流活動を通して、園の遊びも広がった。

・一緒に遊んだお礼がしたいと、子どもたちから「手紙がかきたい」という声が聞かれ、手紙づくりができるようにした。

児童

・懐かしい母園の先生に会えることをとても楽しみにし、交流への意欲や期待に繋がっている。

・２回目だったぶん落ち着いてゆとりをもって交流できた。

・２年生なりに交流活動の内容を一生懸命考え、子どもたちの中で意見を出し合う姿が見られた。

・園児が楽しめるように手をつなぎ、背をかがめて同じ目線で話しかけていた。

・事前に話し合ったことで、小学生がリードし、自己発揮する姿が見られた。

・１年生は学校に戻り次は何を読もうかという話をしていた。

・１年生は園児にあこがれの眼差しで見られたことが、次への意欲となり、交流への期待に繋がった。

資15

②実践報告及びカンファレンスからの学び（実践校園間）

・非指示的指導を意識しながら、教職員がタイミングよく声をかけることで、子どもの意欲につながると思った。
・しっかり打合せをしていたことで、臨機応変に対応できた。
・小学校の先生が子どもたちにやさしく語りかける様子から、教職員の子どもへのかかわり方の大切さを再確認した。
・子どもがつくり出す連携を大切にする。
・今後の取り組みについて方向性を明確にする。
・５才児の学びを知ってもらう機会を持つ。
・自主交流・非指示的指導について話し合う。
・５才児の担任が小学校の授業の様子を見に行き、互いの教育内容を理解する機会をもった。
・交流活動で小学校が企画したシャボン玉遊びに子どもたちがたいへん興味をもったことで、交流後、シャボン玉液の調合についても教えてもらい、保護者にも啓発することができた。
・その日の様子を絵日記にかき、ふり返りの機会をつくることで、子どもが感じたことや楽しかったことなどがわかり、交流後の教職員間でのふり返りで報告した。
・計画内容を子どもの興味に応じて臨機応変に変更・対応することで、子どもが主体的に行動し、交流活動が充実した。
・ふり返りは、時間が取れにくかったが、その日にするのが大事だったので掃除の時間に１５分と決めておこなった。
・合同交流でわかったことは、次への期待が持てるということ。
・限りがある時間だからこそ、時間の使い方も大切だと感じた。
・引っ張らないで、引き出すのが大事という共通理解を得た。
・代表者の教職員で打ち合わせを行い、スムーズに短時間で事前・事後の打ち合わせができた。
・小学校の単元に園の保育内容と重ねて交流内容を工夫する方法が、子どもの学びにつながりやすいと感じた。
・今回の交流で無理のない範囲で連携できたと思う。
・教職員の信頼関係が連携を結ぶと感じた。
・非指示的指導については子ども自身が考えるように教師の声かけをする。
・クラスの先生を窓口にしてコンパクトに１５分で伝え合えるのがやはり連携の工夫になると思った。
・交流となると気合をいれるので土台となる単元をもって活動できたほうがいいという話があった。
・保育園は、時間の確保が難しいので、お昼寝の時間を利用して、他の先生に入ってもらって幼保小での打ち合わせを行っている。また、ふり返りなど、要点をコンパクトにまとめて、短時間でできるようにしている。
・子どもの伝え合いの時間を重視する。

・交流は社会参加につながる力をつけるきっかけになる。
・互いを知りあうということで、夏休みに幼稚園の遊びを見てもらい小学校の授業を見せてもらい知ってもらうことが大事。どのように知り合うのか代表者会議で研修を深めて、それを全体に伝えて、その後全体で参加する事前事後の振り返りを行っている。
・実践を通して、非指示的指導は、子どもの主体性が大事であることを幼小で共通理解した。

資15

資料：１６　　幼小の自然交流【奈良市立済美幼稚園】

事例①　５月　「春の草花をみつけよう」（幼児・保護者）

草花を使ってままごとのごちそうやジュースを作ったり、カップに入れて生け花をしたりして遊んでいる姿を見て、小学校の教頭先生から「草花を使った遊びをしょう」と声をかけてもらったことがきっかけとなり、保護者も一緒に、ビオトープに咲いている草花の名前を教えてもらったり、草花を使った遊び（くさずもう）を一緒にしたりして、興味や関心が深まり、遊びに活用するようになっていった。

※日常的にかかわれる環境があることで、幼児の遊びの様子を見てもらえたり、園からも幼児が草花を遊びに取り入れていることを伝えたりしたことで、理科が専門の教頭先生が草花を使った遊びのおもしろさを伝えてくださる関係ができた。

事例②　６月　「だんご虫を見つけよう」

4 歳児も少しずつ園生活に慣れ始めた頃、園庭のプランターの下にいるだんご虫を探すことに夢中になっていた。そこへ、小学校（1 年生）の児童がだんご虫探しにやってきた。「だんご虫は、葉っぱの下にいるねんで。」と教えている。観察ケースに「砂入れよう」「落ち葉がえさやで」と児童が話している様子を聞いている。その後、ミニ図鑑を持って園庭にでかけ、友達と調べたりして毎日だんご虫探しを楽しむようになる。

※だんご虫探しという同じ目的を持つ児童が、友達と会話する内容にとても興味を持ちそばにいったり一緒に探したり、何気ない会話を聞いてだんご虫の生態を知ったり、食べるものに興味を持つようになった。

事例③　６月～7 月　「ビオトープの池でザリガニつりをしよう」

ビオトープにある池をのぞいていると、せせらぎの透明な水のところにザリガニを発見した。「ざザリガニつかまえたいな」「どうしたらとれるの」と関心をもつ。毎年この時期になると児童もやってきてザリガニつりが始まる。小学校では、水槽に入れ教室で飼育し、生長観察をしているようだ。児童のそばで、釣り方を見ている。「棒だけやったらあかんわ」「何かえさがついていたな」といつも自分たちがしているやりかたとは違うことに気付く。つりあげるタイミングや持ち方など同じようにしてみたいという気持ちが高まる。
幼児の気持ちに寄り添い一緒に用具やえさの準備をする。
中休みに児童がやってくると一緒にザリガニつりを楽しんでいる。

※身近な場所で、児童の様子を見たり、方法やこつなどを教えてもらったりすることで、幼児の思いが実現し満足感が得られた。釣り上げた喜びから、大切に飼育・観察し、絵画表現をしたり、リズム表現をしたりして経験したことが次の活動にいかされていた。

事例④　9月　「リレーをしよう！」

小学校では運動会に向けての活動が増える。かけっこ、ダンス、リレー、玉入れ等、幼稚園と共通する内容の種目、学年が上がるにつれて高度な内容種目がある。普段から活動の様子がよく見える環境にあるため、幼稚園の築山の上から見たり、運動場に行って応援したりする姿がある。

園庭で 5 歳児がリレーをしていると、中休みに 5 年生の児童　がやってきて「よーい！の足は、一歩下げるねん」と、格好をして見せたり、「手をしっかり動かした方が早く走れるよ」など、走るコツを教えてくれたりする。一緒にリレーをすることも実現し、意欲が高まっていった。

※児童は、先生から教えてもらったことを幼児に分かりやすく伝えたり、励ましてくれていることを機会ある事に小学校の先生に伝えると「〇〇くん、そんなふうに教えられるようになってきているのですね」と、成長したうれしさを話されたり、幼稚園の活動に関心を示したりして、子どもたちの学びや育ちを話し合う機会になっていった。

事例⑤　誕生会

誕生会のお楽しみコーナーに、校長先生が手品を見せてくれました。ハンカチ増えたり消えたりする不思議さや校長先生のユーモアいっぱいのパフォーマンスに子どもたちは大喜びをしていた。顔を見ると自分から挨拶をしたり、触れ合ったりして親しみを感じている。

資16

事例⑥　1月　「一日体験入学」

日頃から自然交流をしている 5 年生の児童が当日ペアになって案内役になってくれた。小学校の先生から説明を聞く。（約束ごと・集まる時間・1 年生の教室に行く時間・チャイムのことなど）知っている児童に案内してもらえることで安心し、自分から知りたいことを尋ねたり、詳しく教えてもらったりして学校探検ができた。1 年生の教室では、音読発表を聞いたりランドセルを持たせてもらったり、椅子に座ったりしてちょっぴり小学生になった気分を味わっていた。

【年間を通して】

（例）

・縄跳び
・鬼ごっこ
・ドッジボール
・ぶたごやゲーム
・中あて
・リレー
・絵本の読み聞かせ
・体操
・鉄棒　など
・学校の中庭で弁当を食べる

【年間を通して】

◆　特別な支援を必要とする幼児に対する支援の在り方を共に学び合うようにしている。

支援学級の先生
クラス担任の先生　}

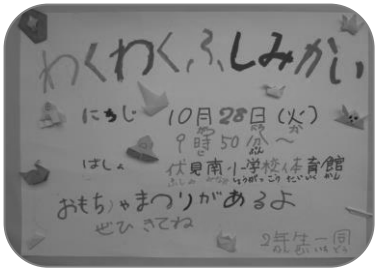
と連絡を取り合い、園児の様子をいつでも見に来てもらえるように連携している。

また、小学校の授業参観を見に行き、学校生活の様子や卒園した子の育ちやその後の様子を見に行ったりしている。園内研究会には、指導案と個別の支援計画などの資料をもとに観察をしてもらっている。

※　授業時間の合間や中休み、昼休みなど学校の先生が互いに時間調整をしながら観察に来てくださり、その後に、その子のもつ困り感にどのようにかかわると効果的か。また、発達の姿から見る適切な支援の在り方や幼稚園生活の中での取り組みを知ってもらい、入学後もその子にあった支援の在り方を継続していけるように、スタートアップシートを活用している。

資料：１７　　幼保小交流と施設共用の工夫【奈良市立伏見南幼稚園】

わくわく伏見会(保幼小交流会)10 月 28 日（火）



＜ねらい＞

○　手作りおもちゃで、楽しんで遊ぶ。

○　2 年生に憧れの気持ちや、小学校入学への期待感をもつ。

＜交流会に向けての打ち合わせ＞

1 回目　9 月 9 日（火）

内容：日程確認、人数確認、交流会の大まかな流れについて

2 回目　10 月 3 日（金）

内容：2 年生が作るおもちゃの紹介、交流会の具体的な流れ、持ち物等の確認

＜交流会の様子＞

1 週間前に、2 年生手作りの招待状が届く。

体育館で、保育園の友達と出会うと、回を重ねていることから、知っている顔を見かけると、自分から手を振ったり挨拶をしたりする様子があった。

まず、保幼それぞれが運動会の演技を披露し、保育園児が組み体操をしているのを見て、「あんなんできんの！すごいなぁ。」と、驚いたり、「私もやってみたい。」と、一生懸命に技を見て覚えようとする姿があった。

2 年生の手作りおもちゃで遊ぶ時は、グループに分かれて、14 種類のおもちゃのコーナーを回る。2 年生が、各グループで、おもちゃの遊び方の説明をすると、兄弟関係で知っているお兄ちゃんやお姉ちゃんに親しみをもち、「〇〇君のお兄ちゃんに教えてもらった。」と、嬉しそうにしている姿もあった。

え恥ずかしさから、なかなか遊び込めない幼児もいたが、2 年生の子が優しく声をかけたり、「これ簡単やから、見てて。」と、何度も遊んで見せてくれたりするうちに、少しずつ緊張もほぐれ、笑顔で遊ぶことができた。

交流会から戻る道中では、「あのおもちゃ作れそう。」「楽しかったなぁ。」など、友達と思い出しながら話す姿が見られた。

資17

資料：１８　　私立幼保園と公立幼保小の連携【学校法人ひかり学園ひかり幼稚園】

ａ．保幼小連携推進委員会

場所：六条小学校図書室　参加：六条小学校　六条幼稚園　ひかり幼稚園
京西保育園　みどりの園保育園

第１回　日時：平成２６年５月１３日（火）１６時３０分～
議題：　1、１年生の様子について
2、今年度の取組について
3、１学期の交流について
4、六条小校区保幼小連携推進研修について

第２回　日時：平成２６年９月１日（月）１６時３０分～
議題：　1、１学期の取組
2、夏季研修について
3、２学期の取組と今後の予定

第３回　日時：　平成２７年１月 13 日（火）１６時３０分～
議題：　1、2 学期の取組　2、３学期の取組　3、総括について

第４回　日時：　平成２７年３月９日（月）予定

ｂ．交流会について

第１回　日時：９月１８日（木）　３限目　（10：50～11：35）
場所：六条小学校　１年の教室
参加：六条小学校１年生　ひかり幼稚園年長児　みどりの園保育園年長児
内容：「ともだちになろう」
ペアになり自己紹介、ギョウザ遊び、フォークダンス、
ダンス（妖怪ウォッチ）

第２回　日時：１１月２６日（水）１０時～１１時
場所：ひかり幼稚園第二園舎　ホール
参加：六条小学校１年２組・３組　ひかり幼稚園年長児
伊藤ふくお氏　近畿森林管理局２名
ANC（赤膚山ネーチャークラブ：地元ボランティア）４名
内容：「森の幼稚園」ネーチャーゲーム等を予定していたが、雨天の為、昆虫生態写真家伊藤ふくお氏、近畿森林管理局の方々指導の下、大亀谷の希少生物についての話を伺う。

ｃ．教員等間交流について

研　修　　日時：平成２６年８月１日（火）場所：六条小学校　図書室・体育館
参加：六条小学校　六条幼稚園　ひかり幼稚園
京西保育園　みどりの園保育園
内容：５校園の教員等が共同で製作をし、出来上がった作品で遊び方の意見交換をした。

事前打ち合わせ

９月　１日（於：六条小学校　交流会の打合せ）

参加者：六条小学校２名　ひかり幼稚園２名　みどりの園保育園２名

１０月３０日（於：ひかり幼稚園　森の幼稚園の打合せ）

参加者：六条小学校２名、ひかり幼稚園３名、近畿森林管理局１名、伊藤ふくお氏、ANC１名

＜感想及び反省＞

・初めは子ども達も緊張している様子だったが「お兄ちゃん優しかった」「また会いに行きたい」等声が聞こえた。５年の授業風景では「小学校って、こんな所なんだな」と興味と学習への憧れを抱いたようだった。

・教師間交流では、各校種の先生方と意見交換でき、カリキュラムやねらいの違いなど少しだが知ることができた。小学校の先生方にも幼稚園教育への興味を示していただき、有意義な交流だったと思う。

・今年度は、幼稚園と小学校の日程が合わず２回しか交流できなかった。来年度は普段の授業の様子を見る機会をもう少し増やしていけるよう、協議検討していただけたらと思う。

奈良市幼保小合同研修推進委員

清水　益治	本山　方子	横山　真貴子
岡澤　哲子	掘越　紀香	山口　善嗣
今西　満子	松本　知子	村田　三美
浅田　悦子	東畑　年昭	林　陽子

研　究　部　員

松島　久美	織田　由起子	木下　須美子
米田　愛華	田中　美香子	山中　裕美子
長浜　佐知子	小村　有貴	中川　克則
和田　江利子		

【事務局】

奈良市子ども未来部	部　　長	寺田　耕一
	理　　事	石原　勉
こども園推進課	課　　長	岡﨑　利彦
	指導主事	和田　江利子
		宮本　克子